

---

# 双子の弟は麒麟児

麻美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

双子の弟は麒麟児

### 【Nコード】

N63500

### 【作者名】

麻美

### 【あらすじ】

死んだ男がうちはサスケの双子の弟としてチート転生するお話。色々と苦悩しながらも恋愛とか戦闘とか日常とか楽しんでいます。

この作品は『世界を照らす』の息抜き作品なので、更新はかなり遅めだと思います

## プロローグ（前書き）

ワンピースの方の息抜きで書く作品なので更新は遅めだと思います。  
それでもいいなら見てください

## プロローグ

「転生してー!」

「了解です!! 女神様!!」

「ありがとうございますー!」

なんか俺の目の前に居る幼女はテンション高いです。

幼女…… 幼女…… 幼女…… じゅるり      じゃなくて、ここまでの話を要約しよう。

俺は幼女（女神らしい）の手違いでテンプレ的に殺されて、保身の為にテンプレ的に転生させられるらしい。

俺としては平凡な生活に飽き飽きしていたから問題ないが

「特典とか貰えるよね？<sup>テンプレ的</sup>流石に」

そう言った類のものがないと困るんだわさ。

だって転生先が【NARUTO】の世界なんだし、丸腰とか死に行く様なもんじゃん。

「仕方ないですね。それじゃあひ「え?」……ふ「は?」……み「はあ」……よ「死のう」……いつ「うつしや!」……はあ」

なんか幼女の女神様は特典を5つもくれるらしいよ!

ホント神ってだけあって器大きいんだね、信じてないけど。

「でも大したことないんでそこまで大きなものをあげられませんよ？」

「えゝ……まあいいか。不満だったら増やしてもらえばいいだけだから」

なんか憐れむ様な目で見られてる気がするけど気のせいだよな、うん。

「それじゃあ1つ目はイザナギを使っても、何をしても失明しない万華鏡写輪眼、右目が天照で左目が月読でいいや。2つ目はチャクラが九尾と同等。3つ目が全ての性質変化を扱えて」

「少し待って下さい。全ての性質変化を扱えると云うのは出来ませんが、それで5つ分ですよ？」

「どういう事？」

「火・風・水・土・雷の5つの性質変化がありますよね？」

「うん」

「だから火の性質変化を扱えると云う事で1つの特典です。それと写輪眼の方もです。写輪眼で1つ、万華鏡写輪眼で1つ、失明しないと云う点で1つ、右目に天照で1つ、左目に月読で1つとなります」

「ケチか、お前は。幼女ならもっと寛大になれ」

「何ですか！？それでも俺は寛大な方ですよ！？」

俺……だと！？

まさかの幼女で俺ッ娘なんて……萌えねえかな！？  
てつきりボクッ娘だと思つてたから急所を突かれた感じた……。

「じゃあねえ。それじゃあ特典の数を20個に」

「怒りますよ？俺だって5つでも限界なんですから」

「……仕方ないか。幼女に説教されるなんて惨めな思いはイヤだからな。

じゃあ1〜3つ目は失明しない万華鏡写輪眼。両目に何が宿ろうが文句は云わん、たぶんだが。

4つ目はチャクラの量が多め。出来れば尾獣並みくらいで。これ以上増えなくても問題はない。

残りの1個は輪廻眼で。これなら全部の性質変化を扱えようが特典としては1つなんだから文句はない筈だろ？」

「……むう、仕方ないです。1つは1つですから。それでも負荷はつけますけど（ボソッ）」

最後になにか訊こえたけど……なんだ、この幼女はわかってるじゃないか。

益々食べたく　　じゃない、邪な思考を振り払え、俺！

「それじゃあ次は容姿の設定ですね。向こうでは今までの容姿では不憫なので自由に決めて構いませんよ……ププッ」

あの幼女俺を見て笑いやがって……そんなに憐れむんじゃねえ！

笑いながらなめくじを見る様な目で俺を見るな！

「……このままでいい」

「ダメですよ！！そのままだったらあなたを見る人が可哀相じゃなくて世界が歪みますから！」

あの幼女……今のが本心なんだな？

「俺を見る人がどう可哀相になるんだ、ああ！？」

「ちっ、近寄らないでください！汚れます！死にます！お嫁に行けなくなります！けだものが近付くと妊娠するって知らないんですか！？」

「そんな常識はこの世にはねえ！」

「でも『伝説の勇者の伝説』でそう言っていました！」

この幼女はどんだけ地上の娯楽に詳しいんだよ。

ッて云うかあの世界でも近付いただけじゃ妊娠はしないけどな。

「……まあいい。容姿はあんたが決めてくれ」

「ええ、面倒です。だからもううちはサスケの双子の弟として転生しちゃってください！顔はうちはイタチに似せて、髪と瞳は銀色にしときますから！」

これは幼女の好みか！？そうなのか！？  
そして俺は顔だけでサスケに恨まれろ！？

「それじゃあ次は名前です。余ってるのが3つ、『ネズミ』『ドック』『タイガ』です。さあどれ!？」

「タイガで!全力でタイガで!」

他の2つは俺を名前だけで蔑ませる気か?

それに何気に全部動物系で被せてきてるし、イタチの所為か!

「はい、それじゃあ行つてらっしゃい、汚らわしい」

ドゴオン!

なんか滅茶苦茶遠くからハンマーで殴られて、俺の意識はブラックアウトした。

最後まで俺を憐れむか、幼女め……。



## 第一話

えっと、早速だけど俺ことうちはタイガは3歳になった。

この3年の間に気付いたんだけどさ、俺は輪廻眼を持っていないらしい。

いや、持つてはいるのだが、それも劣化した能力だけ。

本来なら六道の力と全ての性質変化が使えるのだが、あの少女はイカサマをして見せた。

ほほう、俺に喧嘩を売るか、小娘。

なんて思ったりしたが、今更なのでどうしようもない現実。

それで肝心の輪廻眼の劣化能力だが、六道の内使えるのは天道だけで、外道と残りの五道は少しか引き出せない。

まあ引力と斥力を扱える天道の力だけでも満足に使えば充分だと思っただが、その能力さえもやっぱり5秒のインターバルが必要とされると云う負荷が課せられた。

そうそう、万華鏡写輪眼は産まれた時から開眼していたが、流石にお披露目して目立つわけにもいかなかったので隠しながら生活している。

「タイガ！」

俺の双子の兄貴は小さい頃はかわいげがあった。

必要以上に俺やイタチにじゃれてくるのは正直面倒だが、これも大人な対応で軽く受け流していた。

特にイタチは俺もサスケも愛している様で、これなら虐殺はされな

いだろうと内心ほくそ笑んでいたのは事実。

幾年か経って虐殺の日。

俺とサスケは一族を虐殺するイタチに意味の無い抵抗。

俺が本気でやってもイタチには敵わないだろうし、こんなところで能力の片鱗を見せるのもいかなものかと思うのでサスケと同レベルに見せておいた。

なのに、これは防衛本能と云うのだろうか、サスケを気絶させた後に俺も気絶させようとしたイタチだが、自然とそれを躲してしまつた俺がいる。

うわぁ、俺馬鹿だよ。

なんて思いながらもイタチの目を見る。

「……………」

無言で目を丸くして俺を見ているイタチが居た。

忍たるものポーカーフェイスが基本だぜ、イタチさんよ。  
なぐんて思っていたりしたが、俺も本当は相当驚いた。

サッ……シュッ！

「……………」

もう一度イタチの手刀。

だがそれも見事に躲して、更に驚く俺とイタチ。  
なんかもう身体が言うこと訊かないんだけど。

「ええい、ままよ！」

珍しく取り乱したイタチ。

彼はあることが写輪眼を発動させやがった。

「マジ勘弁！」

無意識のうちに俺も写輪眼を発動させて、イタチが掛けようとした催眠眼を無効化した。

流石俺、無意識のうちにここまでの抵抗を見せるとはな。

「……タイガ、その眼……」

「うちは一族なら開眼してもおかしくはないだろ？」

「……それもそうか。よくやったな、タイガ。これでお前も一人前だ。だが」

そこからはよく憶えていない。

憶えているのは寒気がしたことと、首裏に尋常じゃない痛みを感じたことくらいだ。

## 第二話

アカデミーの中は苦手だ。

成績トップのサスケがうちは一族を虐殺された事によりクラスの雰囲気は最悪。

かく言う俺はサスケとは違いナルト達と話しているのだが、やっぱり明るい雰囲気ではられない。

それも表面上だけで滅入ってなどいないのだが、クラスの雰囲気にそうしなければならぬのだ。

お陰でナルトやシカマル達、況してやいのでさえ俺と話すのを躊躇ってるし……憂鬱だ。

因みに言っておくが俺はアカデミーの成績は2位だ。

うちはの家紋に泥を塗るわけにもいかずその成績でやっているが、これほど面倒なものはない。

写輪眼・万華鏡写輪眼を隠し、全ての性質変化を扱えたり引力・斥力を扱える事を隠し、座学なんてアカデミー入学1週間で終えたことも、現在進行形で影分身に修業させていることも隠しながら暮らすのは結構大変だ。

それだけ頑張った甲斐あってアカデミーの連中とは仲良くなり、ナルトとも仲良くなれたわけだ。

「た、タイガ……！サスケくんを如何にかしなさいよ！」

ここでもさかのKY登場。

こんな空気の中でよく俺と喋れるよな、このデコリンは。

「よし、じゃあぶっ飛ばしてくる」

「そうじゃなくて双子なんだから慰めてあげてって言うてるの！」

「なんで俺がそんなこと。面倒なだけだ。それに俺が慰めるよりお前がキスでもしてあげれば？」

「な、なんでそうなるのよ……！！出来る事ならしたいけど……じやなくて！あんたはなんでサスケくんみたいにならないのよ！」

「なんでって……そんなの知るか。人の気持ちなんて人それぞれだ。あいつはイタチを憎む。俺はイタチに感謝する。その意識の差だろ」

「はあ！？一族虐殺した人間に感謝するなんてあんた正気！？」

ああ、このデコうるせえよ……。

もう少し声を静かにしてくれねえと

ギロツ

ほら、サスケに睨まれたじゃん。

「ヒッ！！と、兎に角タイガが如何にかしてくれないと……」

サスケの視線がそれほど恐ろしかったのか、デコはそれだけ言い残すと去っていった。

隣じゃ「サクラちゃんかわいってばよ……」とか言ってる将に正気じゃないアホはいるし、もう片方の隣には「チツ、めんどくせエ……」とか言いながら寝てるアホがいるし。

ツて云うか寝てる最中に面倒だとか言うなら寝るな、アホ。

「ね、ねえタイガ。あれ……」

後ろから訊こえたいのの声で振り返り、その視線を辿ると1人の勇者がサスケに立ち向かっていった。

彼の名は知らない、と云うか無いんだ、たぶん。

『さ、サスケ。そんなに落ち込むなよ』

『失せろ、屑が』

あ、勇者が1人殺られた。  
もう少し言葉巧みに攻められないものか。

「ご愁傷様」

それだけ告げて俺はいのの方に向き返る。

「いの、お前があの馬鹿を殺って来い」

「わ、私！？私は無理よ、サスケくん苦手だから」

これまた不思議な事にいのはサスケを好いていない様で、これに関しては驚かされた。

ところでところで、俺は基本的に旧家のヤツらにも、その親にも懇意にされている。

この人通りの良い性格を保持していなかったら今頃俺はサスケみたいに1人だったな、うん。

「じゃあねえ……」こはNO・3のシノに……」

「タイガが逝きなさいよ。デコリンと一緒にの意見でイヤだけど、同じうちは一族として、双子としてタイガが逝った方が良いと思うんだけど」

「逝くとか言うな。あの馬鹿兄貴に関わると本当に逝きかねん。だがいなの言う通りか。仕方ない、あいつをぶっ飛ばしに行こう」

そうして立ちあがった時

「よしみんな！今から合同授業を始めるぞー！」

と言ってイルカ先生が入って来たので、仕方なく席に着いた。

その日の午前中の合同授業も終わり、今は昼休み。

座学を合同でやる意味がわからないが、昼からも合同でサバイバル演習をやるらしい。

なんて面倒な……。

「タイガ！一緒にご飯食べるってばよ！」

「いいけどよ……あいつも誘ってやれよ、どうせ1人で喰うんだろうし、人数が多い方が良いだろ？」

ナルトがシカマル・チョウジ・シノ・キバを引き連れて、俺が爆睡していたところにやって来る。

それはいつもの事だからいいとして、今日は合同授業だったからく

のいちも一緒のクラスにいて、当然の如くヒナタもいるわけだ。  
例に漏れず、ヒナタはオドオドしながら弁当箱を持ち、何処かへと  
発とうとする。

「あ、それもそうだな。おゝい、ヒナタ！一緒にご飯食べるつてば  
よ！」

「え、え、わ、私!？」

「お前以外ヒナタなんていねえだろ……」

「そ、そうだね……！ーうん、ナルトくん、タイガくん、ありがとう  
う」

いつもオドオドして……ヒナタは疲れないのかなえ。

「いのも一緒に食うだろ？」

「し、仕方ないわね。そこまで云うなら付き合ってあげるわ……！  
！」

「誘っただけじゃねえか……」

いのは意味わかないくらい顔紅いし……まあ理由はわかるけど、そ  
こに触れたらダメでしょ。

「クツクツク、タイガ、いのはお前のこと　　ぐほあっ！」

あゝあ、キバ、変なこと云うからいのに鳩尾殴られちゃって。  
もう少し性格が真っ直ぐじゃないとヒナタは振り向いてくれないぞ？



「あゝあ、めんどくせエ。気絶したキバは誰が運ぶんだよ……」

「俺は無理だつてばよ」

「僕もお腹が減ってるから無理……」

「俺も運べない。何故なら今日の弁当は重箱だからだ」

「わ、私も無理よ！？キバが勝手に気絶しちゃったんだから！」

「私も無理だよ……」

全員が遠まわしに「こいつを運びたくない」と告げてくる。

かく言う俺も運びたくないから

「置いて行くか」

そう云う結論が導き出された。

三平方の定理よりも簡単な方程式で且つ一次方程式よりも簡単なものだった。

「それもそうだな。めんどくせエし」

「仕方ねえってばよ」

「僕も賛成だな。だってキバが起きるの待ってたらお昼休みが無くなっちゃうから」

「俺も賛成だ。何故なら今日の弁当は重箱で、食べるのに時間が掛

かりそうだからだ」

「そうね、勝手に気絶したんだし」

「ええ！？みんな酷いよ！？でも……仕方ないよね」

シカマル、めんどくさいを多用し過ぎだ。

ナルト、ライバル関係にあるからって仕方ないで済ませてやるな。  
チョウジ、昼休みはそんなに短くないから安心しろ。

シノ、誰も重箱に反応示さなかったからってもう一回言う必要はないぞ、どうせ2回目もダメだから。

いの、この原因を作ったのはお前だ。キバも勝手に気絶するほどアホじゃないんだ。

ヒナタ、ナルトに感化されて仕方ないで済ませようとするな。

「まあ……キバだし」

かく言う俺もキバだと云う理由で置いて行く事を決意した。

「俺の扱い酷くね！？ヒナタまで仕方ないで済ませようとしやがって……俺は何！？」

「き、キバくん起きてたの！？」

ワンワンと赤丸と一緒に吼えながら、キバは抗議の為に起き上る。  
ヒナタ……お前以外はキバの演技だって気付いてやってたぞ……。

「いつからだつてばよ！？」

「最初からだ！」

訂正、もう1人気付いてない馬鹿がいました。  
ツて云うか教室内でこれだけ騒げば流石に

ギロツ

ですよねえ。

やっぱりサスケくんは俺達の方を睨んできますか。

「うつ……さつさで行こうぜ？これ以上騒がしくなるのはめんどく  
せエ」

「そ、そうね。屋上で良いわよね？」

「問題ないだろ」

サスケの視線に晒された俺たちは途端に静かになり、それを気ま  
ずく思ったシカマルが提案し、いのが場所を提供、俺はそれに乗っ  
つて、8人揃って屋上へ行った。

サスケはいつか改心させてやるか、俺流の論法を用いてな。

それでも駄目だったら実力行使で改心させて      と、今はこんな

面倒なこと考えないで楽しく飯でも頂こうか。

### 第三話

「それじゃあ今から演習を始めるぞ！チームはフォーマンセル、班員はこつちで勝手に割り振らせてもらった。それで巻物探しをやってもらうからな！」

『えゝ！！』

俺たちは昼休みを終えて、演習場に集まっていた。そしてそこで説明を受けているわけだが、イルカ先生の言葉に数多のブーイング。

別にこの演習だけのチームなんだから文句言うな。まあ巻物探しにフォーマンセル組む必要があるのかは疑問だが、それも本物の忍者になった時に必要なことなのだろう。

「サクラちゃんと一緒に良いってばよ……！！」

何やら決意を胸に愛を燃やすナルト。

こんな純粋な子を騙すなんて……デコリン、恐ろしい娘！

「いのとだけは勘弁だな」

「シカマル、何か言った？」

「何でもねえよ……」

「私は誰とでもいいけど、出来ればサスケくんはイヤだな……。あの雰囲気でチームなんて組めそうにないし、タイガが一緒ならいい

けど……」

いや、いの。俺もサスケと一緒にのチームは勘弁だ。  
誰が居てもあいつが何かと雰囲気悪くするに違いない。

「僕はシカマルと一緒にだった方がいいな！それとタイガ！タイガがい  
たら早く終わりそうだし！」

チヨウジは相変わらず楽天的な考え方でなによりだ。

効率を考えればシカマル・シノ・いの・俺の4人がベストだな。

キバやチヨウジには悪いが……これも仕方のないことだ。

言わずもがなナルトはトラブルメーカーだし、ヒナタはオドオドし  
てるからな。

「俺もタイガとチームを組みたい。何故ならそれが最も効率よく演  
習を終えられるからだ」

そんなに高く評価してくれてありがとう、シノ。

「俺は誰でもいいぜ！

（ヒナタがいればな！！）」

なんかキバの心の声まで訊こえた気がするけど……気のせいかな。

「わわ、私はナルトちゃんとタイガと一緒にが良いな……」

「なんで俺まで入れる？」

「だ、だって他の男の子とはあんまり話せないし……」

そこまで言って顔を真っ赤にさせるヒナタ。  
そんな理由で一緒のチームになってもなあ……ま、キバよりはマシか。

「そこ！静かにしろ！」

『はい』

「まったく、お前らは……」

イルカ先生に注意されて俺らは生返事を返し、少しだけ静かになる。さっさと発表してくれないとまた騒がしくなるぞ？

「それじゃあ第4班、うちはサスケ、うちはタイガ、うずまきナルト、春野サクラ。この4人で行ってもらう！班長はうちはタイガだ！」

嘘……だろ！？

この問題ありありのチームでどうやって連携組めって云うんだ！それに班長なんて有り得んだろ……。

「（しゃゝんなろゝ！！要らないのが2人　まあタイガは良いとしてナルトは足手纏い　くっ付いて来たけど、サスケくんと同じ班だ！）」

サクラがそんな事を思ってそんな気がした。  
ツて云うかサスケがイヤな雰囲気全開なのによくそんな能天気で居られるな、あのデコは。

「サクラちゃんと一緒の班だってばよ……むふふ！」

ナルトももう少し頭使ってくればいいんだけどなあ……。先行き不安だ。

「残念だったな、タイガ」

「ギャハハハ！だっせーぞ、タイガ！」

ありがとうシカマル、そして俺に非は全くないぞ、キバ。

「タイガと一緒にじゃないんだ……。べ、別に残念とか思っていないからね！？」

「し、知らない人と一緒だったらどうしよう……」

いのはいつもの如くツンで、ヒナタは知らない人と同じ班になる事を懸念してかなり真剣に悩み始める。

ヒナタ……名前くらい憶えてあげて！

「次、第5班！奈良シカマル、山中いの、日向ヒナタ、油女シノ！班長は奈良シカマル、頼んだぞ」

「はあ！？マジかよ……。いのと一緒になんてついてねえ……。それに班長なんて……はあ、考えるだけでめんどくせエ」

「ヒナタ、頑張りましょ！」

「う、うん！いのちゃんよろしくね」

「良いチームだ。何故なら問題児のナルトが別の班だからだ」

「シノは俺をなんだと思ってるってばよ!？」

「……………」

「無視!？」

ナルトは相変わらずテンション高いなあ。  
これと一緒にの班……はあ。

「タイガも溜め息吐くな!哀しくなるってば……………」

「ナルト、静かにしなさい」

「いのまで!？」

なんか収集付きそうにないぞ…………。

因みに俺らがそんなことをしてふざけていた間にチョウジとキバの班も決まり、2人とも一緒にの班になった。

「さあ行くってばよ!」

「ナルト、うつさい!静かにしなさい!」

「サクラちゃん酷いってばよ……………」



ナルトもなんでこんなデコに恋心を抱くか。  
もしかして思考回路がショートしてるのか？  
機械なら直してやるがそうもいかんからね。

「……………」

サスケはだんまり極め込んでるしよ、マジやってらんねえ。

さつさと巻物見つけて演習を終わらせたいけど巻物を見つけれられる  
様なヤツはこのチームに居ないし、かと言って俺の実力を見せるわ  
けにもいかないし……。

「はあゝ、憂鬱だ……………」

「大丈夫か、タイガ？」

「ああ、特にはな」

問題があるとすればデコリンを好いているお前の頭だよ、ナルト。  
俺からすればこの状況よりそっちの方が心配だ、友達としてな。

「おい、タイガ。俺と勝負しろ」

「……………は？」

サスケが口を開いたかと思えばこれだ。

確かにこの演習場だったら多少なり暴れても問題はないと思うけど、  
演習中に私情を持ちこむほど俺も馬鹿じゃない。

だが向こうさんは違う。

敵意・殺意・憎悪・悪意・怨恨・害意…………… e t c

『負』と呼べる感情を剥き出しにして、俺を見据えている。

「俺と勝負しろと言っている」

「い、いきなりなんだよサスケ！」

「黙ってる、ウスラトンカチ」

「むつきー！！タイガ！こんなヤツやっちまええ！」

「どうしたのよサスケくん！」

「黙ってる、デコ」

あゝあ、デコとか云うからサクラが落ち込んだじゃって……。ナルトは俺に戦えたの五月蠅いし……。どうするかなあ……。

「俺と戦ってどうすんだよ」

「最も親しい者……つまり俺がお前を殺せば俺の眼には万華鏡写輪眼が宿る」

こいつ俺を殺す気かよ！？

まあ今のサスケにとってみれば俺が最も親しい者になるわけだから考え方としては間違いではないんだが……。なんだかなあ。

「お、おいサスケ！それ本気で言ってるのか！？」

「黙れウスラトンカチ」

「うつきゃー！！タイガ！こんなヤツ返り討ちにしてやれ！」

やれやれ、ナルトももう少し冷静になってほしいもんだ。

「落ち着け、ナルト。」

残念だがその勝負は受けられんな。」

「何故だ」

「考えてみる、俺にメリットがあると思うか？それに俺がお前に敵うとも思っていないからな」

「おいタイガ！何弱気なこと言ってるんだってばよ！そんなヤツさつさとやつちまえ！」

「ちよつ、タイガもサスケくんもやめてよ！今は演習中なんだから……！！」

俺はやる気なんてさらさらないんだがな、向こうさんはそれじゃあ気の沈まない様子で。

「じゃあないか。」

来いよ、クソ兄貴」

「ふんッ！」

俺の安い挑発に乗ったサスケはシュバババツと印を組み、大きく息を吸い込む。

おいおい、まさかここであれ使う気か！？

「火遁・豪火球の術！！」

」

「火遁・豪火球の術!!」

くっそ……。

サスケ程度の力量に合わせてチャクラ練るのも楽じゃねえ。  
お陰さまで火の弾と火の弾で相殺できたわけだが。

「2人ともやめてよ!!」

「サクラちゃん!?!」

「馬鹿か、あいつは!?!」

「……………」

サスケは無言のままさつきと同じ印を組み始めてるのに俺とサスケの間に割って入るデコ。

マジでふざけんな!

こんな事になるんならさつきとサスケを気絶させるべきだったな……。

「火遁・豪火球の術」

サスケはお構いなしに馬鹿の一つ覚えだし、こんなことでカカシとナルト含めやっていけるのか?

まあ俺は別の班だろうから気に病むことはないだろうし、胃薬も要らないだろうな。

「やり過ぎだ、クソ兄貴」

「ッ!?!」

瞬身の術を活用してサクラを助け出した後、そのまま脇に抱えてサスケの首裏を手刀で叩いて気絶させた。

それで術の発動も収まったからいいとして……イルカ先生に怒られるんだろうなあ……。

「おいデコ」

「な、何よ……!!」

「……何でもねえ。取り敢えずお前は適当な理由付けてこの馬鹿をイルカ先生のところに連れて行ってくれ。巻物は俺とナルトで探しておく」

「で、でも……!!」

「そうだってばよ!これはフォーマンセルの演習だから4人でやらないとダメだってばよ!」

「あのなあ……お前ら馬鹿か?これは任務と同じで、任務を一番に遂行するべきだ。その際に足手纏いになる様なヤツは切り捨てるし、足手纏いを連れて無駄な犠牲を出したくもない。

それに同じ里の意思を持つ者として嫌いな兄貴でも死なせたくない。その為には最善の方法、今で云う俺とナルトが巻物を探してお前がこの馬鹿を連れて帰る、それを取るべきだ」

「……………」

「これで満足だな?それじゃあデコは馬鹿を連れて行け。ナルトは俺と巻物探すぞ」

「……わかったわ」

「わかったってばよ」

これで一件落着……か？

まあ後はデコがどれだけ脳を働かせられるかが決め手だよな。

「ほれ。しっかり負ぶって行けよ？別にそいつの顔を引き摺って血塗れにしても構わんがな」

「そ、そんなことするわけじゃない！」

デコは俺が本気で言ったと思ったのか、少し引きながらも馬鹿を受け取った。

「そう云えばこの演習場に虎が入って来たらしいから気をつけろ」

「え！？」

「嘘だよ、ばーか。危ないから気をつけろって意味だ」

何か知らないけど俺がデコの心配をしたとでも思ってるのか、あのデコは顔を赤くしながら去っていった。

マジで虎とか入って来てねえかな……。

それでサスケとか食ってくれたら物語が穏やかに進みそうなのに。

「それじゃあ行くか、ナルト」

「サクラちゃん大丈夫かなあ……」

「あのデコなら心配ない。サスケがいるだけで元氣百倍なアホだからな」

「タイガ、それって俺がサクラちゃんの事好きってこと知って言うてる？」

「もちろんだ。友が道を踏み外したのを更生させてやるのもまた友の務めだ」

「どういう意味だってばよ？」

「気にするな。お前もその内真実に気付く筈だ、うん」

ナルトも長い間あのデコを見ていればあのデコに何の魅力もないことに気付くだろう。

それまでは実らない恋をしてくれ。

友の恋を応援してやるのも、また友の務めだ。

「やっと終わったってばよー!!」

演習も終わり、学校からみんなが散り散りに帰っていく。

俺も早く家に帰らないとなあ、なんて思いながらもナルトと共にアカデミーの前で一息吐く。

結局あのは巻物も簡単に見つかって、イルカ先生の御咎めも無しでラッキーだった。

こればかりはイルカ先生を丸めこんでくれたデコに感謝だな。

「これからどうするってば？」

「これからって……何処か寄るところでもあるのか？あるなら付き合っけど……どうせないんだろ？」

「そ、そんな正論を言ったってばよ……」

「ま、用事もないならさっさと帰ろうぜ？帰りたくないなら何処にでも付き合っが……それともウチにでも来るか？」

「いや、いいってばよ。タイガの家の雰囲気には耐えられないってばよ」

そんな咋に嫌な顔をしないでくれ、ナルト。  
いくら俺でも哀しくなるぞ？

それにそんなイヤな顔される様な雰囲気でもないんだけどな。

「それじゃあ帰ろうぜ？」

「おう！」

そのまま家に帰ってもいいけど……ナルトと別れた後にも買い物して帰るか。

『あいつ』も待ってる事だしな！



#### 第四話（前書き）

今回この話のハーレム要員その1が出てきます。  
まあ所謂TSですので、勘弁を。  
あと後書でアンケート的な何かがあります

## 第四話

「ただいま〜っと」

返事が返って来るわけもないが、習慣化しているので特に気に留めることもなく挨拶をする。

今は今まで住んでいた家に住めるわけもなく、火影様に許可を貰って里の端の方にある家に住んでいる。

ここは空き家だったから特に問題はないんだよな。

「お帰りなさい、タイガくん……」

声が……した？ もしや幽霊？

な〜んて、ある筈もなく、ここにはもう1人住んでいる。

「起きてたか。ただいま、白」

奥の部屋に進んでいくと、床に伏した病人がいる。

それは白く透き通り、滑る様な柔肌を持つ美少女の様な美少年

ではなく、本物の美少女。

こうなった理由まではわからんが、取り敢えずTSってヤツだな。

拾って火影様に許可を貰うのは大変だったけど、今ではこうして一緒に住んでるわけだ。

経緯の説明はまた今度で。

「今日はどうでしたか？ 合同演習でしたよね？」

「どうって……特に何もないな。強いて言えばバカ兄貴に喧嘩売ら

れたくらいか」

「サスケさん……ですか。確かに一族の虐殺は哀しいでしょうが、タイガくんに当たるのは筋違いじゃありませんか？」

白の言う事は将に正論なんだよ。

白自身母親を里に殺されて、白も命を狙われたわけだから。

サスケと俺は命があっただけマシと考えるのがもつともな筋。

「俺を恨むのは構わないさ。どうせあいつじゃ俺には勝てんから」

「喧嘩して……またわざと負けたんですか？」

また、と云うのはアカデミーの成績の事だろう。

因みに白もアカデミーに通ってるぞ？

今日は病気で行けなかったただけだからな。

序でに言う和白の成績はくのいちでトップだ、座学以外は。

「今日は勝たせてもらった。ホントは引き分けくらいが望ましかつたんだが……デコが邪魔してな」

「サクラさんも無茶をなされるんですね。でも頭でっかちな彼女にしては突発的な行動は珍しいですね」

なんか白にはその時の情景が伝わってそうだから説明はしなくても大丈夫そうだな。

「あの時は俺も焦った。お陰で結構マジで力使ったわ……」

白は唯一の俺の理解人。

俺が異世界人だと云う事以外はすべて理解していると云っても過言ではない。

「タイガくんも大変ですね。大変と云えばもう1人、ナルトさんもです。里からの迫害は未だあるのでしょう?」

「まあ俺とつるむ様になつてからは少なくなつた方だ。里の英雄を馬鹿にするなんて馬鹿げてるだろうさ。本来なら尊敬されるべきヤツなんだよ、ナルトは」

「タイガくんはナルトさんの事になると熱くなるんですね。友達想いで素敵ですよ?」

ニコリと微笑み白。

くッ……本物の女になつて更なる磨きを掛けたか……!

「あんま喋ると身体に障るぞ」

「ボクはタイガくんになら何処を触られても構いませんよ?」

「それじゃあ遠慮なく　じゃなくてな……。あんま俺に悪乗りさせるな。冗談ってわからない時だつてあるんだぞ?」

「ボクはいつでも真面目ですよ?」

そんな円らかな瞳で俺を見られても困るだけだから……。

でも本気でそんなこと云われてもらえるつてのは嬉しいものさ、男として。

同棲している女の子からも信用されない様じゃやってられんからな。

「もう寝ろ。これ以上はホントに障るから」

「いえ、タイガくんが寝るまでボクも起きてます」

そんなニツコリ笑顔で云われてもなあ……。

「勝手にしろ。                    さっさと用事済ませるからあんまり動くなよ？」

「はい」

はあ。なんで白はそんなに嬉しそうなのか……。  
さっさと飯食って、それから家事も全部済ませて寝ようか。  
そう思って寝室から出てキッチンに行った矢先

「やつほー！！タイガ！白ちゃんが風邪だからご飯食べられないだろーと思っ作りに来てあげたわよ！」

「くっそ……。なんで俺まで……。めんどくせエ」

「シカマルは必要だ。何故なら俺たちを家に入れまいとするタイガを縛れるからだ」

「そ、それは酷いよシノくん……。シカマルくんは道具じゃないんだから……」

玄関から騒々しく4人のアホが入って来た。

先陣を切っているのはクリーム色の髪をポニーテールに纏めたデコの親友。

2人目は面倒ながらも他人の心配                    いや、自分の安堵の心配の

為に他人を心配している様に見えるだけかもしれんが                   しかし  
ないIQ200の天才。

3人目は無口の天才。

4人目は世界一恥ずかしがり屋の日向宗家の長女。

色々突っ込みたいけど……病人がいるんだから静かに入って来て欲しいもんだ。

「あゝ、悪い。俺も熱がありそうだからみんなも帰ってくれ」

白が待っているのに、この4人を相手にするのは面倒だ。

白と4人のどっちかを選ぶってわけではないが、白は今病人だからな。

「だってよ。タイガがそう言ってるなら帰ろっぜ」

流石シカマル、話のわかる良いヤツだ。

「そ、それならタイガくんも寝てないと……！！身体に障るよ……！！？」

ヒナタ、心配してくれてありがとう。

「ヒナタ……あんたどさくさに紛れてなんてこと……！！」

いの、白と同じようなこと言っな。

「いの、それは違うぞ。何故ならヒナタがそんな事を素直に言える性格じゃないからだ」

シノ、ナイス突っ込み。

俺はお前と同じ班で下忍になれることを祈るよ。

「みなさんすいません。ボクが熱を出してしまったばかりに……」

「「白ちゃん!!」」

ああ、もう！

白は動くなつて言つてたのに勝手に出てくるし、来訪者の女2人は何故かテンション高いし、男2人はめんどくさそうだし。このカオスを俺にどうしろと？

「はあゝ。取り合えずお前ら2人は帰ってもいいぞ？いのとヒナタは俺が家まで送るから。」

それとありがとな。こんな里の端まで来てくれて。嬉しかったよ。でもこれ以上面倒なことが起こるのは勘弁だし、それはお前らでも収集はつけられないだろ？

だからシカマルとシノは帰ってもいいぞ」

「ん、ああ。まさか礼を云われるとはな」

「同感だ。何故なら俺たちが来た瞬間に追い払うと思ったからだ」

「俺は友達をそんなに無碍に扱つてるか？

まあ状況によると思ふけど……白も今は元気そうだから大丈夫だろ。つてことだから2人とも気をつけて帰ってくれ」

「ああ、じゃあな」

「さらばだ」

2人は如何にか帰還させることが出来たぞ……？  
後の2人はどうするべきか。

2人とも白とガールズトークしてるから入り込めないんだよなあ……。

その間に風呂にでも入っとくか。

風呂終了、それでも尚3人のガールズトークは終わっていない模様だがさっきまでとは違い、3人で料理をしながらガールズトーク。お前ら男がいるんだから自重しろ。  
ガールズトークって言う単語を使うのが恥ずかしいわ！

「あつ、タイガあがつた

」

パリンッ！

「いのちゃん！？どうした

」

パリンッ！

「2人ともどうしたんですか？

ああ、タイガくん。ボク以外の女の子の前でその格好は控えた方がいいですよ？それはボクだけのものですから」

パリンッ！

一枚目、二枚目は2人が落とした皿が割れた。



3枚目は皿ではなく俺の心が割れた気がしたのは気のせい？  
ツて云うかバスタオル一枚で普段から生活してるからなあ……ジャ  
ージでも着るか。

「あゝあ、勿体ない……。白、ごめんけどジャージ用意しといてく  
れるか？破片は俺が片付けとくから」

流石に病人の白に細かい作業やらせるのは不味いから未だに固まっ  
ている2人を無視して皿の破片を拾う。

男の上半身の裸体見ただけでそこまでなるか？

俺は全身緑のタイツ着ている人を生で見た時はマジで固まったりも  
したが。

「向こうに置いてますから、直ぐに着替えて来て下さい」

「ありがと、白」

白には何かと迷惑掛けてるからな、礼ばかりしてる気がする。

そんな事を思いながら俺は脱衣所に行き、用意されていた黒のジャ  
ージに袖を通す。

それからキッチンの方に戻ると、2人はようやくと回復していた。

「た、タイガ！あんた女の子の前でなんて格好するのよ！こうハ  
じゃなくてビックリしたじゃない！」

「そ、そうだよタイガくん……！！」

「悪かったつて。それよりお前ら、白にあんま労働させるな。お前  
らは白が病気だからって来たんだろ？それなら白に任せっ切りにす  
るな……」

いのとヒナタも、あいつらは何をしに来たんだ？

別に2人とも働かなくても、俺が4人分用意するのに……。

それでもやってるってことは楽をさせたいんだろぅが、肝心の白はもう元気になってるし……。

「わ、わかってるわよ！」

「あわわ……ごめんなさい、白ちゃん……」

「いえ、大丈夫ですよ、ヒナタさん。それにいのさんも。お2人は休んでいてもらって構いませんから」

「でも……！！」

「大丈夫です。みなさんから心配して頂けるだけでボクは元気になりますから。それにタイガくんが今日は無理にでも休ませてくれたお陰で、もうすっかり元気です」

なんで病人が礼なんて言うんだよ。

俺らからしたら『元気になってくれてありがとう』って気持ちなの……白は優し過ぎるんだよな。

「ヒナタといのはこっちでゆっくりしてる。それで白が無理しないか見といてくれ。俺は洗濯物取り込んでくるから」

「それなら私たちがやるわよ！」

「そ、そうだよタイガくん！タイガくんは白ちゃんと一緒に居てあげた方がいいよ……」

「あゝ……やめとけ。お前らがお前らじゃなくなるかもしれないから。だから俺がやるから、お前らはそこに居ろ」

洗濯物の中にどんなものがあるか想像してくればこの意味がわかるだろう、色々な意味でな。

ヒントとして白は俺らより3歳年上ってことと、俺の性別が男だと云う事は教えておこつ。

「ば、バイバイ、タイガくん、いのちゃん」

「じゃあな」

「また明日ね、ヒナタ！」

夕食も食べ終わり、白を無理矢理横にさせた後、俺はヒナタといの2人を家まで送っていた。

それでヒナタはもう日向の家の前まで着いたので別れ、これからはいのと山中家まで帰るところ。

「そう云えばいのは家の手伝いとかあるんじゃないか？花屋だから朝早いだろ」

「心配される様な事じゃないわよ。そんなことよりタイガの方が大変でしょうし」

「いのつて優しいんだな」

「な、何言ってるのよ！この馬鹿！」

顔を紅くしてずずいと詰め寄って来るいの。  
ツンはやっぱりいいものだ。

「ニッシシ、これから何かあった時はよろしくな」

「べ、別にあんたの為じゃないんだから……！！」

「そうかそうか。それじゃあ今度からはヒナタ　　いや、デコに  
でもお世話になるう」

「な！？なんでそこでサクラが出てくるのよ！」

「別に　　っと、着いたぞ。それじゃあな」

いのの家からは何やら不穏な空気が漂ってきている様な気がするの  
で今日は近寄らないでおこう。

「あっちゃー……。そう云えばタイガの家に行くって言う事言っの  
忘れてた……」

隣で嘆くポニーテール。

この不穏な気配はそれが原因か。

「」愁傷様」

「あつ、ちよっと！」

このままだと俺も犠牲にされ兼ねないので瞬身の術を使って早々にその場を後にした。

「…………はあゝ。怒られるしかないか…………」

後にはいのの盛大な嘆息が残された事は言うまでもない。

#### 第四話（後書き）

今回白が出てきたわけですが、みなさんにアンケート。

白はアカデミーに通ってナルトたちと同期にさせるんですが、その時の班をどうしようかな、と。

オリ主と白だけで班を構成するか、それともオリ主＋白＋原作キャラか、オリ主＋白＋オリキャラか、と云う風にするのですが、どれがいいでしょうか？

それとその時のオリキャラは転生者か、それとも血継限界持ちかなども書いていただければ幸いです。

感想まで待ってます。では

## 第五話（前書き）

今回は『2人の友情ファンタズム!!』ってノリで逝きます！  
別に幻想ってわけじゃないですよ？幻想的って意味ですから！

## 第五話

「で……卒業試験は分身の術にする。呼ばれた者は1人ずつ隣の教室に来るように」

イルカ先生がそれだけ告げて、俺たちのいる教室から出ていった。卒業試験はクラス別に適当で行われる為、最初はシノになった。

「行ってくる……」

シノが俺の横を通る際に小さく呟いて、教室の外へ出るべく歩み出す。

「おう、頑張つて来い！ツて云つても分身の術だからシノには簡単過ぎるだろうがな」

「油断大敵だ。何故ならこの試験、実は分身の術ではない可能性もあり、その適応力を見る試験である可能性もあるからだ」

シノ……お前考え過ぎだ。何故ならこの試験はミスキがナルトを落とす為に試験科目を分身の術にしたからだ。  
なーんつつて、こんなことをこいつらの前で言えるわけがねエ。

「まあ行つてこいや」

ニカッと笑つてシノを送り出すと、俺の周りにいつもの面々が集まつて来る。



と言ってもくのいちは違うクラスなので両サイドに居るナルトとシカマル以外のキバ、チョウジくらいだ。

「シノは確実に合格するだろうな」

「ああ、でも問題はそこじゃねえ。ナルトだろ」

「甘いつてばよ、シカマルう！俺つてば昨日タイ　ふいっ……  
！！」

「何でもねエよ！？な、ナルト？

（てめえ、そんなことが知られたら俺もお前も合格出来ねエかもしれねえぞ！？）」

「（た、確かに……！！このことは2人だけの内緒つて言ってた気が……）」

ナルトも口が軽い。

昨日のことは誰にも内緒だつて言ったのに、もうみんなの前ではらそうとしやがつて。

それとシカマル、お前の心配は杞憂に終わるから安心しろ。

「おい！怪し過ぎるぜ！白状しろ、ナルト！」

「ぜ、絶対言わねえ！昨日タイガと秘密の特訓したなんて絶対言わねえ！」

あっちゃー……言っちゃったよ、この子。

ホント人に嘔吐くのが苦手で、ある意味じゃあ羨ましい性格だよ。  
こっちは今でも実力隠して嘔吐してるってのに。

「なに！？おい、ホントか！？」

「ち、違うつてばよ！今のはつい口が滑って……！！」

「ナルト、口が滑ってツて云う事はホントのことをついつい言ったってことだぞ……」

キバの激しい捲し立てにナルトはたじろぎ本音をポロリ、そしていつもはこの2人の遣り取りに面倒だからという理由で関わらないシカマルが突っ込む。

チョウジはいつもの如くポテチを嬉しそうに頬張ってその光景を見ているだけ。

なんでいつもこうカオスになる？

それは俺達の中¥のツツコミとボケの割合が合っていないから。

「そ、そうなのか！？で、でも秘密の特訓なんてしてねえつてばよ！」

「いいからナルト！その特訓の内容はなんだ！？」

「そんなこと言えるわけないつてばよ！禁術の修行なんて言ったらタイガに殺される！」

「……き、禁術う！？」「……」

馬鹿……チョウジまで反応して、シカマルまで大きな声出しやがってよ……。

お陰でクラスの注目的になってるじゃねエか。  
サスケに至ってはこっちの話に興味津々で俺らの話を詳しく聞いた

そっだしよ……あれ？もしかして俺達の仲間に入りたい？  
それなら素直に言ってくれれば全員快く受け入れると思うのに……  
ま、いつか。

「ほ、本当かナルト！？」

「おい！そんなことしてお前ら大丈夫なのか！？」

「そ、そっだよタイガ！禁術って憶えちゃいけない術なんですよ！  
？もしかしたら僕たち……もう一緒に居られないのかな……」

「わわわ！タイガ！後は頼む！」

俺に振るんじゃねエ、ナルトのヤツ！

それにキバもシカマルも興奮すんな！顔が近い！  
チョウジも心配し過ぎだ！涙なんて見せんじゃねエ！

「……はあゝ。取り敢えず落ち着け。今から説明するから、一回で  
納得してくれよ？」

俺は全員を一旦落ち着かせ、近くの椅子に座らせる。

「実は――」

「何の話をしている、タイガ。みんなも何故そんなに神妙な顔つき  
をしているのだ」

……シノ、帰って来るの早過ぎ。

お陰で次に試験を受けるうちはサスケくんがこっちの話を訊きたそ  
うに名残惜しみながら出ていったのを見て俺は満足だが。

「し、シノ！その額当て！」

「

「ああ、これか。貰ってから直ぐにつけた。何故ならこれは木の葉の忍だという事を象徴する証だからだ」

シノの額には木の葉マークの描かれた額当てが巻かれており、上手くナルトがそっちにみんなの気を持って行ってくれた。無意識だろうがナイスだ、ナルト！

「うは！俺たちもぜってー合格するぞ、赤丸！」

『わん！』

「めんどくせエが俺だけ落ちる訳にもいかなさそうだ。ナルトも自信があるみたいだしな」

「シカマルも頑張るなら僕も頑張らないと！むっふふ、合格したらみんなで焼き肉行こうね！」

「よし！俺だつてぜってー合格するつてばよ！昨日はあれだけ特訓したんだ！サクラちゃんと同じ班になるためにも落ちられねエ！」

ナルトとチョウジは頑張る要因が不純だが、みんなの気持ちで卒業試験に向いてよかった。

まあ別に多重影分身なんて禁術でも上忍クラスじゃ結構な人数が使ってる、とでも言えば何とかなる様な事だったからな。

ガラガラガラ……

「……ふんッ」

カッコつけた！？

今教室の扉が開かれてみんなの視線が入って来るサスケの額当てに集中したからちよっと頬を紅くしながらカッコつけた！？  
何気に昔からかわいいところあるじゃねエか、ウチの兄貴も。

「よし！それじゃあ俺も行ってくる」

次は俺の番。

さっさと終わらせて額当て貰って帰って来るか。

「ニッシシ！頑張ってきて！」

「健闘を祈る」

「タイガなら大丈夫だろ、そんなに心配しなくても。だが……めんどくせエが頑張ってきて！」

「一緒に焼き肉行こうね！」

「みんなありがとな。それじゃあ行ってくる」

ナルトもシノも応援してくれてありがとう。

シカマルも面倒だと言いなながら友達想いな良いヤツだ。

チヨウジも応援？してくれてるみたいだし、これが終わったらみんなで焼き肉もいいな。

さて、影分身は何体くらい出せばいいだろうか？

目の前には尊敬する先生であるイルカ先生と、嫌いな先生ミズキ。まあ考えるのは面倒だし、イルカ先生に訊いてみるか。

「イルカ先生、ウチの兄貴は何体分身出しました？」

「サスケか？サスケは分身を7体だ」

「ありがとうございます」

ふうん、あの兄貴は7体の実体の無い分身か。それじゃあ俺は影分身を7体でいいか。

「多重影分身の術」

簡単な印を結び、影分身を7体出す。

「ッ！？」

おー、2人とも驚いてる驚いてる。

特にミズキは「な、なんでこいつが禁術を……！！」みたいな顔してるし。

へっ、ざまーみる！

「……合格だ、タイガ。流石はうちと言ったところか？」

「別にそんなんじゃないつすよ。俺はみんながいてくれたから強くなれた、それだけです。それとナルト、あいつもかなり成長してますよ。しっかりとその眼に焼き付けてください」

「ああ、あいつと仲良くしてくれてありがとう、タイガ」

「何がです？友達なんですから当たり前ですよ」

先生、そんなに感慨深そうな顔するんじゃないよ。そう云う顔はナルトに見せてやってくださいよ。

「ふっ……そうか。合格おめでとう、タイガ」

「ありがとうございます」

イルカ先生に直接額当てを巻いてもらえた。めっちゃ嬉しいぞ！ミズキは未だに放心状態だしな。

「見てくれ見てくれ！俺も合格したつてばよ！」

俺の試験が終わってからみんなも次々に合格して、最後であるナルトも合格して今はアカデミーの屋上。

いのとヒナタと白の3人も来ていて、ナルトは柵に上がって自分の額につけられている額当てをみんなに自慢する。

「へへ、ナルトも合格したんだー！やるじゃない」

いのはナルトのこと案外気にいつてるからな、ナルトが合格して嬉しいみたいだ。

それは恋愛感情じゃないけど、それでもナルトにとってはいいことだ。

「ななな、ナルトくん……おめでとう……！！た、タイガくん、わわ、私も合格したよ……？」

ヒナタはなんで俺まで入れるかな……。

「おめでとうございます、ナルトさん。それにタイガくんも」

「は、は、は、白ちゃん！なんでそんなに近いのよ！？」

「いけませんか？そう言ういのさんも近いですよ？」

「そ、そうだよいのちゃん……！！それに白ちゃんも……2人で抜け駆けなんて……！！」

「うっ……仕方ないわね……」

「ヒナタさんに言われたら仕方ありません……」

おりよ？

ヒナタの一言で俺の両腕にくっ付いていたいのと白が離れたぞ？まあひつついても離れてても、俺の腕に柔らかい感触は無いんだがな。

要するにいのも白もひんにゆではなく、無駄な贅肉がついてないってことだ。



俺は基本どんなでも大丈夫だし、ロリは一番好きだから問題ない。

「くっ……タイガのヤツ、なんて羨ましい……!!」

キバ、お前はヒナタが好きなんだからどっちかって言うとナルトが羨ましいとを感じるんじゃないのか？

「俺にはサクラちゃんが居るからカンケーねえってばよ!」

「ナルトも諦めが悪いわね!。あれの何処が良いのよ」

「お?いのがサクラに嫉妬か?」

「キバ、うつさい!そんなじゃないわよ!私は……その……」

……やべえ。

口籠りながらモジモジして、そして顔を赤らめるいのがこっちを見ている……!!

いのの気持ちには気付かない方がおかしいから気付いてただけどさ、改めて言われると、それに恥ずかしそうにされると照れる……!

「だ、ダメだよいのちゃん!こんなところで……!!」

「そうですよ?」

「い、言えるわけじゃない!こんなところで!」

白とヒナタの制止によっていのは言い掛けた言葉を呑みこんで大きな声を出す。

未だ顔が赤くて俺をチラチラと覗う様子はかわいいな。

それと「こんなところで」と言う事は「ここでは無かったら言える」と言う事で、2人きりの時だったかもしれない……！！  
と、タイガはタイガは無駄な妄想を試してみたり。

「う……うわああああ！！」

「「「「「ナルト！？」「」「」」」」

「ナルトくん！？」

「ナルトさん！？」

あんの馬鹿！

いつまでも柵の上に乗ってるから落ちるんだよ、マジ馬鹿か。

このまま落ちたら最悪死ぬぞ！？

あいつは未だ影分身を使って空中で身動きを取るなんて発想出来ねエだろ。

「じゃあねえ！！」

「おい！タイガ！お前も死ぬ気か！？」

「大丈夫！チャクラ吸着を使えば楽勝だ！」

「なに言ってやがる！」

「詳しいことは白にでも訊いてくれ！」

「おい！       ッて言っちまった……」

悪い、シカマル。それに他のみんなも。

俺まで死ぬかもって言う心配してくれる友達が居てくれて俺は嬉し

いぞ。

でも俺も友達を死なす訳にはいかねエからな。  
その為に、大切な仲間・友達を守るために今まで鍛えて来たんだからな。

「ナルト!!」

落ちるナルトを追いかけ、俺は壁を走って追い掛ける。

「タイガ!?なんで来るんだよ!死ぬかもしれないだぞ!」

「こんなことで俺が死ぬわけねエだろ?それに俺はお前のなんだと思っでやがる!」

「それは……!!」

そこで口籠るか!?

ツてことは俺はナルトに何とも思われてないって言う哀しい存在?  
そして自分だけが『友達』と思っていた自意識過剰野郎?  
……やめてくれ、恥ずかしいから。

「くッ……『友達』だろうが!」

「へへっ……『親友』だ!」

ははは、やべえ、涙が出そうだ。

ナルトに照れ笑いされながら『親友』なんて言われる日が来るなんてな　じゃねえ!

感慨に浸るのはもうちょい後だ!

「これに掴まれ！ 多重影分身の術」

ナルトまでの距離は9馬身……ではなく俺くらいの身長（150cmくらい）で言うところと少なく見積もって15人分くらいか。それで落下速度とかも考えて……20人強が妥当なのでその分の影分身を出し、俺は壁に吸着したまま影分身の足を掴み、その影分身は違う影分身の足を掴むと云う風にしてロープのようになる。

「サンキュー！助かったってばよ！」

「気にすんな。『親友』だろ？」

「へへっ……照れるってばよ……！」

徐々にナルトを引き上げながら互いに少し照れながら笑い合う。男相手にこんな日照れる日が来るとは夢にも思わなんだな。

「それよりタイガ、なんで壁にくっ付いてるんだ？」

「ああ、これが。これは上に登って説明してやるからさっさと登って来い」

「ニッシシ！説明だけじゃなくて教えるってばよ！『親友』！」

「お前……性格悪いな」

俺の性格わかって『親友』って言うのは都合いい時だけ「友達だろ？」って言う輩と同じだ。

まあナルトはそんなこと一切考えてないだろうから、照れ隠しで言うだけ。

「なんでそんな便利な事を早く教えてくれねエんだ！」

「キバの言う通りだ、人が悪いぞ、タイガ」

「めんどくせエが知っておいた方が便利そうだしな」

「むっふふ！焼き肉焼き肉！」

「みんなの言う通りよ！2人だけ出来るなんてずるじゃない！それと白ちゃん！また近い！」

「い、いのちゃんも近いよ……！！たたた、タイガくん……。わ、私にも教えてくれないかな……？あつ！で、でも嫌なら……」

折角ナルトを助けて帰って来たって言うのによ、ここまで俺は責められるのか？

まあチョウジは責めて来ないッて言うかこれから行く焼き肉の事しか考えてないからいいけど。

それといのと白はやっぱ俺の腕に抱きついて来るし、ヒナタはそれを見てあたふたしながら最後にはシュンとするし……カオスだ。

「……はあ。班編成の発表がある明後日まででいいなら教えてやる。それからは担当上忍にでも習ってくれ」

まあ2日で完璧に出来るようになるのはチャクラコントロールが上

手いいのとシノ、それにシカマルとヒナタくらいだろうな。

「よし！それじゃあ明日に備えて焼き肉行っちゃてばよ！！もちろんタイガの奢りで！」

「はあ！？ふざけんな！」

「いいだろ？『親友』」

くっそ……やっぱりナルトは性格悪い！

## 第五話（後書き）

感想とください！

特に女の子の発言とかの意見みたいなものがあれば参考にしてもっと可愛くしたいです！

## 第六話

「タイガくん。起きてください。もう朝ですよ？急がないと皆さんを待たせてしまいます」

「うん……もう少し……」

「……そうですか、タイガくんはボクとの2人の時間を大事にしたいのですね？実はボクも今日は朝から少しいけない気分」

「よし！みんなが待つ第四演習場に行こうか！」

「うふふ、タイガくんは恥ずかしがり屋さんなんですから……」

「違うよ！？別にそんなんじゃないよ！？」

楽しそうに笑う綺麗な白に弄られながら俺の朝は始まり、そのまま用事を済ませて集合場所である第四演習場の丸太の前へと向かった。因みに俺の服装は基本黒い和服で、白はしろい和服。

ちゃんと動きやすい様になっているので問題はないが、白の肌は雪の様に白いので保護色みたいになっているのが現状。

それでもところどころに青い雪の結晶のアクセントがついているので問題ないと思う。

イメージとしては俺のが銀魂の銀さんに近い感じの黒色バージョンで、白はミニスカートの様な丈の長さでその下に黒のスパッツを穿いている、これまた銀魂で言えば九ちゃんみたいな感じ。



慌ただしい早朝を越して、今は約束の時間である10時。  
来ているのは

「たた、タイガくん……！！おおお、おはよう！」

「おはようございます！兄さま！」

ヒナタとその妹のハナビだけ。

あれだな。ハナビとは結構逢ったりして、修行とかつけてやること  
があるんだよ。日向家に遊びに行ったときとかな。

それでいつからか俺の事を『兄さま』と慕う様になってくれた。  
べ、別にロリだからってそれで悶絶なんかしてないぜ！？  
ちよっとほっぺが緩むくらいだから。

「それにしてもみなさん遅いですね、どうしたんでしょうか？」

「そ、そうかな……？」

「みなさんが来るまで兄さまとお喋りするですっ！」

「うおっ！しゃあねえな……」

「ああ！ハナビ！」

（は、ハナビもタイガくんのこと好きなのかな……？ハナビも白ち  
やんもタイガくんの傍に居るし……私だけ遠くに居るのも不自然だ  
よね？あわわ！でも恥ずかしいし……でもいのちゃんがない今し

かタイガくんの腕に抱きつくなんて出来ないし……！！ああ！でもそんなことしてタイガくん嫌がらないかな……。それに恥ずかしいし……ああん！どうすればいいのかな……？」

ハナビが俺の胸にダイブして来てからヒナタが黙りこくって何か考えてるけど……どうかしたのか？

それに白とハナビは俺の近くに居るのにヒナタは距離とってるし……も、もしかして俺はヒナタに嫌われてるのか！？

「あ、あのさ、ヒナタ……」

「へっ！？えっ？な、何かな……？」

「なんでそんなに遠くに居るんだ？」

「だ、だって……！！」

（い、言えるわけないよ！！タイガくんが好きで恥ずかしくて近寄れませんって　　ってあわわわ！私なに言ってるの！？は、恥ずかしいよ……）」

ありゃ？ヒナタが……赤くなり過ぎて白煙を発生させてる……。これって不味くね？

「ひ、ヒナタ！？大丈夫か！？」

倒れそうになるヒナタを何とか支えて、そのまま何度も呼びかける。でも反応は無し……。いや、不味いだろ！？なに落ち着いて状況確認してんだ？俺は！

「うう……大丈夫　　」

「よかった……。心配したぞ？いきなり倒れるんだから」

「たた、タイガくん！？」

「っておiiiiiiii！？」

ヒナタは復活するのも早くて安心したが、俺の顔が直ぐ傍にある事に気付いてまた沸騰して気絶してしまった。

これを俺にどうしろと？

取り敢えず

「みんなが来るまで二度寝するか」

「はい。ボクの膝で眠ってくださいね？」

「それならハナビは兄さまの上で寝ます！」

「……いや、それは何か変なことが起こりそうだからみんな俺の腕枕ってことで」

そう言う事で丸太の裏でヒナタとハナビが俺の左腕、白が俺の右腕を枕にして寝ることとなった。

これくらいなら別にいいよな？

「ちよっ！タイガ！こんなところで何してるの！？しかもハナビち

やんとヒナタも、それに白ちゃんを腕枕なんて……べ、別に嫉妬とかしてないけど、タイガが変なことしないか見張るだけなんだから！」

そう言っているのはタイガの頭を自分の膝に乗せ、頬を赤らめながらタイガの顔を見つめるのであった。

「い、今ならき、キス出来るかな……!!」

いのはそんな不純な事を考え、少しずつタイガの唇に自身のほんのり口紅のつけられた優しい唇を近付ける。  
あと少し……あと1cmにも満たないところで

「ん？　　つていの近ッ！」

「ちちちち違うの！これは絶対に違うわ！」

タイガが目を覚まし、慌てて飛退くいの。  
いの顔は茹蛸の様に真っ赤になっており、更には焦りと羞恥が混同している所為で慌てふためき、両手をパタパタと激しくかわいらしく動かす。

「（か……かわいい……）」

不意にもそれをかわいいと思ってしまふ辺りがタイガらしい。  
普通ならそんなことも考えられず羞恥に陥るのがこのお年頃だが、タイガ自身がそんな青春めいた年頃ではない為に焦ることは先ずない。  
それといつもの経験の産物か。主に白との。

「ち、違っただからね!？」

「わかったって。取り敢えず何が違うか教えてくれないか？」

「だ、だから違っの!別に寝てるタイガがかわいくてキスしたくなつたとかそんなのじゃないんだから!！」

「(あゝ……そういうことか。たぶん今言ったこと自分でも気付いてないな。まったく、この世界の住人は嘘吐けないのか?ナルト然りの然り。でも恥ずかしがるいのってやっぱかわいいよな。ツて言うかいののヤツ嬉しいこと言ってくれるじゃねエか。訊いてるこっちが恥ずかしいわ!)」

顔を真っ赤にさせて言い訳をするいのを顔を赤らめながらも優しい目で見つめるタイガ。

それに気付いたいのはまだドキリと心臓を鳴らす。

「んん……どうしたんですか？」

「あつ、起こしたか。ごめんな」

恐らく最初の叫びで少し眠気が覚め掛け、その後のいのの言い訳をする時の大声で起きたのだろうとタイガは予測を立てるが、全くその通りだ。

3人全員が同じタイミングで起きて、代表して白が顔を赤らめる2人に質問したのだ。

「いのさん、おはようございます」

「いのちゃん、おはよう……」

「確かいのさんでしたよね？おはようございます」

3人ともまだまだ眠い目を擦りながら甘ったるい声でいのに挨拶をする。

特にヒナタは中の人の補正もあつてか、かなりの妖艶な声。それに加えて少し服が乱れているというのもあり、女としての魅力をここぞとばかりにアピールしている。

「（は、反則だー！ー！）」「」

それに対してタイガといのはシンクロして反則的なヒナタに膝をついた。

ひ、ヒナタめ……なんて凶悪な武器を持つてやがる……！！

お陰さまで諸事情含め地に膝をつかなければならなくなつたじゃないか！

結局あの後みんなが来るまで立ち上がれなかつたしよ、それに集合時間より2時間も早く俺らは来てたみたいで最悪だ。

「イメージは木に吸い付く感じ。チャクラの放出量が多いと弾かれて怪我するかもしれないし、少な過ぎると逆にくっ付かないからバランスが大事だ。それじゃあ始め！」

それでも弁当持参で昼飯を食った後、俺らは修行に移った。

これが出来るようになれば水面歩行の行も直ぐに出来るようになる

だろうし、術で何より大切になるのはチャクラコントロールだからな。

この修行は何に置いてても重要ってわけだ。

因みに俺と白は監督役で、出来ないヤツに細かく教えたりする。

「俺が一番になるっ！そんでもってサクラちゃんと同じ班になった時に魅せつけてやるっ！！」

「へっ！これでヒナタの好感度を上げてやるぜ！だから一番には俺がなる！なあ赤丸！」

『わん！』

「……一番は無理だ。何故なら俺が一番になるからだ」

「めんどくせエからさっさと終わらせるか……」

「むっふふ！一番になったらタイガがポテチ！ポテチを買ってくれよ！」

男勢はそれぞれ想いがあってみんな一番になろうと思って躍起になっている。

ナルトはやっぱりのデコにカッコいいところや役に立つところ、落ち零れでないとところを見せる為に頑張ろうと必死だし。

キバはこれで一番になってヒナタを振り向かせようと気合入ってる。シノはここでアカデミーで一番成績がよかったプライドで負けられないみたい。

シカマルは相変わらず後頭部をポリポリと掻きながらめんどくさそうにしているけどやる気はあるみたいだ。

チヨウジはお菓子の為だと自分に鞭打ってる。

やっぱりみんな何かしらの動機があるようで何よりだ。」

「（いい？これで一番最初に登った人がタイガとデートよ？）」

「（でで、デートなんて……！！お出かけするだけじゃないの……？わわ、私も出来るならデートの方が良いけど……ってあわわわ！な、何言ってるのかな……？）」

「（姉さん、異性と2人で御出かけをするのがデートです）」

「（あわわわ……！！た、タイガさんとデート……！！）」

「（それといのさん、そのルールでよろしいのですか？そのルールだと兄さまはハナビのものになりますよ？）」

「（ど、どうということよ！）」

「（この勝負はハナビが頂きました、と申したんです。ハナビはもうチャクラ吸着は身につけていますから）」

「（な！そんなの卑怯よ！）」

「（た、タイガさんとデート……！！ど、どうしたらいいかな……。かわい服着ておしゃれしても引かれないかな？）」

「（いのさんが決めたルールですよ？）」

「（ぐっ……！）」

「（す、少し大人っぽくしてみようかな？そ、それともハナビみた



いに猫みたいに甘えた方が良いのかな……?」

「（それではこう云うのはどうでしょう？ハナビは10分待ちます。その間にいのさんが出来れば別の日にデート。それでもハナビは兄さまとデートをする、これでどうせしょう?）」

「（それじゃあハナビちゃんに有利過ぎるじゃない!）」

「（あわわ……!やっぱり積極的な人が好きなのかな……!?いのちゃんも白ちゃんもハナビもみんな積極的だし……!でも……だ、抱きつくなんて、そんな恥ずかしいこと出来ないよ!）」

「（当り前じゃないですか。もともとそう言うルールでいのさんが勝負を持ち掛けて来たんですから）」

「（わ、わかったわよ!）」

「（た、タイガくんとデート……!!）」

「（ふふ、兄さまとデート……。目いっぱい甘えちゃうもん!）」

女子の方も何か秘密会議みたいなこととしてやる気が感じられるし、互いを磨き合えていいことじゃん!

それぞれの決意を胸に  
不純なものも複数  
幕は上がった。  
木登り修業の

「兄さま!出来ました!ナデナデして下さい!」

10分後、最初に出来たのはハナビ。

木に登った後直ぐに降りて来て、俺のもとへかわいらしく駆けよって来て頭を差し出す。

「よしよし、よく出来たな。俺がいない時にもしっかり修業して出来るようになってたな？」

「ふにゃ……」

（ば、ばれてる！？ここは小動物っぽくして誤魔化すしかありません……！！）」

「『ば、ばれてる！？』なんて思ってるだろ？そんなこと見てればわかるから。なんで最初の10分やらなかつたのかわからないけど、よくやったな。偉いぞ？」

「（け、結果オーライです！そして流石兄さまです！心が宇宙の様に広いです！小宇宙コスモです！）」

ハナビはやっぱり小動物みたいでかわいいなあ。

あつ、でもそれは恋愛感情には入らないぞ？

入らないというか入っては不味いという電波を交信してるんだが。

「た、タイガ！少しわからないんだけど来てくれない！？」

「ああ！今行く！それじゃあハナビ、お前はヒナタにコツとか教えてやれ」

「あつ！兄さま！行っちゃいました……。でももういのさんは兄さまとデート出来ません！ざまーみろです！それでは兄さまに言われた通りヒナタ姉さんにコツとか教えちゃいます！」

何か後ろでハナビがデートとか物騒なこと言っただけと訊き間違いだよな？

そんなことを考えながらいののもとに行くと、いのは涙ぐんだ瞳で俺を見つめて来た。

「あの……いの？」

「少し手伝って欲しいの。身体を支えてくれる？」

（あの猫やるわね……！でも私にだってデート以外にもタイガと触れあう方法を考えてないわけじゃないんだから！あなたはヒナタと一緒に指を銜えて見てなさい！）」

「そう言う事が。それくらいなら良いぞ」

たぶんチャクラの放出が少な過ぎて吸着出来ないんだろう。それで木に垂直になった状態で支えてくれと言う事だ。

「しっかり支えてないと怒るわよ？」

「はいはい、わかってるって」

「……あつ、最初に一回1人でやってみるから下で見ててくれる？」

「おう！」

二カツと笑い、心配そうないのの表情を自信気なものに変えてやる。いのも早く出来るようになればいいな。そしたら術の幅が広がるし、医療忍術も出来る様になるし。

「（ふふ、作戦は完璧よ！私が途中まで登って、そのまま下に居るタイガの胸にダイブ。そしてそのまま　　）  
よーし！いっくわよー！」

声高らかにいのは勢いよく木を登り始めた。

おお！案外出来るじゃんか！いのもやれば出来る娘だ！

「　　キヤツー！」

（うそつ！弾かれた！？このままじゃホントに地面に落ちちゃう…  
…！！）「」

「あぶねエー！」

くつそ……いのはチャクラの放出が弱いと思ってたんだが調整を乱して放出量が一気に上がって木に弾かれやがった！  
お陰さまでこっちは本気で焦って落ちそうないのをお姫様だっこでキヤツチしまったじゃねエか、恥ずかしい……。

「　　え？落ちて……ない？」

「ああ。大丈夫だ。お前はあんまり無茶するなよ？」

そうしていのをしつかりと地面に立たせる。

あのままお姫様だっこもよかったけど、なんか白とかからの視線が痛いしな。

ツて言うか悪いのは俺じゃないよな？

「あ、ありがと……。

（さ、作戦は失敗したけど結果オーライよ！で、でも助けられた後に優しく微笑まれるとドキドキしちゃうじゃない……！！）「」

いのは顔紅くしてるけど……俺だって恥ずかしかったんだからな？不安そうないのの顔を見て俺が守らなきゃとか色々考えてこっちは大変なんだから大概にして欲しい。

でも……それが個人的に楽しかったりもするんだけどな。

「これくらいいいって！それよりこれ以上無茶はするなよ？」

そんな事を考えていると身体が火照って来て、自分の顔が赤くなっているのがわかった。

なので照れ隠しにいののおでこにデコぴんをして微笑む。

「うつ……わ、わかってるもん！」

『もん』なんて……言うな――！！

ツンデレが『もん』なんて言ったら……俺はその時に死んでもいいと思ってるんだから！

いのはそれに加えて顔紅くしたり上目遣いだったり涙目だったりで女の武器を駆使してくるから俺のライフはもうゼロよ！？

「（いのさん……考えましたね。まさか出来ない方で気を引くとは、逆転の発想ですね）」

「（いのさん……羨ましいです。ボクも帰ったら何かしらのミスをしてタイガくんデコぴんをしてもらいましょう。その時のミスは何が良かったですか？やっぱり『間違えてタイガくんを押し倒しちゃいました、テヘ』作戦ですか？」

いえ、ここは正攻法で『間違えてタイガくんがお風呂に入ってる時にボクも入ってしまった、テヘ』作戦ですね）」

「（あわわわ……！！タイガちゃんとデート……！！やっぱり大人っぽい……せ、セクシーな感じが良いのかな……？で、でもバニーガールなんて恥ずかしくて出来ないよ……！！）」

何やら熱い眼差しを感じるが、何処にも返さない方が安全そうなので全て気がつかないふりと言う事で。

## 第七話（前書き）

ご都合主義万歳！！な回です。

詰問とかマジでやめてください、ノリで書いてるんで。作者の心はプレパレートよりも薄いガラスで構成されているので。納得が出来ないという方は割り切ってください。

『この作者はクズだ』と。でも打たれ弱いんでゆる〜く批判してください。

## 第七話

「ひゃっほー！！行つくぜえ！」

「負けねえってばよ！」

「いや、既に負けてるから」

「う、うるせえ！」

「はあ」

出来てないのはキバとナルトだけで、他の全員は既に出来るようになっている。

これも俺と白、それにハナビの教え方が上手いお陰。

それでもこいつら2人は理解力が底辺だから出来ていない。

もう2日目であと1時間で班編成の発表があるところを朝早くから修行つけてやってんのに出来ないとなると溜め息も吐きたくなくなるって。

火影邸の一角で。

「はい！？なんで私まで担当上忍なんですか！？私は特別上忍です



よ!？」

1人の女性は何の用かと思って火影邸に行けば、今回のアカデミー卒業生の下忍候補の担当上忍をしろと言われたではないか。もとより子供があまり好きではない性分故に相手が火影様と言う事も忘れて反抗してしまう。

「仕方ないじやろう。他にはあの3人を監督出来る様な者はおらんからのう」

「はたけカカシがいるじゃないですか!」

自分の知り合いには天才忍者で写輪眼を持つ者がいるのだからそれにやらせるべきだとまたもや反抗する女性。それほどその3人がイヤなのか。

「あやつにはナルトとうちはサスケの方の面倒を見てもらうからのう」

「でもこの班編成……相当バランスが崩れてますよね?」

そうだ、この手で行こう。

元来下忍になる時の三人一組は実力の均衡が必要だ。スリーマンセル

だからその3人は明らかなオーバーキャパシティだと。

我ながら頭が回ると、シメシメと黒い笑みを浮かべる女性。

「もともと2人で組む筈のところに無理矢理1人入れたからのう。それでも1人は未だ10歳じゃから誰も文句は言わんじやろう。それに担当も上忍ではないからの」

しかし目の前の老人の言葉でそれは一蹴された。

ぐむむ……これ以上火影様に意見することは流石に不味いかと思いはながらも、敢えて女性には強気で攻める。

そして何気に貶された様な発言に少々イラッと来る。

「言いますって！半年前に入学して昨日無理矢理卒業試験受けて合格ですよ！？しかも日向って……もうこの班最強じゃないですか！全員が血継限界持ちって……やめてくださいよ」

最後は最初程の覇気がなく、ぐったりと頂垂れる女性。  
これで観念した、と言う事だ。

「ほっほっほ、お前さんなら大丈夫じゃろう。それに下手な下忍を担当するより優秀な者を持つ方がお前さんに合つとるじゃろう」

「仕方ないですね……。ふふ、どんなふうにも調教してあげようかしら」

こうなれば思う存分私好みにしてやるわ、と割り切った女性は、火影様の言葉にじゅるりと舌舐めずりをする。

幾分かマシだが変態の弟子はやっぱり変態の様でした。

「なんであんたがここにいるのよ！」

「これを見てわからないんですか？ハナビもアカデミーを卒業したんです！」

「そ、そんなこと見ればわかるわよ！なんで卒業できたのかって訊いてるのよー！」

「そんなのハナビの兄さまを想う愛故に決まっています！」

バチバチと視線をぶつけ合うクリーム色のポーターと黒色のストリート。

訊いてわかる通り、いのとハナビが喧嘩。原因はもちろん『何故ハナビが木の葉の額当てをして班編成の日にアカデミーの同じ教室に居るか』と言う事だ。

「ひ、ヒナタと白ちゃんも黙ってないで何か言いなさいよ！」

「わわ、私も！？」

「そうよ！お姉ちゃんなんだからガツンと言ってやりなさい！」

「そ、そんなこと言われても……！！ハナビも頑張って合格したんだからいいんじゃないかな……？」

「流石姉さんです！姉さんはやっぱり優しいです！」

「もうー！なんでそうなるのよー！」

年下相手の論争でも1人では敵わないと悟ったいののはヒナタに援護を求めるも心優しいヒナタは妹の頭を撫でるだけでどちらの側に就くという事も出来ない。

故にいののは再び悶え、今度は白へと視線を移す。

「白ちゃん！お願い！」

白はいのたちより3つも年上だ。

それでいて頭も良くて忍術や体術も得意だからいのやヒナタには慕われ、頼りにされている。

それはいのらだけに非ず、もちろんタイガを『兄さま』と慕うハナビも同様に。

「白さん！ハナビは悪いことしてませんよね？」

「そうですね。ハナビちゃんは悪いことはしてませんよ」

「ぐっ……！！！」

白の言葉にいのは打たれ、逆にハナビはえっへんと無い胸を張る。

「それでもタイガくんとは誰が同じ班になるのかはわかりません。

特にハナビちゃんのように飛び級で合格したのならアカデミーで2番目だったタイガくんと同じ班になる望みは薄いですから、どちらかと云えばいのさんに歩があるんじゃないですか？」

「そ、そうよね！少し貶された様な気がしないでもないけど、タイガと一緒に班になるのは私なんだから！」

「そ、それなら私も……！！！」

「いえ！それでも兄さまと同じ班になるのはハナビです！」

「ふふ、ボクも負けませんよ？」

4人が如何に頑張ろうとも既に班は決定されており、その頑張りで如何になるわけでもないので意味はないが、それでも何かを頑張らないと落ち着かない4人だった。

ガラガラガラ……

「みんなおはよう」

俺とナルト、キバは木登り修業を終えてアカデミーにやって来た。結局ナルトとキバは出来なかったしよ、時間の無駄だった。白も先にアカデミーに行かせてたからすることもなかったしな。

「おはよー！でもタイガ遅い！」

いの、遅れたのは絶対に俺の所為じゃないから俺を責めるな。

「おお、おはよう、タイガくん……！！それにナルトくんも……」

ヒナタはなんで先に俺に挨拶して来るんだ？

ナルトの事好きならナルトにだけ挨拶すればいいのに……。

あつ、キバだけ挨拶されなかったな。それはそのまま意味と取って、俺はいい友達とされているという風にしておこう。

「おはようございます、兄さま！」

ハナビもいつも通り満面の笑みで俺に駆け寄って来て

「ってハナビ！？なんでハナビがここに！？」

抱きつかれた。

なんで！？ハナビって一昨日の卒業試験受けてないよね！？

「昨日卒業試験を受けまして、それで合格したです！今日からハナビは兄さまといつも一緒です！」

……火影様もそれを許可するなんてなにを考えてるんだよ。

あー……でもこれでアカデミーの卒業生が丁度3の倍数になったから良しとするか。

「ちよっ！なんでタイガに抱きつくのよ！」

そう言ういのも結構近いんだけどな。

「兄さまはハナビの兄さまだからに決まってるじゃないですか！」

別に俺は誰のものでもないぞ？

「（ハナビがタイガくんの妹ってことは……も、もしかして私とタイガくんが……ふ、ふ、ふ、夫婦になるのかな！？あわわわ……なんてこと考えて……で、でもタイガくんなら……ああん！恥ずかしいよ……！）」

ヒナタは顔紅くしてモジモジしながら何か考えてるしな。

何となく俺の方をチラチラと見ては恥ずかしそうに視線をずらすから俺のことで何か考えてるんだろうけど……さっぱりだ。

それとさっきからキバが後ろで俺に向けて殺気紛いなものをモノを

向けてくるのは気のせいかな？

「おーい、お前ら！今から班編成の発表を始めるから席につけー！」

あつ、イルカ先生が来てたのに俺らの所為で中に入れないみたいだ。  
ホント申し訳ないことしたな。

「兄さま！是非ハナビの下に！」

「タイガ！べ、別に私の隣に座ってもいいんだからね……！」

「た、タイガくん……隣いいかな……？」

「タイガくん、同じ班になれる様に手を繋いでいきましょう」

女性陣からのもの凄いアプローチ。

ツて言うかなんでヒナタまで俺に隣を薦める？ハナビに限っては下  
だしな。

まあそれはいいとして、これで誰かの隣を取るって云うのは出来な  
いよな、大奥を志す者として。

「いや、俺は良いよ。お前らは適当に座っててくれ。でも喧嘩する  
んじゃないぞ？特にいのとハナビ。喧嘩したらダメだからな？喧嘩  
したら怒るから」

「うつ……そ、そんなことわかってるもん！」

だからいのに『もん』ツて言われると俺は死ぬ……。

「はい！兄さまがそう言うなら仲良くするです！」

はは、やっぱりハナビはかわいいな。

なんか、こう、いつでも抱き締めていたい小動物みたいな感じ。でもそんなこと云えばハナビは『いつでも抱き締めていてください！』って言うだろうし、他のヤツは『それなら私も』みたいなこと言うだろうから言わない。

「残念ですが仕方ないですね。タイガくんがそれを望むのなら、ボクはタイガくんを後ろから見守っていきましょう」

白も健気でかわいい娘だ。

俺の言う事なら素直に訊いてくれて、それでいてそこはかたくエロイところがまたいいんだ。

「（あわわわ……！！た、タイガくんと……ふ、夫婦だなんて……！！）」

ヒナタは未だ何か考えてるみたいだけど……その内復活するだろ。

「よっ！シカマル」

「お前は朝からナルトとキバに付き合わされて大変だな」

一人で座っていたシカマルのもとに俺はテクテクと歩み寄り、その隣に腰掛ける。

シカマルは相変わらずめんどくさそうに机に突っ伏してるし……友達が苦労してんだからもう少し労ってくれてもいいのに。

「チョウジは？」



「後ろだろ。めんどくせエから説明は無しだ」

「ふん」

後ろの方の席にチョウジがいたし、何か苦そうな表情をしてるから腹でも痛いんだろ。それで終わった瞬間トイレに行ける様に後ろに陣取ったと、そう言うところだろうな。

シノはその隣に居たから手を上げて挨拶をしたらシノも手を上げて挨拶をしてくれた。

「それじゃあ今から発表するぞー！」

イルカ先生の言葉でみんなの表情が引き締まる。

それもそうだな。この班編成で人生が決まると言っても過言ではないほどこれに賭けてるヤツがいるし。

かく言う俺も誰と同じ班になれるかドキドキしてたりする。

「次、第七班！うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ！」

やっぱここは原作通りだな。

これで違ったら何かとおかしくなりそうだし。

でもカカシはナルトの見張り役とサスケの写輪眼のための担当だな？ならなんで俺がそこに入らねんだろ？

まあバカ兄貴と一緒にの班はイヤだからいいけど。

「（むっふふ！！サクラちゃんと一緒にの班だつてばよ！タイガに教えてもらったチャクラ吸着でサクラちゃんを俺に振り向かせて、そしてサスケのヤローをぜってー追いこす！！）」

良い意気だナルト。お前ならバカ兄貴は抜けるだろうし、実際ナルトは顔が整ってるからデコも振り向いてくれるんじゃないか？それでも俺は親友としてデコには反対だが。

「（しゃゝんなろゝ！！サスケくんと同じ班だゝ！！ナルトは要らないけどサスケくんがいるからいいわ！これからサスケくんと愛を育んでいくんだからねゝ！）」

ああ、ウザい！

そんなことを考えてることが伝わって来ることも、ナルトの事を邪険に扱っていることもウザい！

ただデコが広いだけのヤツが調子乗るな！

『親がいないから育ちが悪い』とか言う風にナルトのこと思ってるヤツに一族虐殺されたサスケが振り向くわけないのに。

……あつ、そう云えばナルトを庇ってデコを『ウザい』ッて言う時のサスケはカッコ良かったかもな。

「（……ふんっ。足手纏いが2人か）」

前言撤回。

サスケは全然カッコ良くなかった。

デコを足手纏いと思うのは仕方ないけど、ナルトは絶対に足手纏いじゃないしな。

「次、第八班！犬塚キバ、日向ヒナタ、油女シノ！」

ここも原作通りか……。

「（おっしゃあー！！ヒナタと一緒にだぜ！ひゃっほーいー！！）」

「（うう……タイガくと違う班になっちゃった……。で、でも2人に迷惑掛けない様に頑張らなくちゃ……！！）」

「（なかなか良い班だ。何故ならいずれも感知に秀でた才能を持っているからだ。だがキバは……いや、言わないでおいた方がキバの為になりそうだ）」

キバからはヒナタと一緒にの班になれた喜びが滲みでており、ヒナタからは哀愁と決意、シノからは自信気な雰囲気が出ている。

「次、第十班！山中いの、奈良シカマル、秋道チヨウジ！」

「ここも原作通り……ってことは俺は白とハナビとか。

今年の合格者は33人だから班の数は11。それで未だ名前が呼ばれてないのは俺と白とハナビだけだな。

「（チツ、めんどくせえ……。一番面倒なヤツと同じ班になっちゃった）」

シカマルは如何にもめんどくさそうな雰囲気を出している。

「（なんでタイガと一緒にじゃないのよー！！！！）」

いのは手から血が出るんじゃないかってほど力強く拳を握っている。やめてくれよ？俺はお前が怪我なんてしたら哀しいくらいじゃ済まないんだからな？

「（むふふ！ポテチポテチ……あ、あれ？僕のポテチがもう無い！？）」

後ろを振り向くと空になったポテチの袋を見て泣くチヨウジがいた。  
あいつ……腹痛いんじゃないのか？

まあ俺の勝手な推測だからよくはわからんが。

「次、第十一班！うちはタイガ！うちは白！日向ハナビ！」

……わかってたけど。改めて聞くと……何コレ？明らかなオーバー  
キヤパシティじゃね？

まあ俺は嬉しいんだけどさ、俺らの班の担当上忍になる人は同じよ  
うなこと想ってるんだろっな。

なんでか知らないけどわかるよ、その気持ち。

「（うふふ、タイガくんと同じ班です。いのさんとヒナタさんには  
悪いですが素直に喜ばして頂きましょう）」

白はこっち見て嬉しそうに微笑みながら手を振ってくれる。

俺もそれに反応して笑って手を振り返すと、白はやっぱ嬉しそう  
に微笑んでくれる。

「（やりました！兄さまと同じ班です！これで兄さまに甘えたい放  
題です！）」

ハナビは俺にいつでも甘えてられるとか想ってるんだろっな。その  
証拠にいのの隣で嬉しさ全開みたいな感じでガッツポーズ作ってる  
し。

出来る時はそうさせてやるけど、でも任務中はそうはいかないぞ？

「（なんでハナビちゃんがタイガと同じ班なのよー！！もー！どう  
すればいいのよ……）」

その隣のいのは激しい剣幕でハナビを睨んで唸ってるし。  
でもイルカ先生に意見する様な感じじゃないからいいか。

「先生、少しいいか？」

アカデミー2位のうちはタイガ、くのいち1位のうちは白、それに  
飛び級の日向ハナビ。この班は他の班と比べても実力が偏り過ぎて  
いるとは思わないか？」

シノ！？それは確かに言ってるけどわざわざまた編成し直さざるを  
得ない様な正論はやめて！？

「そ、そうよ、先生！シノの言う通りだわ！」

いのまで！？

いののは俺と白とハナビと一緒にさせたくないだけなんだろう。その  
気持ちはとても嬉しいけど今回に限ってはやめてほしい。

「やめるです！これは決定事項ですから、兄さまと同じ班になるの  
はハナビと白さんだけです！」

よし！いいぞ、ハナビ！もつと言え！

じゃないと班編成し直した時に俺が知らないヤツと同じ班になるか  
もしれん！

「で、でもシノくんの言う通り少し偏ってないかな……？」

（もしかしたらこれでタイガくんと同じ班になれるかも……！！）「」

ヒナタまでモジモジしながらこの班編成に異論を唱えるか……。

それだけナルトと一緒に班になりたいってことか？

でもモジモジして顔紅くしながら俺の方を見てくるのは何故？

「ヒナタ！？俺は別にそうは思わねエゼ！？なあ、ナルト！？  
（や、やべえ！このままじゃ折角ヒナタと一緒にの班になれたのに違  
う班になるかも知れねエ！）」

キバは今の班編成に絶対賛成だよな。

「お、おう！キバの言う通りだつてばよ！  
（このままじゃサクラちゃんと違う班になるつてばよ！どうにかし  
ないと！）」

ナルトも絶対に賛成な筈だ。じゃないとサクラとは離れちまう事にな  
るからな。

友の事を思うとそれがベストなわけだが、友の恋路を応援してやる  
のも務めだからな。

「あゝあ、めんどくせエ……」

シカマルはさっきの班編成に反対も賛成もしないだろうな。

面倒だつて理由もそうだが、シカマルはこれが火影様の意向だとい  
う事をよく理解していて、私情を持ちこむほど馬鹿じゃないんだよ。  
あつ、この言い方だと他のヤツが馬鹿みたいになるけど、俺の友達  
でキバとナルト以外は馬鹿じゃないぞ？

「静かにしろー！！これは決定事項だ！お前らが何と言おうと変わ  
ることはない！わかつたな！？」

うん、やっぱイルカ先生は人望が厚いな。

普通大人が怒鳴ったら反抗したくなるのがこのお年頃だが、イルカ  
先生が怒鳴ってもそうはならない。

まあ先生と生徒と言う立場の問題でもあるが、それを差し引いてもイルカ先生は人望があるだろう。  
俺だってイルカ先生は尊敬してるしな。

「よし、流石俺の生徒たちだ。これは火影様の意向だから、みんなが何を言っても意味はないんだ。それに火影様は意味もなくこの班編成にしたわけではなく、考えがあつてのことだと理解しておいてくれ」

怒った後には褒めることも何故そうなるかの説明も忘れない。だからこそついて来る人望だろう。

「それじゃあ昼まで自由時間だ。昼からは担当上忍との顔合わせがあるからそれまでに戻って来るように！」

ああ……遂にイルカ先生が去ってしまった……。

これからのとかから五月蠅く何か言われないといけないんだろうな。

考えるだけで……はあゝ、鬱だ……。

「ちょっとタイガ！どういうことよ！」

ほらな？俺に非はないのになんで俺に言いがかり付けるんだよ。まあほつぺを膨らませてかわいいから許すけど。

「そんなこと言われても……なあ？シカマル、何か言ってくれ」

「あ？めんどくせエが……チツ、一応友達だからな……。いの、その辺に」

「シカマルは黙って！」

「だよ。厄介事は御免被る……」

シカマルに助けを求めた俺が馬鹿だったか？

このめんどくさがり屋がわざわざいのに反抗するなんてことはないだろうからな。

でも友達って言うてくれただけで俺は満足だぞ？

「いの……悪い！俺が悪かった！許してくれ！」

「ちよっ！えっ！？」

わかるか？別に何もしていない時に無駄に謝れる時の人間の心理が。普通の人間なら決して気持ちいいものじゃないんだよ。

特に上下関係の厳しい部活とかやってるとわかるだろう。1日の内に同じ後輩から何度も謝られると鬱になりそうな気持ちだ。

「ホントごめん！」

「な、なんでタイガが謝るのよ……！！べ、別にタイガを責めたいんじゃないくて……その……同じ班になれなくて残念だって思っただけ！だから頭上げてよ……！」

我ながらあくどいことをしてしまったな……。

頭上げたら少し涙目で今の発言を恥ずかしく思ったのか頬を赤らめているのがあるし。

「ありがとう、いの」



「べ、別にお礼なんて言われる筋合いはないわよ……!!」

はは、もういつものツンデレのいのだ。

やっぱりいのはこうじゃないと締まらないよな。

「よし、それじゃあ屋上行ってみんなで飯食おうぜ?」

さっさと飯食って、午後からの顔合わせに備えますか。

「賛成だ。何故なら俺の弁当は今日も重箱だからだ」

シノはいつまで重箱を俺たちに弄られたいんだ!?

みんなで触れないようにしようって言ってるのに俺のツッコミ精神が掻き立てられる……!!

「サクラちゃんサクラちゃん! サクラちゃんも一緒に食べるってばよ!」

「うつさいナルト! どっか行け!

サスケくうゝん! あゝ……良かつたらあゝ……一緒にゝ……お昼ご飯食べない?」

「ふんつ。邪魔だ、どけ」

ナルトとデコは見事に玉砕されたなゝ。

ツて言うかデコ、原作よりウザくね?

「ひゃっほーう! ヒナタあ! 一緒に班だぜえ!?!」

「(うう……た、タイガくんと違う班になっちゃった……。お、同

じ任務とかで一緒になれたらいいな……。で、でも私ちゃんとお話できるかな？あわわわ……。どうしよう……。いい、今から考えただけで、は、恥ずかしいよ……。！！）」

「無視されたアアアアア！！！！！？」

キバも残念だよな。

折角同じ班になれたのにヒナタはキバのことただの友達としか思っ  
てないんだから。

「めんどくせエ……。先行ってるわ……。おら、チヨウジも行くぞ」

「むっふふ！お昼ごはんだアアアアア！！！」

「はあ……。めんどくせエ……」

走って行く体力はあるんだな、チヨウジ。

シカマルもチヨウジの世話大変だろうに。

暇があれば食べ物の事を考えるチヨウジの栄養が偏らない様にする  
のが特にな。

「ハナビ達も行きましょう！」

「そうですね。タイガくんも早く来て下さいね？」

「兄さまも早くね！」

あつ……。あの2人、俺にナルトとキバの回収丸投げしやがった！？  
まあ俺といのがなんか変な感じだから気を遣ってくれてるのかもしれないんだけど。

何気にあの2人はそう言うところがあるし、いのも白とかがそう言う時はそんな感じだし。

あいつらの間で何か暗黙の了解みたいなものがあるのか？

「ほら、全員馬鹿やってないで俺らも行くぞ」

まあ考えてもわからねえから、暇な時に白にでも訊いてみるか。

## 第八話（前書き）

カカシとアニコの対話の仕方がわからなかったので違和感があれば指摘してください。

それと今回は自分でも不調だな、って感じの出来なので勘弁してください！！

## 第八話

「なあ、何処の班の担当上忍が一番早く来るのか賭けしねえか？ 該当の班は7・8・10・11の4つだ。もし当たれば一番遅く来た班に賭けたヤツがあてたヤツに一楽のラーメンを奢るってことで」

今は昼食も終わり、もう一度班編成が発表された教室へと戻って来た。

そこで俺は賭けを持ち掛けるわけだが……ふっふっふ、これで俺が負けることは絶対に有り得ない。

だって第七班の担当上忍はメンバーから察するにカカシだからな。

「乗ったあ！俺はもちろん第七班の担当上忍が来るのに賭ける！」

そしてナルトの性格を考えれば自分の班の先生が一番に来ると絶対に言い張ると俺は知っている。

「へっ！それじゃあ俺は第八班に賭けるぜ！」

そしてナルトが自分の班に賭ければキバも絶対に自分の班に賭けるということも。

「めんどくせエから俺も第十班で良い」

更にはこんなことをめんどくさがるシカマルも2人に流されて考えることなく自分の班に賭けることも俺にはわかっている。

「それじゃあ俺も第十一班で」

俺は別に一樂のラーメンを欲しているわけでもないの、みんなに  
合わせて自分の班に賭ける。

賭けて云うのは勝つ事より負けられない事の方が重要なんだよ。

ナルトは本気で一樂のラーメンが食べたくて賭けに参加し、キバは  
ナルトへの対抗心から、シカマルは流されて参加した。

それでナルトが負けるところを見るのが俺は楽しみで、賭けを持ち  
掛けた。

だから勝つ必要なんて更々ない。

パライイイーン！！

そんなことを考えながらニヤニヤしていると、黒い何かが窓を突き  
破って突入してきた。

え？この登場の仕方ってあの人？

しかもよく見れば黒いマントみたいなのに『みたらし アンコ推参  
！！』って書いてあるしな。

「私が第十一班の担当上忍、みたらし アンコよ！第十一班のヤツ  
はさっさとついて来なさい！」

『（うわぁ……。タイガ、ご愁傷様……。）』

みんなが俺に慈悲の目を向けながら俺らの担当上忍に相当引いてい  
たのがわかった。

たぶんアンコさんは『ふっ……。決まったわ』みたいなこと思ってる  
んだろうな……。

なんか余計恥ずかしい……。

「悪い。俺が3人分のラーメン奢るわ」

勝ったのに負けた気がするのは何故だ！？

「……わ、わかった……」

しかも今回に限ってはラーメン大好きなナルトも空気読んで静かだしな。

ここまで場の空気を変えるあんたはすごいよ、アンコさん！

「ほら！さつさとしなさい！」

「はい。白、ハナビ、行くぞ？」

「……は、はい！」

「そうですね。いつまでも現実逃避していても現実は変わりませんから」

ハナビは自分たちの先生の現状に放心状態になるほどだし、白もこれが現実だと割り切ろうとしてるし。

アンコさん綺麗んだけど……絶対にハズレくじ引いたわ……。

「そうね……まずは自己紹介をしてもらおうかしら」

何処かの屋上に移動したアンコさん率いる第十一班。

正直白とハナビは現実逃避気味にアンコさんを見て引いている。

まあさっきまで着用していた黒いマントは既に何処かへ投げ捨てられたから幾分かマシだが。

「どんなこと言えればいいんですか？」

こうなったら俺とアンコさんで話を進めるしか無いな。  
俺が話さなかったらずっと沈黙が続きそうで怖いし。

「そうね……。例えば好きなものとか嫌いなもの。将来の夢とか趣味とか……。教えたかったら何でもいいわ。特に銀髪の君はね」

うおっ！？

俺の貞操が奪われる、そんな気がする！

いつも白から死守してるのに、これ以上俺の貞操を奪おうとするヤツがいたらホントに奪われるかも……。

それくらいにアンコさんは俺に妙な目つき向けてくるし、それを見たハナビと白は反応することすら忘れるほど逃避中だし。

「さ、先に先生の自己紹介からして下さい！俺らは後からでもいいんで」

「仕方ないわね。名前はみたらし アンコ。嫌いなものは変態なオカマ。好きなものは……。そうねえ……。曲がない人かしら。趣味はなし、将来の夢も特に無し。これでいいかしら？」

あつ、嫌いなものところ俺も同じだ。

好きなものが曲がない人って云うのはナルトみたいなヤツのことを指すんだろうな。

「はい。それじゃあ俺。名前はうちは タイガ。好きなものッて言



うか大切なものは友達全員、もちろんこの2人も含めてな。嫌いなものは俺の友達を害するヤツと変態なオカマ。それに仮面な馬鹿。趣味は特に無し、将来の夢はみんなではのぼのと老後の生活を送ること」

「た、タイガくん……そこまでボクたちの事を……!!」

「兄さまはやっぱり優しいです……!!」

やっと2人も帰って来たか。

ああでも言わないと絶対に戻って来なかったからな。でも全部ホントの事だぞ？

「ふーん、うちは タイガくんねえ……。あんた、良い眼してるわ。一つ質問いいかしら？」

「はあ」

「あんた、自分の実力をいつまで偽る気？」

なんで急にそんな鋭い目で見つめられなきゃならねエんだよ……。白は俺の実力を知ってるからいいとして、ハナビは知らないからな。ここで打ち明けるのはどうかと考えるわけで。でもハナビに言ったからと言ってハナビの取る態度が変わるわけでもないし、逆に『流石兄さまです!』と言って今より懷いて来るだろう。

……あれ？それなら問題なくね？

もともと実力隠すのはアカデミーまでだけってつもりだったし。

「……なんでそう思うんですか？」

「いくらアカデミー2位って言っても下忍になる前でしょ？それが影分身7体なんておかしいと思うでしょ。それにそっちの血継限界の娘をアカデミーレベルで、しかも子供の時に拾ってくるなんてどう考えても無理よ。これでわかった？」

ふうん、やっぱり特別上忍ってだけあってそこらへんの洞察力とかはいいわけだ。

もしかしたらこの先生といると俺以外の2人も結構なレベルアップが出来るかもな。

そう考えたら当たりか？それにこの人普通にしたら普通に美人な先生だし。

「まあそれはいずれ任務の時に。今日で俺達が下忍になったわけじゃないことくらいわかってますよ？」

「あんた……やっぱり面白いわ。それじゃあ次、そっちの血継限界の娘」

「ボク……ですか。名前はうちは 白です。好きな人はもちろんタイガくんです。嫌いなものはタイガくんを害する蟲風情です 趣味は害虫駆除、将来の夢はタイガくんと同じです」

白……かわいい顔して恐ろしいこと言うよな。

害虫駆除って……ホント恐いわ！

「はい、次は日向の娘」

「ハナビは日向 ハナビです。歳は兄さまたちより2歳下です。好きな人は兄さまです！父さまも好きですがやっぱり兄さまが一番で

す！嫌いなものは白さんと同じです！趣味は兄さまと一緒に修行することです。将来の夢は兄さまと同じです。それと歳は兄さまたちより2つ下です。他の年増達と一緒ににはされるのも嫌いです！」

そう言えばこっちのハナビは2歳しか歳が変わらないんだっけ。

別に5歳でも2歳でも俺からすれば全くもって関係ないことだけだな。<sup>ロリコン</sup>

とか言いつつも流石にハナビには恋愛感情は持たないから。

「それじゃあ自己紹介はそこまで。明日から任務をやるわ。さつき銀髪くん　もうタイガで良いわ。タイガが言った様に本当の卒業試験。」

内容はサバイバル演習。ただし私対あんたたち3人。卒業生中33名中下忍と認められるのはわずか12名。残り21名は再びアカデミーに逆戻り。つまりこれは脱落率63・6%の超難関試験よ」

アンコさん？アンコ先生？の言葉に白とハナビは……うん、怖気づいてないな。逆にそれで上等みたいな顔だ。そうじゃないとこっちが困る。

「ふふ……どう？流石のあんたたちもこれには怖気づいた？」

アンコさんも人が悪いよな。

別にそんな挑発的な笑みを浮かべられても誰も乗らないって。

ただアンコさんが喋りたそうだから空気読んで黙ってただけなのに。

「……まあそれでもいいんじゃないですか？俺たちは全員合格しますし、落ちるヤツは落ちる。たったそれだけのことでしょ？」

それでも乗らないとアンコ先生が可哀相だ。

「ふふ……タイガくんの言う通りですよ、先生」

「そうです！ハナビたちは合格して、落ちるヤツは勝手に落ちちゃえばいいです！」

ハナビも言う様になったな。

これでモブじゃないキャラが落ちたら洒落にならないんだけど。

「そう。それじゃあ楽しみにしておくわ。詳しくはこの紙に書かれてるから時間通りに集合してね？それと朝御飯は抜いて来た方が良いわよ？吐くから」

あゝあ、アンコ先生行っちゃった……。

もう少しゆっくりお話したかったのになあ。

あの人話せば面白そうだから好きなのに。

特にあの何処から湧いて出るのかわからない独創的な発想がな。

「ま、今日は帰って明日に備えようぜ？ハナビはウチに泊まるか？」

「いいんですか！？兄さまのお家にお泊りなんてハナビ初めてなので楽しみです！準備が済んだら行くので先に帰っててください！」

はは、嬉しそうなハナビを見るとこっちまで嬉しくなってくる。これが妹ってものなのかねえ。

めっちゃ抱きしめたいくなるのは俺だけではない筈。

「それじゃあお先にな」

「また後でね、ハナビちゃん」

「はいです！」

まあハナビが来るまでの間に俺達も忍具の準備とか整えとかか。それと……あつ、アンコ先生の呪印も演習の前に封印しとかか。別にアカデミーは卒業して実力を隠す必要はないし、もうチート目を開眼させても過激派からは『里の忍だから』と言う理由で穏便派が守ってくれるだろうし。

それと封印術なら多重影分身の術が載ってた禁術の巻物に幾つか載ってたしな。それで俺に負荷の掛からないものを選べば何とかなるだろ。

ふっふっふ……原作なんて知ったことか！  
俺は俺の大奥を創る！それだけだ！

ふふ、なかなか面白そうな子たちじゃない。

最初は嫌だったけど、火影様も粋な計らいしてくれるじゃない。今から明日のこと考えるだけでゾクゾクしてくる

「くっ……これだけのことで痛むなんてね……。誰か呪印を完全に封印出来る人……なんているわけないか。これが無くなるのはあいつを殺った時だけ……！！」

こんなことでいちいち呪印が疼いてたらやってられないわ。  
明日はタイガに全力出させるつもりだからこっちもマジでやるうと思ってたのに……。

「はあゝ。ホント、ついてないわ……」

「おっ、アンコさんじゃないですか。こんなところで逢うなんて奇遇だな」

「……ホント、ついてないわ……」

「ははは……それで、どうだった？うちの生き残りは？」

……もう、なんなのよ。

人が無視しようと思つてたのに道を塞ぐなんて……相変わらずズレてるわね。

それに急に真剣な表情されても困るっつの。

「知らないわよ。それじゃあそっちはどうだったの？」

「いやゝ、それが俺はこれから行くところで」

今からって……もう他の班の担当上忍は全員対面式紛いなこと終わらせてるわよ？

こいつはいつまでも変わらないわね。

「なら早く行きなさい」

こんなヤツの相手するよりも明日のこと考えてた方がよっぽど楽しいわ。

それに呪印も疼くしね。

「……その様子だとそっちは好感触だったみたいだな。双子でこうも生き方・考え方が変わるものかねえ……」

まあその事に関してはあんたに同意してもいいわ。

こっちは一族の虐殺があつたことなんて感じさせない、しかも九尾の子とも仲良くできて友達も多い、それを守るために強さを求める子。

それに反して向こうは一族虐殺が根底にあつて、一族を虐殺したうちはイタチに復讐する為だけに強くなろうとする子。

そう考えたらこっちは断然当たりね。それにタイガは兄よりも強いだろうし。

「兎に角頑張りなさい。火影様もあんたならあれの面倒を見れると思っただろうし」

「ま、それなりにやってみるよ」

あんたもホントに大変な役を買わされたものよね、カカシ。

それを言うなら日向もうちほも、全員が血継限界持ちのこっちなんだけど。

さて、明日に備えて帰って寝ましようか。

ふふ、ホント楽しみだわ

## 第八話（後書き）

感想いただけたら嬉しいです



## 第九話（前書き）

基本封印に関してはスルーしてください

## 第九話

「お前らもう準備できてるか？」

「ふふふ、万全ですよ。今日は3人での初めての任務ですから」

「そうです！ハナビは全力で兄さまの為に頑張るです！でも良かったんですか？朝御飯食べても？」

ハナビが泊まりに来て次の日、俺たちは玄関を出て指定された演習場に行きながら話す。

ハナビは素直すぎるからな、あの先生の言うことも信じて朝御飯を食べる事に反対していたが、俺が『食べないと大きくなれないぞ？』とだけ言うとう直ぐに食べてくれた。  
うん、やっぱり素直な娘は良いな。

「大丈夫だつて」

「ハナビちゃん、タイガくんが言ってますから正しいんですよ」

「そうですね！兄さまの言うことやる事に間違いなんてないです！」

ははは、俺は2人からだいぶ信用されてんな。  
それだけ荷が重いけど、その分嬉しいよ。

「それじゃあ演習場に着くまでに少し確認。」

先ずは独断でアンコ先生に挑まないこと。昨日も先生が言っていた通りこれは3対1だ。どんな状況になろうとも、必ず2人以上で挑

むこと。俺は例外な。でも出来るだけ3人で行く。ハナビが後方支援、白が中距離からの援護、俺が近接でやるのが基本の形。

2つ目は2人とも全力でやること。あの人はあれでも特別上忍だからお前ら2人が本気出しても運が良くて同格だから。もちろん俺も眼以外は全力で行く。

それで3つ目。まあ有り得ない事だが死ぬな。出来れば怪我もするな」

ハナビと白の実力についてだが、ハナビは良くて中忍クラス、白は下手な上忍相手なら互角つてところか。

それだけ木の葉は層が厚いんだけど、中忍〴〵下手な上忍に人数が固まってる。

火影様とかはずば抜けてるしな。そう言えばカカシも同じ感じた。

「むう。いくら兄さまでもハナビと白さんの2人掛かりで敵わないって言うのは聞き捨てなりません！」

そんなほつぺた膨らませて迫られて来てもなあ……ホントのことなんだし。

アニコさんはそれこそ俺が呪印を完全に封じれば2人相手に挺子摺ることなんて有り得ないだろうし。

「ふふ、ハナビちゃん、仕方ありませんよ。タイガくんはボクたちを褒めて、それを鵜呑みにされて先生に挑むことが恐いんです。だから敢えてキツイ言葉で釘を刺しているんです。ボクたちに怪我をされることを何より恐れている優しいタイガくんだから出来る発言ですよ」

ちよっ！そんなにこやかにべた褒めされても困るんだけど……！！それにそこまで深くは考えてなかったからな。でも2人に怪我をし

て欲しくないのは事実だ。

ッて言うか改めてそう言うこと言われるとやっぱり照れるな……。

「あー！！兄さまが照れてるです！かわいいです！」

くっ……まさかハナビにかわいいと言われるとは思わなかった。  
まあそんなハナビがかわいくて仕方ないと思う俺もいるわけで。

「ふふ、ホントですね。タイガくんもかわいらしい一面があるのはいいことですよ？ボクはカツコイイタイガくんもかわいいタイガくんも好きですから」

「ハナビもです！」

こ、こいつら……！！

こんなこと言って恥ずかしくねエ……わけないか。2人とも仄かにほっぺが紅くなってるしな。

そんなになりながらも言ってくれるってことはホントに好きでいてくれるんだろうな。

ははは、ホント良いヤツらだ。

「おっそーーい！！」

演習場の丸太の前に着いた瞬間、開口一番に怒鳴られた。

えっと……自分の腕時計で時間を確認したけど集合時間ピッタリに  
来てるよな。

それなのに何故怒らなければならないのか。俺たち何かしたか？  
ハナビと白に目線で訴えても小首を傾げるだけだし。

「そこ！『俺たち何かした？』みたいな顔しない！普通初めての任務って言われたら高揚して早めに来るでしょーが！」

あ、魂入ってるな。今の声真似結構俺に似てたかも。

ツて言うか気持ちの高揚とか個人差だし、初めての任務って言われてもただのサバイバル演習だし、いまいちテンション上がらないんだよ。

「くっ……まあいいわ！それより今からルールの説明をするからよく訊きなさい！」

勝手に1人で喋って疲れないのかな？俺がアンコさんの立場なら確実に打ち碎かれてるだろうし。

白もハナビも『この人のテンションは相変わらず異常ですね』なんて言ってるし。

「あつ、その前に少しいいですか？」

「なによ。未だルールも説明してないのに質問？」

別に質問はどのタイミングでも問題ないような気がするけど反抗するのはやめておこう。

だってこの人好きだし、それに俺たちが時間通りに来た事に苛々してるから被曝するのは御免だ。

「質問と言っか……まあそんなものです。先生の首筋についてる痣、呪印ですよね？」

「ッ!?……なんのことかしら?」

この人も特別上忍だけに表情はそこまで崩さないで、少し崩しても直ぐに戻すか。

でもその少しだけでこの眼には十分なほど見えるわけで。

「誤魔化そうとしても無駄ですよ?日向一族　ハナビの白眼で呪印があることなんて昨日の内にわかってましたし、今の微妙な表情の変化を見分けられないほどこの眼の観察眼はしょぼくないんです」

「その眼……ふん。もう写輪眼を開眼させてるってわけね」

この話は昨日のうちから打ち合わせしてあるからハナビも白も疑問を持つことはない。

写輪眼を発動させたのはアニコさんにこの話の信ぴょう性を持たせるため。

イタチが常に写輪眼を発動させてるのと同じで、うちは一族はこの眼を使ったからと言ってチャクラ消費が激しくなるわけではない

ッて言つかチャクラ消費しないに等しいのでこっちはポンポンと使える。

「ええ。これでもうちは一族なもんで。

それで、その呪印はどうするんですか?」

「どうするも何も、これは呪印をつけたヤツが死ぬまでは消えないのよ?」

アニコさんって呪印とか封印術には詳しくないのかな?

呪印って言うのは対象者に寄生している蟲みたいなものだから術者

が死んでも無くなることはない。

実際原作でも大蛇丸が死んでもサスケの呪印は消えなかったし、それを消したのはイタチの封印術だ。

「勘違いしてるようなので教えてあげますと、その呪印は術者が死んでも消えませんよ？第三者が封印する以外の方法じゃないと消えないと思いますけど」

「……何も知らない餓鬼がほざくじゃない」

そんな挑戦的な眼を向けられてもな……。

「それじゃあ何処まで見せれば信用してもらえますか？写輪眼は見せましたし、万華鏡の方でも見せましょうか？それとも今から戦って俺の実力を測りますか？」

そこまで言って九尾並みの膨大なチャクラをアソコさんに当てる。このチャクラ量を肌で感じれば少なからず俺のことを、写輪眼を開眼させているただの下忍だとは思わないだろう。

「（なんてチャクラ……！！こんな膨大なチャクラを持つてるなんてホントに下忍なの！？それにこのチャクラを考えたら万華鏡写輪眼も強い嘘じゃないかもしれないわね……。教え子に丸めこまれるのは癪だけど、今回ばかりは仕方ないわね）」

「（流石兄さまです！！でも少しチャクラが多過ぎて痛いです……。でもチャクラ自体に優しさがあるので兄さまに包まれている気分です）」

「（ふふ、タイガくんは随分この先生がお気に召したようですね。」

大人の魅力と云うものでしょうか？それならボクも負けませんよ？  
胸に無駄な贅肉をつけている方には絶対に」

ハナビと白には少し迷惑掛けてるかな？

こんなところでここまでするとは思わなかったけど、でもそれだけ  
この人からは呪印を取り除きたいんだ。

理由は至極簡単。

もしそれをさせてくれる時はアニコさんが俺を認めてくれた乃至信用した時なんだろうし、呪印を完全に封印して万全な状態でアニコさんと戦ってみたいというのもあるから。

「……俺に任せてくれませんか？その程度の呪印なら2時間もあれば完全に封印出来ますから」

その程度って言っても大蛇丸のものだからな。根底が強いだろうから封印術施してから完全に封印出来るまで時間が掛かるんだよ。

それに原作でイタチがやったのは剣自体に封印能力があったからでそれを俺がただの術で再現すればいいだけの話。

封印に使うのはどっちの身体にも負担がなくて数秒で終わる様な禁術の封印術だ。

俺がなんでそんなこと出来るかって言うと輪廻眼の瞳術だからとしか言いようがないよな。

「時間が掛かるわね。それじゃあ演習をする時間がないじゃない」

大の大人がほった膨らませて拗ねんで下さい。

そう言う子供っぽいところを見せられるとかわいいと思っちゃいますから。

「また我が儘を……。長い目で見れば2時間なんて直ぐですよ。そ



れにこれで呪印を完全に封じれたら俺たちの合格、それで後から個人個人の實力を測れば良いじゃないですか」

「仕方ないわね……。ならそれでいいわ。早くして」

はあ、この人も案外訊きわけ悪い方なのかな？

まあ見た感じ訊きわけは悪そうだけど、今回は俺の交渉で納得してもらえたようだ。

「それじゃあ……流石にここじゃ不味いですね。どこか室内に移動できませんか？」

「もしかして外じゃ出来ない様な事するの……？」

「いや、まあ……はい。と言っても先生が裸になるだけですけど」

「~~~~~ッ！！それは絶対にイヤ！」

あらら、顔真っ赤にして、先生も案外初心　じゃなくて、これは白とハナビには了承済みだぞ？説得するのにかなり時間掛かったけど。

それに俺だって先生の裸見るなんて恥ずかしいことはしたくないけど、これが一番良い方法なんだ。

と、言うのは全て冗談で。

「大事なところは隠していてくださいよ？俺も見たくないですから」

「ちょっと！どういう意味よ！おさんの裸なんて見たくないってわけ！？私は未だ24なんだからね！？　上等よ！見せてあげるわ！来なさい！」

「は！？別に見せなくてもいいって！

先生は裸になってハナビと白から身体に封印に必要な術式を書かれて、俺がそれを使って封印するだけだから！」

とか言ってみたけど先生の耳には入っていない模様で手を取られて引っ張られる。白とハナビはそれを見て恨めしそうにしているが、封印を優先するために何とか抑えているようだ。

ツて言うか言葉の綾と冗談で妙な闘争心掻き立てちまった……。

見たくないわけじゃないけどさ……それを見たら俺の中で何かが変わる様な、何かが弾けるような、切れる様な気がするから見たらダメだと思っただよ。

結局道中で何とか説明して、どこかの室内に到着。

アニコさんが裸になる必要もないのに室内に入る理由なんてのは封印術をあまり人に見せたくないから。

それで結局封印は何事もなく終了。

ハプニング的なこととか特筆できることがあれば良かったんだけど、そういうのも特になかったので封印の様子は割愛させてもらった。

「それじゃあ先ずはハナビ、来なさい！」

そしてもう封印してから3時間経ち、今はまた演習場に戻って来た。呪印の封印の報告は後から俺も付き添わなきゃならないみたいだし、その序で写輪眼のこととか他諸々言わなきゃならなくなるだろうし

……鬱だ。

それに反してアンコ先生は呪印が無くなったお陰でチャクラを限界近くまで使っても何ともないし、元気いっぱいだ。瘡も消えたし、これはこれで喜んでおくか。

「先生には……負けないです！」

「大丈夫だって。ハナビも直ぐに大きくなるわよ」

ああ、先生の厭らしい目線が明らかにハナビの慎ましい胸に向かつてる。

未だハナビは10歳なんだから気にする事じゃないだろ。

気にするべきは15歳の      ヒツ！？白に睨まれた気がするけど……は、白の事じゃないからね！？

「むう！そんなに大きくても垂れるだけですっ！」

対するハナビもアンコ先生の女らしい胸を見ながら訴える。

これは一体何の勝負ですか？先生はハナビの忍術や体術を見るんじゃないで口術を見るんですか？

「言ってくれるわね……！！慎ましいだけじゃ男は振り向いてくれないわよ？」

ああ、もう！子供の挑発に良い大人が乗るんじゃないよ！

アンコさんはいつまで経っても子供なんだから……。ま、昔のことは知らないけど。

それでもお母さんはそんな子に育てた覚えありません！

「むむむ……！！兄さまはハナビを好きと言ってくれます！先生にはそんな相手もいないです！」

おいおい、その発言は流石に不味いと思うぞ？

ハナビはどや顔で笑ってるし白も笑ってるし……ここは先生が大人な対応してくれることを願おう。

「……タイガ、あんた私のことどう思う？」

ここで俺に振るか！？

それにアンコ先生の声が異常に低いし表情がわかんないくらい曇ってるし、白とハナビは『一蹴にしてやれ』みたいな顔で見てくるしよ……。

「いや、あの、まあ……一応俺たちの先生なんで……良いと思いますよ？」

具体的には何処とは言わない。それを言ったら広義な『良い』と言う言葉を選択した意味がない。

「兄さまはこんな年増にもそんな優しい言葉を……！！流石兄さまです！」

ハナビがすっげーポジティブで良かったと思う。

別に年増じゃないし、綺麗なお姉さんって感じだけどそこを突っ込めばめんどくさいことになりそうなのでやめとこう。

「うふふ、タイガくんも罪な人です。この罪は今日の夜にしっかりと支払ってもらいますよ？」

良かった！今日は火影様のところにアンコ先生の報告に付き合われる予定で良かった！

眼のこともあるだろうし時間掛かるだろうから白に何かされる事はないかな……？

「ふふふ、どう？タイガは私のことを好きって言ったけど？」

いやいや、好きなんて言ってますんけど？

「それはお世辞に決まっています！」

だから言っていないよね？

「タイガ？」

「兄さま？」

『さあどっち！？』みたいな顔で一斉に俺の方を向かないでくれ、  
恐いから。

「お世辞じゃないっすけど……」

「だって。タイガは本気で私のことが好きみたいよ？」

「むむむ！でもそれ以上にハナビのことを好きに決まっています」

そして又もや俺を見る2人。

はあ、もう勝手にやってくれ……。

## 第十話（前書き）

今回は最後の方が見せ場です。  
いやゝ、最後の方は書いてて楽しかった。  
やっぱ大所帯がいいですね

## 第十話

演習も終わって白にハナビを家まで送らせて、俺とアンコ先生は火影邸へ向かっている途中。

夜道を女の子だけで歩かせるのは居た堪れないので当然の如く影分身を一体つけている。

「そう言えば……先生はなんで担当上忍になつたんですか？」

「そうねえ……別にりたくてなるヤツなんか滅多にいないし、私もその1人よ。ツて言うかもともと特別上忍だから異例なのよね。それもこれも火影様の命だから仕方なく、つてところかしら」

アンコ先生、そんな今でも咋にイヤそうな顔されるとこっちの居心地が悪くなるからやめてほしい。

でも火影様の命とはいえ、一応俺たちを担当に持つてくれて合格にしてくれたつてことは俺たちと付き合つていけると判断したからだよな？

まあ呪印の封印を脅しの材料に使つて合格したみたいなものだが、それはそれだ。

「ふーん……あつ、先生。自分1人で何でも解決しようなんて思わないでくださいね？俺らの先生はアンコ先生1人だけなんですから」

呪印で思い出したけどこの人は自分が死んでも大蛇丸を殺す気だからな。

そんなことされたら折角呪印を封印したのが意味なくなるから、そういう事はやめてほしい。

「どういう意味かしら?」

「そのまんまの意味ですけど?」

「ふふっ……そうね、考えておくわ」

意地悪く笑って……この人俺を頼る気ないだろうな。

優しい人だから『私の教え子を巻きこむわけにはいかない』とか思ってるんだろうけど、それじゃあ先生がいなくなった後の俺らはどうしろって言うんだ。

嘗て大蛇丸に先生が捨てられて感じた事を俺らにも感じろって言うのか?

まあその感情はベクトルが違うだろうけど、それでも「師匠・先生がいなくなる」と言うことには変わらないからな。

「で、どこから入るんですか?」

「そんなの決まってるじゃない。窓からよ」

暫くそんなことを考えていたら、火影邸に到着。

隣を見れば嬉しそうに笑うアンコ先生。

窓からって……もう夜なんだから玄関から入ってもいいんじゃないの?

別に緊急なあれでもないわけだし。

まあアンコ先生がそう言うなら逆らう気はないけれど。

「それじゃあ入りましたよ　って何やってんですか?」

「窓からって言ったなら窓ガラスを割って入るんだからこうしないと



ね  
」

馬鹿だった。

俺らの先生は俺の想像を凌駕するほど馬鹿だった。

だって俺らとの顔合わせの時に、窓ガラスを突き破った時に羽織っていた黒いコートを羽織りながら薄っすらと笑ってるんだもん。  
ッて言うか火影様の家の窓ガラス割ってもいいのか？

「じゃあ俺先行ってますんで」

「ちょっ……待ちなさい！」

結局アニコ先生が来る前に俺が窓ガラスを全部開けておいて、わざとでない限りぶつからないような状況にしたおかげで先生は普通に入って来てくれた。

「ふむ……それで、何故お主が一緒に？」

「その事なら私が。私の呪印がありますよね？それをこの子ら第十一班の子たちにばれたみたいで、それで呪印を完全に封印してもらったわけです」

先生、話の粗筋を端折り過ぎだ。そんなことで火影様が納得できるわけないだろ。

「なッ！？それは本当か！？」

納得した！？ビックリしてるけど話の内容はしっかりと理解出来たんだな。

さすが火影様……なのか？

「はい。お陰さまでこの通り。それで第十一班ですが……」

「まあ合格で良いじゃろう。しかしその話、もう少し詳しく訊かせてくれんか？」

よっし！これで本当に合格したわけだな。

でもこれからが大変なんだよな。たぶん今から結構な時間かけて尋問だし。

「それなら俺が。まずは先生の呪印を封印した術ですが……禁術です」

「ッ！？」

火影様、声にもならない様な叫びを上げて驚かなくても……。

アニコ先生にはもう言ってるから驚かれることもないし、何よりさっきまでやっていた演習でアニコ先生は俺の実力を見てるからな。大抵のことじゃ驚かないだろう。

「えっと……それで禁術を憶えた経緯ですけど、ナルトと一緒に封印の巻物とか禁術が載っている巻物全てに眼を通しただけです。因みに全部使えます」

「……は？見たただけか？」

「はい。この眼の特質みたいなものですね」

「輪廻眼！？ いや、万華鏡写輪眼か？」

「（ふふっ……。驚いてる驚いてる）」

アニコ先生、火影様を取り乱してるのに横で忍び笑いしてやるな。なんか可哀相だから。

「仰られる通り万華鏡写輪眼ですよ。少し異質ですがね。この眼で術式を見れば会得出来るんですよ。もちろん人が印を組んだのを見ても同様に会得できます」

「（この歳で万華鏡写輪眼……。イタチ以来の天才か？それに禁術を全て使えるとなると……。これはダンゾウのヤツが狙ってくるかもしれんのう。わしとてこの逸材をむぎむぎ下忍にして放っておく事なぞしたくはないが暗部に入れるのは無理じゃろう。ふむ……。暫くはアニコのところで修業でいいかの。それなら里内でも里外からの手出しも出来んじやろう）」

火影様……。深く考え込んで何してんだ？

そんなことするならさっさと俺を家に帰らせてほしいんだが。家に帰ったら白が料理作って待っていてくれてるだらうし、温かいうちにご飯を食いたいし、白を待たせたくないからな。

「火影様？」

「おお、スマンのう。今日はもう遅いからその話はまた今度じゃ。もう帰っていいぞ」

「それでは失礼します。アンコ先生もまた明日」

やっと帰れるのか。

商業スマイルで火影様に微笑んで会釈後、アンコ先生には素の笑顔でニツコリと微笑み挨拶をする。

人間だからこのくらいは普通でしょ。

「気をつけて帰りなさい」

するとアンコ先生もニツコリと微笑んで手を振ってくれる。

この人笑うとかわいいし子供っぽいよね、なんてことを思いながら俺は帰路に着いた。

『あのさ！あのさ！もうタイガが帰って来る前に始めない？』

『なに言ってるのよナルト！みんなが揃ってから始めるのがふつーでしょうが！』

『そんなこと言ってるけど、いないのがタイガじゃなかったら始めてるよね、いの場合』

『ななな、何言ってるのよチョウジ！そんなことあるわけないじゃない……！』

『お？顔紅くして　　ぶほあ！』

『キバ、うつさい！違うつて言ってるでしょーが！』

『ただ、大丈夫、キバくん？』

『ヒナタ……心配してくれて……（ガクッ）』

『き、キバくん！？』

『大丈夫よ、ヒナタ。キバはあんたに心配されたのが嬉しくて天命を全うしただけだから』

『めんどくせエ……』

『むっふふ……！！』

『ちょっとシカマル！なに勝手に食べてるのよ！それにチョウジも！』

『2人とも、タイガくんが帰って来るまで待ちましょうね？』

『は、はい……』

……何やってんだ？

自棄に俺ん家が騒がしいと思って耳を澄ませてみたら騒ぎ倒す馬鹿がいっぱいいるじゃないか。

ツて言うか人の家で何してやがる？

「ただいま」

まあ中で何が起きてるかわからない

大体のことはわかってし

まうのも現状　状況のまま外で静聴してるのもあれだしな、取り敢えず中に入ることにした。  
俺がない所為で何かが始まらないらしいので、俺ん家なのに完全なアウエーを背負ってな。  
マジ最近の在中日本人の気持ちがわかるぜ。

「あつ、タイガが帰って来たみたいだよ！それじゃあ僕は食べてるね！」

「もう……チョウジったら……。それじゃあみんなももういいわよ。私が出迎えてくるから」

ここ、俺の家で間違いないよな？

なのになんでこんなにアウエーなんだろう？

出迎えられるのは何故だろう？

なんて思っていたら、いのが既に俺の前まで来ていた。

「お、おかえり……。そ、その……みんなで合格パーティーすることになってね、それでタイガの家でする事になったの。もしかして……怒ってる？」

いのがめっちゃ気まずそうに涙目になりながら俺の顔を覗き込んで来ている。

質問の意味が理解出来ないけど、たぶん俺が黙ってたのが原因なんだろうな。

「別に怒ってねえよ。それよりおめでとう」

涙目で上目遣いなんて怒っててもそれだけで許しちまうっつの。

まあそんなこと本人を眼前にして言えるわけもなく、ニカッと笑み

を浮かべて照れ隠しに金糸の様な髪を撫でてやる。

いや、これも結構恥ずかしいんだけどな。それでも何もしいよりは俺もいのも安心できるだろうからな。

「あ、ありがとう……。タイガもおめでとつ……」

なんか今日のいのは素直だな。何か変なものでも喰ったか？  
それにまだちょっと不安そうな顔してるし、なんかあったのか？

「ま、取り敢えずみんなのところで騒ごうぜ」

「うん……」

未だ不安そうな顔をしたいのと共に、リビングへと向かい、そこに繋がる扉を開ける。

ザ・ワールド！！

そこで俺の時は止まった。

だって……だって……

「なんでデメエがここにいるんだよ……」

「ふんッ！」

サスケが居たんだもん。それも自分の家に居るかのようになが物顔で。

ッて言うか俺の問いかけに答えくらい返せよ。なに？舐めてんの？  
幻術掛けて発狂させてあげようか？栄達を求めた留学生の恋人みたいになりたいの？でもお前の場合は裸襁を持っても泣けないよ？

「ッて言うか全員集合してんじゃねエか……」

まあいいや。サスケに関しては触れないでおこう。

それよりも全員集合とはあのKYでウザい御デコりんもいるのだ。

「兄さま！お帰りなさいですっ！」

ハナビまでいるし……ッて言うかいきなり抱きついて来るか、この娘は。

「お、お帰りなさい、タイガくん……！！」

ヒナタは顔紅くしてモジモジしてるけど……ナルトと何かあったのか？

「お邪魔してるわ」

てめえはもうちょっと下手に出て来れないのか、デコめ。

そしてお邪魔だと思うならさっさとこの場から去ってくれ、頼むから。今ならサスケも抽選1名様についてくるから。

その抽選に応募するのもこの中じゃデコくらいだから、さっさと電話してきてよ。

「サスケさんもサクラさんも呼んだのはボクです。みなさんでお祝いした方がいいと思っただんですけど……やっぱりいけませんでしたか？」

白に涙目で震えた声で言われると許すとか許さないとかそういう問題じゃなくなるよな。

まあ帰ってほしいとは思っけどここは白の気持ちを汲んでやるべきだよな。



「別にいいって。白がそんなに気に病むな」

「ふふっ……タイガくんならそう言ってくれると思っていましたよ？」

ニツコリ笑顔で白のヤツ、確信犯だったか。

やっぱこの女に甘い性格ッて言うか友達に甘い性格ッて言うか、そういうの直した方が良いよな。

「あのさ！あのさ！さっさと乾杯しようぜ！もう腹が減って耐えきれないってばよ！」

ナルトッてやっぱり良いヤツなんだよな。俺が帰って来ても合格祝いの乾杯するまではちゃんと待ってくれる様なヤツだし。

ッて言うか食ってるのはチョウジだけなんだけどな。

そう考えたらチョウジッて悪いヤツ？いやいや、そんなことはない。だってあのチョウジが俺が帰って来るまで待ってたわけだし、友達想いなヤツだよ。

「ナルトの言う通りだ。何故なら今日のご馳走、白が作ったものに加えてみんなの家で作ったものを持ち寄ったからだ。因みに俺のは重箱で持ってきた」

シノ……お前はどこまで重箱を引っ張る気だ？俺はそろそろ限界を迎えそうなんだから、そろそろやめてくれ。

「そ、そうよ！早く始めましょ！」

いのの言う通り、もうみんなを待たせるのは可哀相か。

「それじゃあみんな揃って下忍になれたことに……カンパーイ！」

ってことで祝宴の幕が上がった。

「タイガ……これ、私が作ったんだけど……食べてくれる？」

「わかった。ありがとう」

いのは頬を赤らめながらすすつと皿を俺の目の前に持って来てくれる。

そんなに恥ずかしそうにして、俺の為に作ってくれたんだと思うと嬉しくて頬が緩んでしまう。

「べ、別にタイガの為に作ったんじゃないんだから……！！タイガはただの実験台なんだから……。は、早く食べて感想聞かせてよ……

……！！」

ははは、やっぱいのはこうじゃないとな。

そんなにツンツンしなくても、俺はお前のことを好きだからな。

まあそれと同じくらいこいつら全員（サスケとデコは除く）好きだけど。

「それじゃあいただきます」

待ちきれないと言った表情で俺を見つめてくるいのを焦らすのも楽しそうだけど、そんないのの為に早く食べてあげる方が得策だろう。俺が料理を口に運ぶ時に期待に満ちた目で見つめて来たから尚更。

「……………」

しばし無言でいのの料理を噛み締め味わう。  
いのはと言うと俺が無言なのがよっぽど不安なのか瞳を潤ませて  
いる。

おいおい、いのさん。あんたはいつの間にそんなに乙女チックにな  
ったんだい？とは禁句。

いのだって家庭的で良いお嫁さんになれるのだ。

「……………美味しくない？」

ちよっ、焦らし過ぎた！

いや、焦らしたって言うか普通に美味かったからついつい味わって  
しまったんだけど。

それで泣きそうな声されちゃ困るのなんの！

「美味しいよ。いのの愛情が籠もってて」

それでも焦らずに我ながら恥ずかしい台詞をチョイスする。  
たぶん今俺の顔真っ赤なんだろうな。

「あ、愛情なんて籠めてないわよ……………！！でもありがとね、タイガ」

やつぱりほつぺを赤らめながらツンデレだけど最後は乙女チックな  
いのさん。

なんかだいたい印象変わったって言うか、大人になった気がするって  
言うか……………あつ、いのが化粧してる所為もあるのかな。

それでもかわいいというより今日は綺麗ないの。そんないのにもかわ  
いいわけで。

「ヒューヒュー！御暑いねエ！」

キバ……俺は別に構わんがいのにはダメだと思う。  
ツて言うかいつの間に天国から戻って来た？俺が帰ってきた頃には  
未だ天国だったのに。

「そんなんじゃ……ないわよー！ー！ー！」

「ぐほっ！ぐはぁ！うつ！はっ！ぼっ！どふぁ！」

いのの激砲。

離れたてられたことでのいのの顔はさっきよりも紅くなり、目にも止  
まらぬスピードでキバの懷に潜り込み、キバにリバーブローからの  
ガゼルパンチ、そしてテンプシーロールでキバをダウンさせた。  
しかしそれでも終わらないいのの攻撃。

「これでも喰らいなさい！ー！」

「待て待てギブだ……ギャアアアアア！」

倒れたキバをうつ伏せにしてからのキャメルクラッチ。

「これで終わりよ！」

ゴキッ！ー！

更にそこからジャーマンスーパーレックスへの発展。

途中までボクシングだったのに最後は完璧にプロレスだったな。

ツて言うかキバは大丈夫か？『ゴリっ』って骨が折れたりする時の  
効果音じゃないの？

まあいのを離し立てたキバが悪いから致し方ないけどな。

「死……ぬ……ガチで」

「き……キバアアアア！しっかりしろおおおおお！！」

今本気で『ガチで』ッて言ったな。小声だったから俺くらいにしか訊こえてないみたいだけど。

それでもナルトはキバの心配をしてやるんだな。やっぱり良いヤツだ。

「い、いのちゃん、流石にやり過ぎじゃ……」

「いいのよ。キバはあれくらいしないとわからないから。それとヒナタもあんまりキバを甘やかさないでよ？あいつったら直ぐつけ上がるんだから」

「う、うん、そうだね」

もうすっかりいのからさつきまでの火照りはなくなって、顔もすっかりといつもの色。

もう少し恥ずかしがるいのとを見てたかったのに……キバ、邪魔してくれるな。

ヒナタもキバを一瞥していのの言うこと素直に聞いちゃうんだもん。

そこまではわかるけどその後に俺を見てモジモジしながら顔紅くして……なんなんだ？

「ま、そんなことは気にせず！今度は白の」

食べ慣れた白の料理を口に運ばうとそれらしき皿に箸をのばすと誰かがその皿を取りやがった。

だれだ、俺の得物を横取りしようと言うヤツは。  
大体見当はついてるけど少し睨みながら顔を上げてみる。

「これが欲しければ俺と勝負しろ」

予想外なことに俺の兄貴が取っていた。

ごめんチヨウジ。俺は確認もしないでお前がやったと思っていたよ。  
こんな俺でもよければ許してこれからも友達でいてくれ。

「それは俺のモノだ。欲しい欲しくないじゃなくて、それを食べるのは俺の義務だ」

「ふんッ、だから義務を全うしたければ俺と戦えと言っている」

あーあ、サスケの所為でみんな楽しそうだったのに静かになっちゃったよ。

居るのは構わないけど、そう云う事だけはやめてくれって。  
いつまで他人に迷惑掛けりや気が済むんだ、餓鬼が。

「俺がお前と戦う義務はない。いいからさっさと返せよ」

「戦わなければ俺が食うまでだ」

……あれ？この子なんで顔紅くさせて白が作った料理見つめてんの？  
なに？この子白のことが好きなの？  
むっふふ、やべえ面白くなりそうだ。

「さ、サスケくん！私も料理作って来たんだ〜なんちゃって……  
！！」

デコは心の中で『このままじゃサスケくんが白の毒牙に！！なんとしても阻止しないと！そしてその後キツス……しゃくんなるく！！』って脳内暴走してるんだろうな。  
ツて言うかどうかやってキスまでつなげた？

「いらん」

「「ぶふっ！」「」

一言でサスケに一蹴にされたサクラを見て俺といのは同時に嘖いてしまった。

いや、だって即答で断られたんだから仕方ないだろ？

キツ！

でも流石に恥ずかしそうに顔を真っ赤にさせて睨んできたからいのが可哀相だと思ったんだろう、いのが笑うのをやめたので俺もやめた。

まあ未だ心の中じゃ俺もいのも大爆笑だけど。

「それなら俺が食べるってば！」

「あんたにはやらん！」

なんでだろう。今度はナルトがサクラに一蹴にされたのに笑いが起こらず、殺意しか芽生えない。

まあそんなの友達を罵倒されたからだよな。

ナルトはそれでもめげずに頑張るみたいだから俺は手出し口出ししないけど、もしそうじゃなかったらデコを一発殴ってるだろうな。

「やるのか、やらないのか？」

「だからやる気はないって」

サスケの存在すっかり忘れてた。

「ふんッ、臆病者が……」

そんなこと言うな！

俺は別に構わないけど俺を明らかに罵倒する様な事言えば白がお前を殺し兼ねないから。

「（白、それだけはやっちゃダメだ）」

「（ですが！！サスケさんはタイガくんを馬鹿にした！これは許せません！！）」

「（ありがとな。俺はお前のその気持ちだけで十分だから、それは仕舞ってくれ）」

「（……タイガくんが言うのなら仕方ありません……。ですが次彼がタイガくんに失礼な言葉を投げかけた時は……）」

ほらな？下忍じゃ察知できないくらいの殺気で人を殺せるくらいに白は強いんだよ。

因みに今の会話は全部目だけで行われた。

俺を好きでいてくれるが為の、白がそれだけを俺を慕ってくれているが為の行動だが、俺は白にそんなこととして欲しくない。

わざわざ白がこいつ程度の血で手を汚す必要はないんだから。



「……別に俺は臆病者でも構わねエよ。だからさっさとその皿を寄せ。それともそんなに白の料理が食べたいか？」

「……ふ、ふんッ／＼／＼／」

馬鹿だよ……この子わかり易過ぎるでしょ。

そんな昨にほつぺを染められても反応に困るんだけど。

それにお前が想いを寄せる白はそんな気持ちに微塵も気付いてないし、気付いてても応える気なんてないし、寧ろ今殺そうとしてたくらいだし、そもそも白は俺の大奥の一員だから俺の帝国でそう言う邪な考えはやめてほしい。

「……それやろうか？」

「……ふ、ふん／＼／＼／」

「やるから勝負なしな」

「……こ、今回だけだ／＼／＼／」

お前……どんだけ白が好きなんだ。デコが向こうで泣いてるぞ？  
まあ俺には関係ないことだから気に病むなんてことはないけど。  
一先ず、一件落着だな。

## 第十話（後書き）

感想とか待ってます。

出してほしいハーレム要員とかも言うてくださればできるだけ出しますので、どんどん言うてください

## 第十一話（前書き）

あれ？いつの間にかものすごいアンチをされていたサクラがここに  
いる

## 第十一話

『と言う事じゃ。お前さんたちにはカカシ班の増援に行ってもらう。報告では霧隠れの抜け忍が出て来て、これから忍同士の戦闘の危険性がある。だからBランクを無傷でこなすお主らに行かせる。それにうちはタイガは窮地での戦闘でうちはサスケの写輪眼の開眼の切っ掛けになるかもしれんからな』

そんな事を言われて、俺らアニコ班は波の国で任務を目下全う中のカカシ班の増援に行く事になった。

報告にはなかったけどこれって確か桃地再不斬が出てくるところだよな？

ビンゴブックにも載るS級の犯罪者が相手になるわけだから、実質A以上つてところだな。

因みにBランクを無傷っていうのは本当だ。

そもそもBランクなんて中忍レベルの忍が相手だから大したことないんだよ。

「兄さま兄さま！波の国って忍者がいるですか？」

アカデミーじゃそんなこと習わなかったからハナビが疑問を抱くのも当然だよな。

俺は原作を知ってるからそこら辺は大体把握してるからわかるけど。

「いや、波の国に隠れ里はないと思うぞ。ね、先生？」

ま、ここで俺が断言するよりは先生に振った方が自然だろ。

ハナビからの信用度で言えば俺の方が先生よりあるけど、それでも

俺と先生がどっちも断言すればそっちの方が信憑性が高くなるって話だ。

「そうね。でも霧隠れの抜け忍が雇われてたって報告もあったから油断はしない方がいいわ。もう完全に波の国の湿地帯だし、いつ出て来てもおかしくないわね」

あつ、そう言えばここら辺で再不斬が出て来たんだっけ。

でももうナルト達が撃退して……でもその後再不斬はどうなったんだ？

白は今俺の隣でニコニコしながら歩いてるし、白の代わりでもいるのか？

まあそれはカカシ先生に訊けばわかる事だから今考えることじゃないな。

それに戦っても負ける気はないし、俺の友達を傷付けもさせない。

「でも向こうは橋の工事の中断が目的ですよ？こんなところにいて護衛する人もいないボクたちを襲ってくる様な無駄な事はしないと思いますよ？」

それはそうだけどさ。白、先生はどんな時でも気を抜かないようにしないとイケないって言う意味で言ってるんだと思うよ。

まあ白ならそんなこと言われるまでもなくやってるだろうけど。

「屁理屈言わない！それがわかってても、無駄ってわかってても万が一のことを考えてやる！それが忍よ！アカデミーで習わなかった？」

先生もそんなに熱くならなくても……。

いい大人なんだから子供の言うことなんてサラッと流すくらいはし

ようよ。

まあそんな子供っぽい一面を持ち合わせる先生も好きだけど。

「落ち着いてくださいよ。そんなに興奮しなくても白もハナビもわかってますから」

ここは俺が諭してみるほかないのかな。

「そうです！そんな常識ハナビでも知ってます！今更言われなくてもわかってるです！」

……おいおい、ハナビ。俺が折角アンコ先生を落ち着かせようとしてるのになんで煽る様な事を言うんだ？

しかもその言い方じゃ俺に乗ったみたいになるんだけど？

「そうですよ、先生。そんな常識を今更ボクたちに言われても困ります」

白も……なんでそんなに先生を怒らせようとするんだ？

そんなに先生が嫌いなのか？それとも好きな人には意地悪したくなるって言うお年頃？

いや、それはないな。2人とも俺に意地悪なんてして来ないし、寧ろ優し過ぎるし。

「あんたらねえ……！！！」

もうー！！先生も乗っかつちゃダメだって言ってるのに！  
はあ、この後どうなったかは想像してくれ。

俺らの班の移動速度は他の新人の班とは比べ物にならないほど速いため、もうタズナさんの家まで着いてしまった。

まあ増援ってことだから速めに移動したと言うのもあるけど。

「……で、あんたは何してんの？」

アンコ先生の言う通りだよ、カカシ先生。

なんであんたはこんなところで寝てやがる？

「ははは……ちょっとチャクラ使い過ぎて動けそうにないんだ。それでお前に頼みたいことがあるんだけどいいか？」

そんな笑ったからって俺とアンコ先生が向けるジト目が無くなると思ってるのか？

それはいいとしてチャクラの使い過ぎってことは写輪眼を発動させただって言う事だよな。

つまり天才忍者と言われるカカシ先生でも使わなきゃいけない状況・相手に出逢ったと言う事だ。

それは再不斬と解釈してもいいよな？

「別にいいけど。なにすればいいの？あんたの介抱とかは無理よ、死んでも」

アンコ先生……カカシ先生のことそこまで好きじゃないのな。

カカシ先生の介抱するより死ぬ方がマシって……それを言われた方はかなり傷つくだろうな。

「相変わらず手厳しいな。でも今回はそうじゃない」

今回ってことは前回とかは介抱を所望したのか？

まあそこまで傷付いてないのを見ると軽いジョークみたいなものか。

「じゃあなに？」

「あいつらに修業をつけてやってほしい、チャクラコントロールのな」

えっと……原作じゃカカシ先生がつけてやってなかったか？

それくらい先の戦いでチャクラを使いきったってことなんだろうけど……それじゃ割りに合わないか？

再不斬相手だったら原作と変わらないし、俺が原作介入してるからだとしても、ナルトも原作時より強いし、言いたくはないがサスケも多少なりは強い。サクラは変わってないけど。

それだったら倒れる程のチャクラ消費はないんじゃないのか？

「仕方ないわね……。それで、あんたをそこまでにした相手って言うのは誰？並みの忍じゃあんたがそんなになるまで戦えないでしょ」

まあアニコ先生の質問は妥当かな。

俺が訊いても良かったんだけど、ここはカカシ先生のことを良く知るアニコ先生の方が自然だし。

「ああ、その事なんだがな。霧隠れの鬼人 桃地再不斬との交戦があった」

「ッ！？なんでそのことを報告しなかったの！？この子たちを殺す気！？下忍が束になっても勝てる相手じゃないわ！」



アンコ先生がカツとなるのも仕方ないことだよな。

ああ見えて結構俺たちのことを気に掛けてくれてる優しい人だからな。

でも報告して来たのは波の国に入る前だから仕方ないことでしょ。

それに俺らは負ける気なんてないし。

「あいつは追い忍に殺されたと思っていたが……どうやら生きてるみたいだ。だから修業を頼んでる。そっちの班はもう全員木登りは出来るんだろ？それならこっちのヤツらにもそれを憶えさせてやってくれ。

それとタイガ。サスケが木登りが出来るようになったらお前が個人的に修業をつけてやってくれ。同じうちは一族だ。教えてやれることは多い。

それじゃあ頼んだぞ」

追い忍つてことは再不斬の方の勢力も少なくはないってことだよな。少なくとも2人以上はいるだろうし。

木登りに関しては問題ないけどハナビには水面歩行の行を教えとかないと。

まあハナビはチャクラコントロール上手いから直ぐに出来るようになると思うし心配は無用か。

でもサスケの修行って言うのはイヤだな。

そうは言っていられない状況だから仕方ないけど……カカシ先生がこんなになるほど切羽詰まった状況じゃなかったら絶対反対だったぞ。

「仕方ないわね……」

うん、ホント仕方ないよ。

カカシ先生は後先考えずに自分を身代りにしようとする癖があるんだから。

それが過去のトラウマなら仕方ないことだけど、そう言うのは残された方が哀しいから自重してほしいもんだ。

ま、今回は誰も死ななかったから良かったもののカカシ先生がチャクラ切れで死ぬ可能性もあったからな。

ホント……に、仕方なくサスケを鍛えるか。

「りょーかいです。まあそこそこには鍛えますよ。でも双子だからってあいつも写輪眼を開眼するんじゃないか、ツて言う楽天的な考え事はしない方がいいですよ。常に最悪の状況を考えて先生はそこで作戦を練っていてください。バカ兄貴の集中力は潜在的なものを除けば高くないですから」

俺もサスケの潜在的な能力に関しては認めてないわけじゃないからな。

これでもっと素直だったら俺だってもっと家族らしく接するのにな。

「……なんで俺がこいつに修業をつけられないといけない」

ここで口を挟むなよ、馬鹿。

そんなのお前より俺の方が強いからに決まってるだろ？

それくらいはわかってくれよ。

「そ、そうよ！なんでアカデミー1位のサスケくんがアカデミー2位のタイガなんか……に教えてもらうのよ！」

いや、だから俺は別に貶されても構わないんだけどさ、そんなこと言ったら白とかハナビが不味いんだよ。

その気持ちはめっちゃくちゃ嬉しいんだけどね、ほどほどにしてくれ

ないと困るから。

「サクラさん、それはタイガくんを貶してるんですか？」

おつ、白も直ぐに手が出なくなっただのは成長の証拠だな。偉いぞ。

「何も知らないデコが生意気言うなです！」

ハナビはそこまで頭良くないから罵る言葉も単調だな、相変わらず10歳だから仕方ないんだけど、それでも俺の味方になってくれると言う姿勢だけで嬉しい。

「いくらサクラちゃんでも俺の親友を馬鹿にするのは許せないってばよ」

ナルト……お前俺のことをそんなに大切に……。やっぱり持つべき者は友だよな。

それでもみんな、デコがビビってるから殺気を出すのはやめてあげてくれ。

こんなことで仲間割れしてたんじゃ絶対に勝てないだろうし。

「な、何よ！ナルトまで！ホントのことじゃない！」

デコもそんなに焦ることないだろ。

ホントのことと思ってるならもっと堂々とするべきだとは思わないのか？

「ホントのことでも言い方などがあると思いませんか？サクラさんも『サクラさん程度の頭脳で座学だけがアカデミー1位』や『サスケさんなんて』などと言われるのは不愉快だと思いませんか？」

「そうです！くのいちで一番座学が出来てもそのていどの教養もないなんて笑っちゃいます！」

2人とも言い過ぎだけど……デコが悔しがる表情を見るのは楽しいな。

でもこれは俺がSとかではないよ？デコ相手にそんな感情湧いてきたら俺は人間お仕舞いだと思ってるから。

「サクラちゃん、タイガに謝ってくれ」

いつになくナルトは真剣な表情だな。

それだけ俺のことを大切な友達と思ってくれているということかはは、やっぱり嬉しいよな、こっぴどいのは。

「うう……わかったわよ！謝ればいいんでしょ！ごめんなさい！はい、これで満足！？」

……ウザいな。

別に俺は謝ってほしいなんて思ってたけどこんな雑な謝罪をされると反ってイライラする。

まったく自分に非がないとでも言う様に、不承不承という風に。

「それで謝っているつもりなら、サクラさん、ボクはあなたを軽蔑する」

あーあ、これは白も本格的にキレるかもな。  
ま、止める気はないよ。

今回ばかりは100%デコが悪いしな。

「白さんの言う通りです！ハナビはデコを許しません！」

ハナビも白といっしょになって切れる可能性はあるよな。

いや、ハナビの場合はもうキレてるのか？

ハナビは優しいヤツだから無暗矢鱈に手を出そうとしないし。

そう言えば白が優しくないみたいだがそれは違う。白は俺に対して優しく過ぎるから、俺を侮辱するヤツが許せないだけだ。

「俺ももうそんなサクラちゃんを見たくねエってば。だからもっとちゃんとタイガに謝ってくれ」

ナルトは案外世渡りの方法と言うのを拵えてるな。

俺もデコのこと好きなのに、飽く迄中立の立場からどちらに非があるか見定める。

こんなことつてなかなか出来ないんじゃないか？  
たぶん痛みを知るナルトだから出来ること。

「う」……「ごめんなさい……」

ま、そこまで気持ちが籠ってるわけじゃないけど今回はこれ以上ごたごたになると厄介だからこのくらいでいいか。

「別にいい。それでクソ兄貴、お前は俺と修行するのか？」

これでやっと本題に入れる      と思ったのに。

「はあ」……「」

「その溜め息はどういう意味ですか？反省してないと取っついていいんですか？」

「兄さまに対して失礼なことを言っておきながら罪悪感を抱かないなんて最低です！」

デコが溜め息吐くからまた問題が発生しそうになる。  
白もハナビもそこまで敏感にならなくてもいいから。

「だから　　「黙れ。おい、お前に教えを請えば強くなれるのか？」  
「サスケくん……」

サスケにまであつさりと切り捨てられたな、憐れなおデコ。  
サスケは白のことが好きだから仕方ないと言えば仕方ないんだけど、自分のことを想ってくれてるヤツにくらい優しく接してやれ。

「そんなのはお前次第だ。やるのはお前だ」

「ふんッ、上等だ。木登りなんてさっさと終わらせて直ぐに帰って来てやる。準備して待っている」

俺はサスケのそう言う野心的なギラギラと光る瞳は嫌いじゃないぜ？  
その強くなりたいという気持ち誰かに復讐をする為じゃなくて誰かを守るために使おうと思えるようになった時にサスケは本当に強くなれる気がするんだけどな。

「ま、頑張つて来いよ」

まあ今は何にせよ強くなることがこいつには必要なんだろ。

「それじゃああんたたちも行くわよ。ついて来なさい。白とハナビはタイガに何か教えてもらってなさい」

「こつちのことは任せて先生は行っして下さい」

「頼んだわよ」

こつちに残るってことは奇襲に遭う可能性があるって言う事だからな。アンコ先生は優しいから俺たちのことを心配してくれてるんだろっ。

でも大丈夫！俺たちアンコ班はそんなに弱くないから！

「それじゃあタイガ！行っってくるってばよ！」

ナルトのヤツ自信满满だな。もしかしてこの2週間の内にチャクラ吸着はマスターしたのか？

それでサスケを見返して……うん、いい刺激になりそうだ。

「頑張って来いよ！」

「おう！」

ははは、なんか面白くなりそうだ！

## 第十二話（前書き）

番外？的な感じですよ。

三人称は苦手なので基本会話とかメインですよ。



## 第十二話

「か、か、か、か、か……カカシ班とアニコ班が合同任務ですつてえ！？しかも滞在の護衛任務！？」

咆えた。

その言葉とは寸分も違わずに、クリーム色のポニーテールは顔を歪めて咆えた。

その咆哮は木の葉の里全土に響き渡ったと言うが、今はそこが問題ではない。

「それって……それって……サクラとタイガが一つ屋根の下で横になるってことよね！？私だってタイガの家に泊まったことなんて50回くらいしか無いのに……！！しかもタイガの先生はあの変態女だし！！どうすればいいの！？ねえ！シカマル！」

「（あーあ、めんどくせエ……。くっそ。さつさと帰って来いよ、タイガ。俺にはこいつのお守は無理だ。つーか50回も泊まったりや十分だろ……）」

焦燥としたいのに激しくシェイクされながらもシカマルは頭をポリポリと掻きながらここにはいない救世主を心の中で呼んでみる。だが、それも無駄でただ面倒な事だと思って、そこで自分からの引き離すために策を練る。

こんな時しか策を練らないのも、実にシカマルらしい。

「ならアスマに頼んで俺たちも波の国に行ける様にして貰えよ。合

同じじゃなくても何か違う依頼が来てるかもしれないだろ」

「さっすがシカマル！それじゃあ私は行ってくるから！タイガ！待ってなさいよー！」

嬉しそうにスキップしながら去って行くいのの背中を見ながらシカマルは思う。

「他人の家に押し掛けて来ておいて愚痴だけかよ……」

と。

そしてわかっていた。

波の国が金欠であり、絶対に他に依頼が来ていないことも。そして折角の休みにアスマが何をしているかということも。

いのがシカマル邸を訪れたのと同時間、場所は変わって木の葉の里の犬塚一族の敷地に、珍しい影があった。

「ききき、キバくん！そ、その……タイガくとサクラさんが一つ屋根の下で過ごすって……ホント……なの……？」

今にも涙腺が崩壊しそうな勢いで、ヒナタはキバに訊ねた。

「（か、かわいい……じゃねえ！タイガと春野……ああ、波の国の合同任務か。俺にとってはナルトもタイガもいなくて好都合で、しかもヒナタが来たと思ったたらよオ……なんでタイガの話なんだよ！

認めたくはねえが……こいつはやっぱタイガしか……いや！やっぱ認めねえ！俺は断じてそんなこと認めねえ！

って言うかヒナタはどんな捉え方をしてんだ？俺にはタイガのことになると異常な思考回路が芽生えることがすげエ……って違う！俺は認めねえ！」

ヒナタが自分を訊ねてくれたあまりの嬉しさ、その直後に来たタイガの心配というギャップを利用した技で、キバは勝手に自滅しようとしていた。

目の前にいる私服姿のかわいらしいヒナタを見ずに、ただ悶絶する。

「（き、キバくん黙っちゃった……。それってホントってことかな……？で、でもサクラさんとタイガくんがそんなことはないよね？ああん！でもタイガくんの担当の先生は変態な女の人だっていのちやんが言ってたよ……。わわ、私……。どうすればいいのかな？）」

そして目の前で悶絶するキバを無視して、その場でヒナタも悶絶し始めるのであった。

2人とも悶絶と言うカオスを演じている時、キバは気付いた。

「（ここに、これは……！かわいい！）」

悶絶するヒナタを見てキバは不純な事を思う。

「（もしかして……このまま俺の家に……。いや、待て。落ちつけ俺。ここはヒナタの質問にヒナタが哀しくなる様な返答して、それを慰めるために俺がヒナタを家に上げる。そしてそのまま部屋に連れていき。」

ヒヤッホーイ！俺にも春が来たぜエ！タイガ！ナルト！悪いがヒナタは俺がもらっぜー！）」

キバにとってはそれが完璧な作戦にしか思えず、疑いようがなかった。

しかし実際は穴だらけなのに。

「ヒナタ……」

「な、なに？」

キバの声で、悶絶していたヒナタはキバの目をジッと見つめる。

「（やべえ！これはやべえ！タイガのヤツいつもこんな感じか！チキショー！）」

さっきのことは……本当だ。タイガと春野は同じ布団の中で過ごし、一夜を明かすらしい。

（これで完璧だ！ヒナタは泣いて俺に縋って来るに違いない！）」

……情けないぞ、キバ。

しかしそれは時期に憐れと化する。

「うう……うわあああん！！キバくんの馬鹿あーーーー！！！！タ  
イガくんはそんなことしないもん！！！！」

パチンッ！！

「いてっ！ちよっ！ヒナタ！？」

完璧だと思っていたのに、その結果はどうだろう？

ヒナタを泣かせ、馬鹿呼ばわり、そしてタイガを擁護され、ピンタを一発貫い、逃げられる。

実に憐れだ。これが他人を陥れようとしたものの末路か。

「俺……もっと真面目になろう……」

地味な決意をしたキバだった。

木の葉の里の繁華街。

その一角に甘栗甘という茶菓子屋が存在する。

「紅のヤツ……遅いな」

そこには1人で女性を待つ寂しい男      アスマが居た。

いくら任務がないからと言って、こんなところで油を売っていいのか。

そんなアスマが待つ女性      紅はアスマからの執拗なアプローチ

に折れて、今日のデートを渋々承諾したのだが……。

「うわああああん！！キバくんの馬鹿あー！！」

「ヒナタ！？どうしたの！？」

待ち合わせ場所である甘栗甘に行く途中に木の葉の里を我武者羅に泣きじゃくりながら走るヒナタを見つけた。

自分の教え子が泣きながら走っているのをスルー出来るほど紅は鬼ではない。

寧ろこんな事にさせた相手を恨むくらいに優しい人だ。

「（私の教え子を泣かせるなんていい度胸ね。こんなことにしたヤツにはどんなお仕置きが必要かしら……！！）」

いや、木の葉随一の幻術使いは優し過ぎて傍から見れば恐ろしい人だ。

「うう……紅せんせ……うわああああん！！キバくんが……ひっく……キバく……ひっく……」

「大丈夫よ。落ち着いて、何があったかゆっくり先生に話してみなさい。」

（キバ……ね。私の教え子をよくも泣かせてくれたじゃないってキバ？キバって……キバよね？あのキバがヒナタを泣かせるなんて思えないけど……ヒナタに訊いてみるしかないわね）」

どんな幻術で甚振ろうかと思案していたところに、知っていた名前  
で紅の思考は止まる。

知っているというよりはヒナタと同じで自分の受け持っている生徒だ。知らないわけがない。

「キバく……が……タイガくんが……え、えっちだって……」

「そ、そう……」

（えーっと……これは……どういうこと？キバが泣かせたって言うのはわかるんだけど……タイガ？うちはタイガのことよね？ヒナタが想いを寄せてるんだっけ？アンコも何か言ってたわね。それで私

も一回話がしてみたいと思ってる相手　　っていうのは今は関係ないわね）」

ヒナタの支離滅裂な発言に頭を拗らせて困る紅。

それにしてもタイガがえっち……。それを言う時にやっぱり恥ずかしがるのはヒナタらしい。

「それで、タイガはえっちなの？

（　　はっ！？私は何を！？いや、でもこれも真実を確かめるためよ）」

言った後に後悔をしながらも、必死に自分を納得させようとする紅。無意識と言うのは怖いものだ。

「うつぐ……違います……。タイガくんは……え、えっちなんかじゃないもん……。優しく、カッコ良くて、みんなの目標で、努力家で……恥ずかしがり屋なんだもん……。」

ここにタイガが居たならば、必ずここを撃ち抜かれる様な発言をヒナタはした。しかも水樹奈々ボイスで。

普段の彼女なら有り得ない事だが、これも無意識のうちなのだろう。

「そう……そうね……。」

（ふふっ……ヒナタったら、そんなにタイガのことが好きなんだ。でも最後の恥ずかしがり屋って言うのは……褒め言葉なの？ヒナタに言われるなんて相当ね）」

未だヒナタが原因がわからないにしろ、ヒナタの純愛を訊いてホッとした紅はギュッと抱きしめていたのを弛めて、ヒナタを優しく包み込む様に抱いた。

「せんせ……？」

（え？ええ！？わわわ、私……何してたんだっけ！？キバくんの家に行つて、それからキバくんがタイガくん……うう……キバくん、ひどい……。

それで私泣いちゃつて……あわわわ！わわ、私……紅先生にいつばい喋っちゃつた……！！は、恥ずかしいよ……。ば、馬鹿にされてないかな……？）

一人で勝手に舞い上がるヒナタつて、なんでこんなにかわいいんだろうね。

人類の至宝だよ。

「さて、キバのところに行きましょうか」

「……………」

「ん？どうしたの？気まずい？」

「あの……え、えっと……」

（気まずいなんて言えるわけないよ……！！わ、私キバくん怒らせたかもしれないのに……あわわ！やっぱりキバくん怒ってるかな……？怒ってる……よね……。あんなことして……うう……た、タイガくん、助けて……！！）

キバが悪いのにも拘らず、自分に負い目を感じるヒナタはどれだけ優しいのだろうか。

いや、どれだけ自分に自信が持てないのか、と言う方が良いか。

「大丈夫よ。ヒナタがそんなに悩むことじゃないから」



「は、はい……」

一抹の不安を抱えながら、ヒナタと紅は犬塚家へと向かって歩き出した。

そのころ、犬塚家では

「キバ！あんた日向さんところの娘さん泣かせたんだって！？」

キバが母である犬塚ツメに怒られていた。

彼女も特別上忍なので、そっち方面との関係も無きにしも非ず。最も勢力のある日向家と悪い関係なんて築きたくはない。

それがどうだ？

キバが宗家の跡取り娘を泣かせたていたと、現場を覗いていたキバの姉であるハナがツメに告げ口をして来たではないか。

そして怒り心頭で今に至る、と。

「（くっそ……！！姉ちゃんは何であんなこと言うんだよ！俺だって反省してないわけねーっつの！好きな女泣かせて……はぁ）。俺……今回のヒナタに確実に嫌われた……はぁ。タイガならこういう時どうするんだろうな……）」

溜め息を幾つもつきながら嘆くキバ。

自業自得なのだが、ここまで落ち込まれると流石に同情してしまう。でも、それもないだろう。

キバからすれば『同情するなら愛をくれ』と言いたいだろうから。

「すいませーん」

「あら、誰かしら。キバ……逃げずにここにいるのよ？」

「うつ……わ、わかってるよ」

やっぱり何処の家庭でも母親と言うのは一番強い。  
その次が姉。もし父親以外男がいない家庭ならば、父親の権威は常に地に着いている。

「それにしてもどつかで聞いた声だな……。大人の女みたいな  
やべっ！？紅先生！？まさかヒナタを泣かせたのがもうばれたの  
か！？逃げ」

『ガLLLLLLLL!!』

「られねえよな……」

まるで看守の様にキバを睨みつけるツメの忍犬黒丸。

動けば今にも食い千切らんとする様な鋭い眼でキバを見据えたまま  
低く唸るので、キバは妥協するしかない。

「逃げたところで今より怒られるのが関の山だ……」

とは言うが黒丸から逃げ切る術など、今のキバにはない。

「いつもウチの息子が迷惑掛けてすいません〜！」

「いえいえ、そんな。キバくんは優秀ですよ」

「そんな。日向さんところの娘さんの方が全然優秀でしょう？」

「わわ、私ですか！？そ、そんな……私は……」

壁越しから聞こえてくる3人の声。

それに対し、キバは咋に不機嫌な表情を浮かべていた。

「ケツ！人前だけ良い母親の振りしやがって……」

実際にキバの母親は良い人だけどね。

「っていつか日向の娘ってヒナタか！？なんでここに！？　　っ

て当り前か……。はあ。なんて言われるんだろ……鬱だ……」

風船が萎む様に力なく液体になりそうな勢いで落ち込むキバ。

ポジティブのキバがここまでなるなんて……ヒナタの影響力はすごいな。

「それじゃあキバを呼んで来ますね」

「（来んな！母ちゃん！今だけは俺に構うな！居留守！居留守にしてくれ！これから家の手伝い毎日するからああああ！！！！）」

ミシミシと徐々に近づいて来る足音に、キバは身悶えしながら考えを巡らせる。

なにか、なにか良い方法はないかと。

「　　ッ！これならいける！」

そして思いついた。  
それが

「あんだ……何してるんだい？」

「……………」

死んだふりだった。

それが逆効果とも知らずに、本日2度目のミスチョイス。

「……………」

ズルズル……

「わぁー！やめてくれ、母ちゃん！俺は、俺はもう死ぬー！ー！」

「何言ってるんだい。日向さんの娘さんがあんだに謝りに来たんだよ。あんだが悪いのに。いいかい？理由はともあれ女を泣かせるなんて男じゃないよ。泣かせたら、それは全部男の責任だ。わかったらちやっちゃと入れ！」

「……なんて漢気のある母親だ……」。

自分の母親がこんな感じだったらキバ同様泣いているが、母親である彼女を少し羨ましいと思うのは血迷った証か。

「は……？ヒナタが謝りに？なんで？」

「あんだがだらしないからでしょうが！」

「のわっ！ちよっ！おいつ！」

そりゃそうだ。

キバがだらしなくなったらヒナタも謝りになんか来ないし。  
それよりも大丈夫か？ツメさんの渾身の蹴りはかなり痛そうだった  
が

「ぶはっ！」

やっぱり言うか、キバはそのまま紅とヒナタのいる部屋へと雪崩  
れ込み、床と接吻した。

「き、キバくん！？だだ、大丈夫……？」

「だ……大丈夫だ……」

（あのクソババア……！！）

ヒナタの心配する声に一言返し、キバは襖の向こうにいるであろう  
母親を睨む。

「……取り敢えず座りなさい」

「ヒッ！は、はいい！」

紅の重低音のボイスにキバはたじろぐばかり。  
やはり、これが女の強さか。

「えっと……ヒナタ、悪い。さっきは俺が悪かった……！！」

「……へ？な、なんでキバくんが謝るの……かな……？悪いのは、

わわ、私なのに……！」

ヒナタ。そんなに動揺して自分を低くしてもキバには痛いだけだぞ？

「いや、あんなこと言つて俺が悪かった」

「あわわ！そんなことないよ……！！キバくんのこと叩いちゃって……ごめんなさい！」

「（そんなに頭下げられると……はあ。こいつつてこういう時自棄に頑固なんだよな。それとタイガが関わった時か）」

キバは怯えた表情のヒナタを見ながら心の中で溜め息を一つ、そして頭を掻き毟る。

それでもこの状況を打破の仕様がなく、ただただ2人の間を沈黙が包む。

「（……何、これ？話を聞く限り私はてつきりキバが悪いと思つてただけど……ヒナタもヒナタよね。なんでこんなに優しいのかしら。あの話の通りだと私なら一発に限らずもう何発か殴ってるわね）」

そんな沈黙の中で紅はもし自分がヒナタの立場で好きな男を侮辱されたら、と言つ事を考えていた。

ここでの紅の好きな男とは誰になるか気になるところだが、彼女の場合人に知られる様な隙だらけの女ではないだろう。

「え」とヒナタ、頭上げてくれ。タイガのことは本当に俺が悪かったから。言い訳になるけどさ……悪気があつたわけじゃないんだ。その……そう、ちょっと……な」

こうなったのは自分の所為だと、負い目を感じないほどキバも無神経ではないし、他人を思いやれないわけでもない。  
寧ろ友達想いで、好きな女には殊更優しいヤツなんだ。

「う、ううん。それでもキバくんを叩いちゃったのは事実だし、こ  
っちこそごめんなさい」

2人とも未だ謝る気なのか。  
もうそろそろどっちかが折れないと限がないぞ。

「……あつ！忘れてた……！！」

そんな中で紅はアスマとの約束を思い出した。  
まあ一方的に迫られて不承不承ながら承諾したものだ。  
忘れていても仕方ないのかもしれない。

「ど、どうしたんですか？」

「いきなりデカイ声出してよお。何かあつたんすか？」

ここで紅がそのことを思い出したのは2人にとって吉だったかもしれない。

あのままではずっと決着つかずで、日も暮れそうだった。  
それならば誰かが切欠を作り、気を逸らしてあげるのが一番よいだ  
ろう。

「いや……何でもないわ。ヒナタもキバも言いたいこと言えて満足  
した？」

（あっちゃー……どうしようかしら。行くっていうのも今更よね。  
アスマとの約束なんかよりこっちの2人の関係の方が大事だし）

あーあ、アスマ……紅に振られたな。可哀相に。

まあ自分の受け持っている生徒が泣きながら走っていればそんな約束忘れるのかもしれないが、それでもアスマは紅にとって所詮そんなものだということか。

飽く迄主観に過ぎないが。

「あ、は、はい……」

「俺ももう言う事はないっすね。ちゃんと謝れたんで」

「そう。それなら帰りましょう。ヒナタ、行くわよ」

「は、はい！き、キバくん。またね……！」

「おう！じゃあな！先生もまた」

「明日からまた任務だから、今日はしっかりと休みなさい」

そうして紅とヒナタは犬塚家を去り、キバは深深と溜め息を吐く。

「はぁ。よかった……。もうヒナタと話せないかもしれないって思ってたのに……ホント助かったぜ」



## 第十二話（後書き）

続く…… んでしょうか？

それは作者にも謎です。

あの子のアスマ、いのの行動など書いてほしい方がいれば感想までお越しく下さい。

それによって続けるか続けないか決めようと思います。 飽く迄番外的なあれなので。

## 第十三話

「えっと……アンコ先生でしたっけ？修行って何をするんですか？」

この子……さっきのカカシの話訊いて無かったのかしら。  
まあ仕方ないわね。

白とハナビにあそこまで罵られて、拳句に同じ班のうずまきナルトにも、それにうちはサスケにも一蹴されたんだから。

「木登りよ、ただの」

「ただの木登りって……そんなの修行にならないじゃない！」

あゝ、タイガがこの子を毛嫌いするの、なんとなくわかる気がするわ。

なんて言うか……こう……イラッとする喋りかたよね。

「甘いってばよサクラちゃん！ただの木登りじゃないんだなー、これが！」

うずまきナルトも不思議な子だね。さっきまであんなにおデコちゃんのことを睨んでいたのにもうコロツと態度が変わってるんだから。九尾の器なんて到底思えない様なこの明るさ。これもタイガのお陰なのかしら。

「でも今先生がただの木登りって！」

……やっぱり苦手だわ。他人の言葉の綾に付け込んで自分を正当化……。  
こんなこと言いたくないけどカカシ班の足を引っ張ってるのは彼女でしょうね。  
頭でっかちで勘も悪い、それに体術も忍術もダメと来て……これ以上は可哀相ね。  
何か特化しているものがあればいいんだけど、その特化していると思われる頭の良さも実践じゃ使えない。

「それは私にとってはただの木登りってこと。あんたらからしたら不思議でしょうがないでしょうけど、あんたらには手を使わずに木を登ってもらう」

「……は？」

「（驚いてる驚いてる！これで俺がサスケより早くやって見せれば……むふふ！）」

「（その程度……ふんツ、やってやる）」

どうやらおデコちゃん以外はこの意味を理解している様ね。

座学が1位って言うは嘘なのかしら？このくらい勘づいて当然だと思っけど。

まあそれは個人差よね。ただこのおデコちゃんが私の好みに合わないってだけ。

そんなこと言ったらこのカカシ班全員と合わない気がするけど……いいわ。ウチの班には私の大好物があるしね

「兄さま！見てください！出来ました！」

ハナビは物覚えが良いと言うか、俺なんかより断然忍術とかチャクラコントロールにおいて才能があると思う。

俺が影分身で時間掛けて出来た水面歩行の行も1時間もしない内に完璧にマスターしたんだから。

「　　って水没しちゃうです！！」

ドボンッ！

……未だ完璧じゃないけど俺よりは才能があるのは事実だ。  
ッて言うか溺れてないよな？

「ハナビ、大丈夫か？」

「だ、だいじょーぶでふ！それよりも兄さま、出来たご褒美にハナビの頭をナデナデしてください！」

溺れそうになりながらもそんなことが言えるって言う事は本当に俺のことを想ってくれてるんだろ？な。

そんなに想われてるってわかると嬉しいよな。自然に笑みが零れそうになるし。

「ほら、先ずは掴まれ。いつまでも水に浸かっていると風邪引くぞ？」

「ありがとございます！やっぱり兄さまは世界一優しいです！」

ただ手を差し伸べただけなのにそんなに満面の笑みで手を取るなよ。褒められるって言うのは結構恥ずかしいんだから。それが好きなヤツからだと断然な。

前のコスモからランクが下がった気がしないでもないが、まあ気にしたら負けだ。

「ありがと。ほら、早く風呂入って来い」

「はいです!」

ハナビを引き上げたのは良いけどびしょびしょだな。

髪まで濡れてるし、服も濡れたままじゃ寒いだろうし、何より服が濡れて透けそうなところを誰にも見せたくないから、やっぱり先ずは風呂だな。

今はタズナさんの家の前で修行していて、直ぐに入れるから風邪を引く心配はないけどやっぱり心配だ。

ハナビはもう風呂に入りたタズナさんの家に入ったけど……ま、これ以上心配しても仕方ないし大丈夫だろ。

「おい」

それよりももう木登り修業を終えて来たと思われるサスケの方が問題だよな。

こいつは原作と比べて成長率が上がってるし……なんでだ?

「もう終わったのか?」

「ふんッ! 当り前だ」

念のためってわけでもないけど訊いてみたけど、こいつはホントの

天才だな。

俺も負けるつもりはないけど、ここまで自信満々でいられるこいつのポテンシャルは俺にはないし。

「それじゃあ行くぞ」

「ああ、早くしろ」

白とハナビにタズナさんの家の護衛を任せるのも不安だけど、今はこいつと2人きりで喧嘩にならないかの方が不安だ。ま、その時は普通に気絶させて終わりにするからいいか。それにこいつは強くなりたくて俺と修行するわけだからそんな無駄なことするわけないって考える方が自然だわな。

「それじゃあ行ってくる」

「はい。気をつけてくださいね」

大丈夫だって。

俺は白が心配してくれてるってだけで、みんなが待ってくれてるってわかるだけで、そこが俺の帰る場所になるから。

「それじゃあ俺を目で捉えてみる」

「ふんッ！その程度余裕だ」

こいつは俺を馬鹿にしてるのか？

目でお前如き捉えることなんて屁でもない。

いいからさっさと俺が捉えきれない速度で動いてみたらどうだ？

果たしてそんなことが出来るかは知らないけどな、フツ。

「その言葉……後悔するなよ？」

「ッ！？」

消えた！？いや、そんなわけはない！

俺に向けてくるあいつの気配はしつかりと感じる。しかも俺の周りを忙しなく動き回りながら。

くッ……あいつは本当に俺より実力が上だと言うのか！？

だが、そうだとしても、俺はお前を捉えてみせる。

それが強くなるために、イタチを殺すために必要な事ならば尚更だ！

「（サスケの雰囲気が変わったな。さっきまでの舐めた態度はもう無いし、集中力も格段に上がって来てる。この分じゃこのスピードが捉えられるのは時間の問題だな。少しスピード上げるか。ギリギリのところまで集中力を引き上げるために一気に加速なんてことはしないけど）」

チッ！あいつのスピードが上がりやがった！

くくッ……つまりあいつは俺に目で捉えられると思ったって言う事だよな。

それなら直ぐに捉えてやる！

「（また集中力が上がってるな。あの悪人的な顔は俺のことを軽視した様な顔だけど、集中力が上がったことは本気で捉えにくるつもりなんだろうな。まあそう簡単にはいかないのが世の常だ。も

もう少し逃げさせてもらおうとしよう」

未だスピードが上がるのか！？

いや、でもさっきより振り幅は小さい。

と言うことはもうそろそろあいつも限界に近いつてことだ。

それなら未だいける！

「（やっぱあの悪人面は俺のこと舐めてるな。どうせさっきより上がったスピードの振り幅が小さいから限界が近いとか思ってるんだろうけど、こつちには未だお前の顔を観察できる余裕があるんだぞ？　しかもお前に合わせてるだけだし、俺が本気出せば今のお前じゃ捉えきれないって）」

ム力つくヤロウだ。

咋に『お前じゃ本気の俺を捉えきれない』みたいな呆れた雰囲気を醸し出しやがって……！

殺気の方が未だマシだ。

「（それなら殺気当てるか。死をイメージするくらいの）」

な、なんだ……！？

震えが止まらねえ……。集中力も欠けて来た……。

あ、頭の中に死のイメージが流れ込んでくる！

このままじゃ　　！！

「（いや、流石にやり過ぎた。対大蛇丸ように耐性つけとこうかと思っただけこのままじゃあいつは自分を傷付けかねないからな。そうなれば怒られるのは俺だからやめとくか。それに戦力が減って白とかが戦場に駆り出されるのは不憫だ）」



……なんだ？今のはあいつがやったことなのか？

だとしたらなんてヤロウだ。俺が動くことも、気配を感じようとすることもやめるなんて……。

だが今のでわかった。

あいつは俺より強い

これは認める。

だからこそあいつをさっさと捉えて早く本格的な術の修行に移ってやる！

「（……へえ）。さっきよりも集中力上がってるな。しかも格段にここで折れない強さがこいつの潜在能力を引き出す要因になるんだろうな）」

見切れ！この眼で捉えきれないモノなどある筈がない。

見切れ！相手の動きを点ではなく線で捉えろ。

見切れ！あいつの全てを！

そこだ！！！！

「（もう見切られたか……案外早かったな。写輪眼は未だ巴模様1個だけで洞察眼しか宿ってないだろうけど、今のこいつには十分過ぎる産物だな。どっちかって言うとお開眼・進化とかじゃなくて自動的に写輪眼を発動できるようになったって感じだよな。こいつは一族虐殺の時には開眼させてたし）」

よっと！それじゃあ次の修業に移るか。それとバカ兄貴、自分の眼の変化にくらい気付いてるよな？」

動きとスピードを読んでクナイを投げたのに避けられたか……！どこまで楽しませてくれる。

「ああ、今ならお前に負ける気がしない」

「（それはいつも思ってることだろ？と思うのは俺だけではない筈）」

この眼が写輪眼……これなら誰にも負ける気がしない。  
そう、それがたとえイタチであつても

！！！！

サスケも写輪眼を自由に発動できるようになつたから……憶えさせる術なんてあれしか無いよな？  
そのための写輪眼なわけだし。

「今から術教えるけど……文句とか言つなよ？」

「ふんつ。お前に勝てる術ならなんでもいい」

その『ふんつ』って口で言うのやめてくれないかな？鼻で笑うなら未だしも出来ないからって口でやるのは止そうよ。

ツて言うか俺に勝てる術？そんなのお前の力量次第だから。

今から教える術だつて上手く他の術で陽動して俺にクリティカルヒットさせれば確実に殺せるような術だし、それを使いこなせるか溝に捨てるかは術者次第だもん。

「まあ一応超高等忍術にはなるけど。見るか？」

「……見せる」

随分嬉しそうだな、おい。

でもこの時期のお前に習得できるかどうかはわからねえぞ？

「そんじゃま……」

千鳥

」

チツチツチツチツチツ……

簡単な印を結んで、右手に雷の性質変化を最大限まで極めたチャクラを溜める。

鳥が五月蠅く地鳴りする様な鳴き声がこの術のネックでもあるよな。奇襲なんて絶対に出来ないし。

よくよく考えればサスケはこの時代から性質変化を学んでたんだな。ナルトは疾風伝に入ってからだったのに。

まあ性質変化を使いこなすのは別として調べるくらいはアカデミーの頃から出来るから、性質変化は後付けの設定だろ。

「これはカカシの

……！！」

「そつ、雷切。正確には千鳥。カカシ先生のヤツは本当かどうか知らないけどこれで雷を切ったらしいからな。名前を雷切に変えてるって噂」

「（名前の由来なんてどうでもいいからさっさと話を進めろ）」

そんなにジト目で見る必要もないだろ。

名前がわからなかったら術の発動の時になんて言う気だよ。適当に名前付けますか？

まあその話に関しては俺も興味ないし、信じてないけどな。

「まあどうでもいいか。説明するとこの術はただの突きだ。利き手に雷の性質変化のチャクラを流して、更に肉体活性で相手に突進して突く。それだけの術だ。」

だから弱点は相手に避けられ易いことと、この五月蠅い音で奇襲が出来ないこと。2つ目の方は補い様がないから仕方ないけど、1つ目の方を補うのが写輪眼だ。カカシ先生も雷切を使う時は絶対写輪眼を発動させるだろ？」

「確かに……。写輪眼の洞察力で確実に相手の攻撃を避けながら確実に相手を攻撃する、そう言うことか」

「それと高いレベルの体術な。動きが遅かったら何の意味もない」

まあこのくらいは説明しなくてもわかってもらわないとな。  
ナルトがこれを言い当てたら表彰ものだけど、アカデミーで1位だったならこのくらいはやつてもらわないと。

「まあ他にも色々あるけどな。取り敢えずはそんなところだ。で、やるか？このくらい出来ねえと俺に勝つなんて無理だぜ？」

「ふんッ！上等だ。そんな術、1日もあれば会得可能だ」

ホントは写輪眼で俺が発動させたのを見てるからもう会得してるんだけどな、気付いてないのか。

まあそれでも出来るか出来ないかは術者次第だからな。

特にこういった性質変化とか形態変化とかに特化した術は写輪眼でもコピーが難しいから今のサスケじゃ発動できない

「この程度か？」

と思ってたけど、やっぱりこいつの潜在的な能力とか天才肌は俺の予想を遥かに上回るらしい。

てつきり気付いてないと思ってたのになー。体が憶えてるものか。それにやっぱり余裕の表情で俺を見てくるし。

でもさあ……今のサスケのチャクラ量じゃ

「くッ！体が！」

写輪眼の発動と千鳥の発動だけで体が動かなくなるよね。しかも木登りで疲れた状態の時だから尚更。

俺はナルト（九尾含め）と同じチャクラ量だし、写輪眼の発動に慣れてチャクラの消費はないからそんなことにはならないけど、こいつは未だ慣れない写輪眼の発動だけでチャクラを結構消費するんだよな。

うちは一族だからそれも直ぐに解消されるんだろうけど。

「まさかもつチャクラが切れて歩けないんですか、サスケすわぁん？」

「ふ、ふざけるな……！この程度……くッ！！」

そんなに辛いなら意地張って無理にでも立とうとしなくていいのに。俺はお前が一言『頼む、連れて帰ってくれ』って言うてくれればタズナさんの家まで連れて帰ってやるのに。

お前は俺におんぶとかされるのがそんなにイヤか？

「おら、いつまでもこんなところで2人きりッて言うのも気持ち悪いから帰るぞ」

「……なんだこれは」

「あ？おんぶに決まってるだろうが。お前はここで動けずに餓死する気ですか？」

動けないって言っても1時間もすれば動けるようになるだろうから餓死なんてしないだろうけど、このまま放って帰るのも俺の良心が痛むんだよ。

俺だって好き好んで男なんか背負いたくねえよ。女だけで十分だ、俺は。

「こ、今回だけだ……」。

（は、は、は、は、は、白と同じ匂い……！！く、くんかくんか……）「」

……こいつぶち殺してやろうか？

人が折角好意で運んでやろうとしてんの顔紅くして後ろで鼻ならしやがって。

気持ち悪いたらありやしねえよ。

ッて言うかキヤラ崩壊してるぞ？ファンが泣くぞ？デコは泣かせてもいいけどな。

「はあ……」

ま、帰るしかないよな。

こんなところで2人きりで、しかも興奮して鼻を鳴らせるヤツを背負ってる状態じゃ誰が見ても不振に思うだろうし。

### 第十三話（後書き）

最近ヘタレ系主人公でワンピースが書きたいな〜って思ったり。  
それでももちろんハーレムで。

なんか身を呈して多くの女を守るっていうのがカッコイイよーって  
思っちゃいますよね。

ヘタレなんでももちろん最弱系で、でも自分が思うほど人から見たら  
ヘタレでなくて、悪魔の実も使いようによつてはそこそこできる。  
そんな感じの主人公がとにかく原作に関わりまくって、身を守るす  
べもないのに守りたいものを見つけていく。

そんな物語が書きたいです。っていうか書いてます。

学生時代に書いていたものなんですけどね、それを修正してだして  
みようかなって思ったり。

もちろん20話くらいのストックがたまったらですが。

そこら辺に意見をくださる方は感想とかくだされば嬉しいです。

## 第十四話（前書き）

今回はサクラ回。

それでいてストレスのたまったタイガが一瞬暴れます。



## 第十四話

「ちよつ！なんであんたがサスケくんをおんぶしてるのよ！私なんて未だ服にすら触れたこともないのに！それになんで！？なんでそんなにサスケくんはあんたの背中に張り付いてるの！？もしかしてあれ！？あれね！？どうせ媚薬と睡眠薬でも飲ませたんでしょ！？そんなことわかってるわ！だから早くサスケくんを降ろしなさい！」

はあ。タズナさんの家に帰るなりデコが今期最高潮にウザい。もつと静かに出来ないの？

おんぶしてるのはこいつが動けなくなつたからで、こいつが俺の背中に張り付いてるのは俺と白が同じ匂いだからくんかくんかやってる間に勝手に寝たからだとか考えられないわけ？

それにお前がサスケの服にすら触れてないことは銘々の責任だし、俺はこいつに飲ませるための媚薬も睡眠薬も持ち歩いてないって。そういう言い方すれば俺が白とかハナビに飲ませる媚薬とかを持ち歩いてそんな感じになるが、それは言葉の綾でそんなもの持っていない。あいつならそんなの必要もないしな。

ツて言うかお前はサスケのこと好きなら起こさない様に声のボリューム下げるとか出来ないの？

どんだけ自己中心的なんだよ。それだからお前はいつまで経ってもサスケを振り向かせることが出来ないんだよ。

原作じゃ結局『大蛇丸』>>>超えられない壁>>>デコ『くらの勢いだつたもんな。』

「へいへい、降ろせばいいんだろ？」

ドサッ

「うつ……」

「ちょっと！なんでそんなところで降ろすのよ！」

「てめえが降ろせって言ったんだろ？文句あんのか？」

俺が折角お前の言うこと聞いてやったって言うのによ……厳ついババアみたいな顔で怒鳴ってきやがって。

サスケだって目が虚ろだけど突然降ろされた俺への恨みより先に五月蠅いお前を睨んでんぞ。

「それは……こ、言葉の綾よ！そうよ！それくらいわかるでしょ！？ッて言うかわかってよ！」

は？こいつはなんで俺に逆ギレしてんだ？マジ意味わからねえ。

一瞬気圧されたくせにまた食い付いて来たのもウザい。それに無理に同意を求めてくることも。

今日やっとわかった。俺は『原作のデコ』も嫌いだけど『実際に同じ世界に存在するデコ』も嫌いだ。

「そんな事知るか。それにそんなにこいつが大切ならお前が一生傍に居てやったらどうだよ。1mmも離れずに。2人揃って隠居してる」

カカシ先生もなんでこんなヤツを合格させたんだよ。

ナルトのことを蔑んだ目で見える様な、サスケのことしか頭にない様な、周りと同調しようとし無い協調性の無いヤツを。

白とかハナビ、況してやいのだってそんなことはねえよ。

不承不承ながらも協調しなきゃいけない時は協調するし、いのは俺と違う班になったときに俺と違う班になった事に対しての愚痴は零してもシカマル達と同じ班になった事に対しては何も言わなかった。まあそりゃあいつらが旧家同士の幼馴染ってこともあるけど、そう言う事に対しての切り替えが出来るんだよ。

それなのにこいつはどうだ？目の前で仲間が危険な状況に陥っててもサスケのことばかり。それで何か言われた時は『私じゃ何も出来なかった』って言い訳するんだよ、絶対に。

あゝ！！クソ！！考えただけでイライラする！

「……………」

流石のデコでも俺からイライラが滲みでてることに気付いたんだろ。うな。反撃して来ないし。

いつもそれくらい空気読めて、まあサスケのストーカーを止めるくらしいの協調性があれば俺は何も言わないってのに。

「ほらほら2人とも、一緒に任務をこなす仲間なんですよ？それならそんなに喧嘩しないで、もっと仲良くしましょ？」

流石に自分の家をこんな険悪な雰囲気になれたら黙っていられないだろうツナミさんが険悪ムードの俺たち（正確には険悪なのは俺だけだ）を諭す様に話し掛けてくる。

その顔は一家の母親としてではなく、本当に俺たちの関係を心配したと思う様な表情。

「すいません。ちょっと外で頭冷やしてきます。なのでそこにいるバカ兄貴を布団で寝かしといてやってください。未だ動けないでしょうし、風邪でも引かれたら困りますから」

ガラじゃねえな、サスケの心配するなんざ。

まあ心配してるのはサスケじゃなくてこいつが戦力外になった時の任務の遂行度の方だけだ。

それに……はあく。ツナミさん      ツて言うか他人に迷惑掛けちまったな、私情で。

「おい！タイガ！」

ナルトにも本気で心配掛けちまったみたいだし……。

「タイガくん、大丈夫ですか？」

「兄さま……」

白にもハナビにも同じだ。

疲れてるのか？心の中とは言えこんなに感情むき出しになるなんてしかもそれが表に出て場の雰囲気まで変えるとか

「だつせエ……」

「ねえ、ナルト。なんでタイガっていつもあんなの？」

タイガくんがタズナさんの家を出て行ってからサクラさんが急に妙な面持ちでナルトさんに話し掛けました。

サクラさんがタイガくんの話題を出すなんて……ふふふ、これは面白そうですね。

「どういうことだったば？」

「だからなんでいつも大事なことは何も言わないのかって言うこと！」

「……そう言うことですか。」

確かにサクラさんの言う事は正しいですね。タイガくんは謎多き天才イケメン忍者ですから。まるでダメなところが無い完璧なボクの王子様です。

でもそんなことタイガくんのことを想っていればわかることです。いのさんもハナビちゃんも、ヒナタさんも……アニコ先生もでしょうか？ たぶんみなさんタイガくんがなんでいつも大事なことを言わないのかわかってます。

「それは……タイガが恥ずかしがり屋だからじゃねえの？」

そうです！ ナルトさんもタイガくんのことをよくわかってますね！ タイガくんは実はボクたちに『好き』とか『愛してる』とか『ありがとう』はあまり言わないんです。

その理由を訊いた時はタイガくんすごく恥ずかしそうにして『は、恥ずかしいから……』と言って……ふふ、思い出しただけで抱きしめなくなっちゃいます。

それだけかわいかったんです。

でも……タイガくんが大事なことを言わないの理由はもう1つあるんですよ。

「はあ！？ なんでそれが大事なことと言わない理由になるのよ！」

「あつ、でももう1つ、もったいないからって言うてたって

ばよ」

ナルトさん、サクラさんのことを好きなのに軽く無視しましたね。でも正解ですよ、それは。あの！いや！無視したことが正解じゃないんですよ？ボクは無意味に他人を傷付ける様な事は嫌いですから！ですから『もったいない』と言う方が正解なんです。

「どういうこと？」

「つまり……うゝん、なんて言うか……よくわかんねえってば！」

「なによそれ……」

楽天的なナルトさんにそんなに呆れないであげてください、サクラさん。

ナルトさんが詳しいことまで憶えていられないくらい頭がよくないのはわかってることですから。

ここは……仕方ありませんね。

「それならボクが説明しますよ」

「……白……」

そんな天敵を見つけたみたいに睨まなくてくださいよ、サクラさん。修業の前の一悶着はあなたが原因だったんですから、ボクが睨まれる理由はない筈ですが……。

それともサスケさんの件でしょうか？

タイガくんが『サスケは白に好意を寄せている』みたいなことを言っていましたから。

ボクはタイガくんへ愛を向けることしかしていないので周りのこと

なんて気にしてませんでした。もしそれが本当のことならサクラさんがボクに敵対心を抱く筈ですね。

でもそれは無意味ですよ？ボクはサスケさんなんて願い下げですから、あなたに譲ります。

ボクが欲しいのはタイガくんだけなんですから。

「『もつたいたい』と言うのはそのままの意味です。わかり易く言えば『大事なことを言い過ぎるとその言葉の持つ重みが薄れるからもつたいたい』と『大事なことを直ぐ言えば相手の考える力・才能を削いでしまうからもつたいたい』の2つの意味があるということですね。

ですからさっきの場合タイガくんはサクラさんに『サスケが寝てるから静かにしてやれ、好きなんだろ？』とか『迂闊な発言は控えろよ』とか言いたかったんだと思います。それがサクラさんの為にもなると思われたんでしょう」

ふふ、タイガくんの声真似するのは楽しいです。

似てはいませんが、好きな人の真似をしたいと思うのは乙女のスキルですよ。

「でも……少しくらい話してくれてもいいじゃない」

少し気落ちするサクラさんの言うこともわかりますよ。

ボクも最初は『嫌われてるんでしょうか……』と本気で悩んだ時期もありますから。

でも不思議とタイガくんを嫌いになることはなかったです。

それはボクを救ってくれたから当り前なんですけど

「でも本当に大切なことは言ってくれますから」

そうなんです。だからこそ、ボクはタイガくんのことを好きになりました。

人間不信だったボクにたくさんのお友達もくれました。

たぶんボク以外にタイガくんを好きになった方も同じではないのでしょうか？

タイガくんは『本当に声を掛けてほしい時に一番掛けてもらいたい言葉を、その時だけは恥ずかしげもなく凜として言いきる』んです。ボクはそんなタイガくんが大好きです。

ですが……もつと『好き』とか言ってくれてもいいと思います。

それにタイガくんは一緒に住んでいると言うのに夜中になにもしてきませんし……3歳も年上のボクとしてはもつと積極的になってほしいです。

でもそれも含めてタイガくんですから、ボクは待ち続けますよ。

少し気持ちを明かし過ぎましたかね？ 恥ずかしいです…

…！！

「そうです！ 兄さまは恥ずかしがり屋さんだから素直になるのが恥ずかしいだけです！」

ハナビちゃん、それをタイガくんが聞いたら顔を真っ赤にさせて口を押さえようとしますね、絶対に。

久し振りにそんなタイガくんも見たいですね。

「うん。サクラちゃんももう少しタイガと一緒に過ごせばわかるってば」

ダメですよ、ナルトさん。

タイガくとサクラさんを長い時間一緒にするのは。

ボクのタイガくん分が足りなくなりますから。



現にタイガくんがいないこの状況下で不足して来てますから。

ボクにとってタイガくん分は三大栄養素よりも大切なんですよ？

いえ、寧ろ体がタイガくんを想う気持ちで出来ていると言っても過言ではないです。

「そうね。それとあんたが人の心を理解しようとする気持ちも必要よ」

アンコ先生、いたんですか。今まで出てきませんでしたからてつきり……。

ですが先生の言うことは正しいですね。

サクラさんは自分の気持ちを他人に押し付けようとする傾向がありますから。

想い人であるサスケさんに対しても、嫌っているナルトさんに対しても。

「わかりました……。タイガが帰って来たら先ずは謝ろうと思います」

ふふふ、サクラさんも素直になりましたね。良い傾向ですよ。

これで一件落着ですかね？

「……何処だここ」

我ながら恥ずかしいことにむしゃくしゃしながら歩いていたら知らない人の家の前に立っていた。

家って言うよりも……屋敷って言うか……アジトってかんじ？

アジト……怪しい雰囲気だし、それが一番合ってるよな。それに律義に『ガトー』とか書いてあるし、思いっきり。

これはあれだな。むしろくしゃした勢いで破壊しても良い勢いだな。今ならこの中にも再不斬は居ないだろうし……。

「へっ！これで鬱憤が晴れるってもんだ！ 火遁・火龍炎弾！

100人から一斉射撃の巻！」

……やらない後悔よりやる後悔と言うが……やらなかった方が良かったんじゃないかと思うくらいに悲惨にガトーのアジトが燃えている。ッて言うか既に塵だ。

まあ100人の俺が手加減なしに高威力の火遁系統の術を発動させればこんな状態にもなるよな……。

残念なことに悲鳴すら聞こえないくらい一瞬だったし。

でもこれでこの任務は一件落着なんじゃね？

再不斬との戦闘を仮定してたが……こう言う終わらせ方もあるんだよな。

迷子になった俺……ナイス！俺をイライラさせたデコも一応ナイス！

「帰るか……」

取り敢えず来る途中に落としてきた落花生でも頼りにしてタズナさんの家まで戻ろうか。

「ただいま」

喧嘩した後の家って入りづらいよな。  
なんかこう……疎外感的なものをを感じる気がする。

『あつ！兄さまが帰って来たです！』

『そうですね、出迎えてあげましょうか』

『そうね。なら2人とも下がってなさい。ここは私の大人の魅力で  
』

『『年増は黙っていてください』』

『ちよつ、年増って何よ！私は未だ24よ！？』

『ハナビより14歳も年上です』

『ボクよりも9歳も』

『『そしてタイガくん（兄さま）とは一回りも』』

『うつ……五月蠅いわよ！年齢なんて……関係ないんだから――  
――！――！』

『最初に「大人の魅力が」とか言ったのは先生です。黙れです』

『そうですね。もう少し静かにしてください』

『そうでもなかったな。俺と同じ班の3人がいるんだったな。これで  
アウエーになる方が稀だよな。』

ははは、やっぱ俺には大奥は必須らしい。

ここで3人の口喧嘩を聞くのも楽しいけどこのままじゃツナミさんに迷惑掛けちゃうからな。

仕方ないか……。

「おーい、お前ら静かにしろよ？ツて言うか先生は先生なんだから騒がないでください、みつともない。白とハナビもあんまり先生を困らせるなよ？」

「兄さま！お帰りなさいです！」

「タイガくん、お帰りなさい」

白もハナビも満面の笑みで迎えてくれてありがとな。

「タイガ……そんなに私のこと……！」

先生はなんか涙目だし……子供の攻撃に負けるなよ、いい大人が。

「これ以上皺が増えたらいくら先生でも可哀相だろ？」

「ぶふっ！確かにそうです！これ以上は可哀相です！」

吹いてやるな、ハナビ。そしてホントに憐れんだ様な目もやめてやれ、冗談なんだから。

「ふふふ、そうですね……ふふっ」

白は笑いたいならもつと笑っても良いぞ？

我慢して忍び笑いをする白もかわいいけど、俺はお前の笑顔が見た

いんだ。

「ちよつとタイガ……どういうことかしら……!!」

せ、先生！？そんなに怒気を出して迫って来なくても……!!

冗談なんですから。それに先生は笑ったほうが絶対にかわいいって！怒ると尚更皺が増える……ッて言うか新しく皺が出来るよ？今は皺の無い綺麗な肌してるんだから、もっと大事に……ね？

「えつと……真実？」

あれ？おかしいな？口が言うこと聞かないや。

「タイガー……!!」

「ちよつ！マジで勘弁！」

そんなに怒気を纏って俺に飛び込んでくるな！そして俺の上に馬乗りになんかなるんじゃない！

と言つかさつきよりも騒がしくなってるじゃねえか。この原因を作ったのは誰だ？

マジ迷惑だよ……俺……。

「あの……ちよつと良い？」

でも何故か知らないけどデコが神妙な雰囲気での場の空気を鎮めてくれた。

用事があるのは……俺みたいだな。

そうじゃないとこんな神妙にはならないだろうし、他の奴なら俺が帰って来る前に済ませてるだろうし。

「……………なに？」

「えっと……………さっきはごめんなさい。私の気が色々と回らなくて…  
…自分のことしか考えてなかった。ホントにごめんなさい」

こいつ大丈夫か！？なにかいけない薬でも飲んだのか！？こいつが  
こんなに素直なわけがない！

「いや……………俺も悪かったから……………」

「そ、そう……………よかった。それと……………あ、ありがとね」

やっぱ何かおかしな薬でも飲んだのか？

俺に赤面しながら礼を言うなんて……………気持ち悪いな。似合わないっ  
て。

でも……………まあ俺がこれ以上何か言う必要はないかな。

「何を安心してるのかしら？」

「え？            ギャーーーーー！！！」

俺とデコが話していた時は少しだけ、少しだけ空気が読めるように  
なったアンコさんでした。

デコも妙に嬉しそうだし、白とハナビも嬉しそうな表情してるし、  
アンコ先生もさっきみたいには怒ってない。

ナルトとサスケとカカシ先生はいないけど……………3人で話でもしてる  
んだろ。

なにはともあれ……………みんな笑顔でよかった！

## 第十四話（後書き）

今回は早めの投稿。

これくらいのペースを維持していきたいなと思ってます。

そのためにはモンハンとかモンハンとかモンハンとかゴッドイーターとか……狩りゲーを控えめにしなければならぬんですがね。

## 第十五話（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。

モンハンやってて……初期装備で、初期装備のガンスで、オートガン  
ードだけスキルを発動させるだけで上位クエが1人で余裕にクリア  
できたから楽しくって……ついついやりこんでしまいました。

それにしても今作はガンスが神武器になっていて……個人的には太  
刀が好きんだけどガンスに手を出したらやめられなくなった……。  
その影響か、シシオドシに砲術王、業物、砥石高速使用、オートガ  
ードがあれば今作は敵無し。



## 第十五話

「どうしたの、タイガ？全員を招集して……」

「それを今から話しますから」

アニコ先生、そんなに怪訝な顔しないでくださいよ。

あれから先生のお仕置き的なことは先生のやりたいようにやらせたんですから、未だ不満そうな顔されてもこっちが困る。

それにみんなもそんなに真剣な表情で俺を見つめてくんな。これから話すことなんて大したことじゃないんだから。

「えっと……いきなりなんですけど……この任務は終了しました」

『……………？』

いや、そんなに不思議そうな表情されても真実なんだから仕方ないか？

ガトーは俺がもう始末したわけだから、実質任務終了だ。

「どういふことですか？」

白、ナイス。このままだったら俺からも話を切り出しにくくて永遠の沈黙が続くところだった。

「つまりガトーはもういないってこと。だから任務終了」

流石にいきなりの任務終了宣言はみんな混乱するよな。

「ガトーがいない？　どういう事だ？」

「俺がさっきガトーのアジトまで行って一瞬で灰にしてきました」

「（流石兄さまです！　やつぱり兄さまはカッコイイです！）」

「（ふふっ……タイガくんも相変わらずなんですから）」

ハナビも白もみんなポカンとしている状況で笑ってるからそんなこと考えてるのが伝わって来るぞ。

カカシ先生が訊いて来たからわかり易く説明したのに、カカシ先生もそんなに惚けることないだろ？

「灰にしてきたって……意味分かんない！　もっとわかり易く説明してよー！」

結構わかり易かったと思うけど……またデコがギャーギャー喚くと五月蠅いからもっとわかり易く説明するか。

サスケとカカシ先生はなんとか理解しようとしてるが、ナルトはそれすらも怠ってるもんな。

アニコ先生は俺の先生だから大体わかってるだろう。

「だから俺がデコと言い争いになってここを出ました。その後に適当に歩いてたらガトーのアジトにつきました。イライラしてたので八つ当たりで影分身100体出して火遁・火龍炎弾で灰にしました。鬱憤も晴れたので帰ってきました。」

はい、これでオッケー？」

「（ははは……アニコやナルトがこいつは嘘吐かないって言ってた

し、こんなしょうもない嘔吐くなんて有り得ないよな。そう考える  
となんてめちゃくちな……）」

カカシ先生、俺をそんなに憐れんだ目で見ながら掠れた笑い声出さ  
ないでください。

哀しくなりますから。

「相変わらず無茶するわね。それで桃地再不斬の方は如何だったの  
？」

アニコ先生もそんなに疲れた顔してるとホントに皺が出来ますよ？  
俺がこんなことするのはいつものことだし、無茶なんてホントは思  
つてない癖に。

「再不斬はわかりませんね。燃えた時の臭いと気配とチャクラから  
して多数の人間が中にいたみたいですけど、再不斬のチャクラは感  
じませんでしたし。もちろんガトーは中にいましたよ？」

ガトーにチャクラなんて皆無だったけどな、あいつは人一倍小物臭  
がするからわかるんだわ。

ナルト至上でヤツほどの踏み台と噛ませは居ないだろうからな。  
再不斬のチャクラはあの中で一番量が多いから直ぐにわかったし。

「でもそれなら任務は終わってないんじゃないの？任務内容は橋の  
作業をする人たちの護衛。再不斬たちがまた襲ってきたらどうする  
の？」

それくらい察してくれねえかな、デコちゃん。

俺だっていちいち記憶を遡りながら説明するのは疲れるんだ。

「それはないですよ、サクラさん。桃地再不斬みたいな極悪人が誰かの手下になることは有り得ませんから。今回だってガトーに多額の金と引き替えに交渉して橋の建設の阻止を依頼されただけでしょうし、その依頼人がいなくなれば桃地再不斬にとつて意味の無いことをする事になります。ですから彼が橋を狙ってくることは有り得ません」

ありがと、白。お陰でめんどくさい説明しなくて済んだわ。

デコは説明聞いて納得してるみたいだけど自分でこれくらいの考察はしてほしいもんだ。

「でも安心していいってわけじゃねえぞ？」

「なんでだ？ガトーがいないなら再不斬は襲つて来ないんだろ？」

あゝ、うん。説明するのが面倒だからお前は黙つてくれ、ナルト。ツて言うか俺が言いたい事はナルト以外全員わかつてるみたいだし、ナルトにだけ説明してやるか。

「再不斬は橋を襲わなくても俺らを襲つてくる可能性があるってことだ。自分は仮死状態にまでなったのに依頼人を殺されてそれを水の泡にされちゃった。そこであいつならどう考える？」

これくらいには答えてくれよ？

相手の性格の考察、行動の考察は戦闘じゃ必須だからな。それで大体の行動パターンはわかるんだから。

「う〜〜〜〜ん……………」

やっぱわかるわけないよな。お前に対してクイズ形式にした俺が馬

鹿だったようだ……。

だからもういい。唸るのをやめて楽になるんだ！

「ばっかねえ、ナルトは。たぶん再不斬ならこう思うわ……『俺を徒勞にしたヤツを殺す』ってね」

声真似の方はスルーするとして、自信気なだけあって正解だな。あとサスケにどや顔するのはやめといた方が良好いぞ。サスケはウザがつてるし、俺から見てもそれはウザいから。

「……そうね。でも相手は多く見積もっても5人もいないでしょ。それならこの戦力があればなんとか出来るんじゃない？」

デコが話しづらい雰囲気　俗に言うしらけた状態　にしてくれたのによく発言で来たな、アニコ先生。

アニコ先生も空気読めないところあるからこんな状況でも発言できるんだろうけど、少しの間と苦い表情は流石のアニコ先生でもきつかったのか。

「この戦力なんて言わないでその程度ハナビたちの班だけで十分です！いえ、ハナビと兄さまだけで！2人の愛のラブハリケーンで桃地再不斬なんて一撃です！」

まあハリケーンだったなら霧隠れの術は看破出来るだろうな。でもそう言う事を恥ずかしげもなく、目をキラキラさせながら、ほつぺを地味に紅く染めながら言うのはやめてくれ、ハナビ。お前は恥ずかしくなくても俺はすっげー恥ずかしいから……！

「それならボクとタイガくんのデス・ローリング・ラブの方が良いですよ。一撃と言わず、一瞬ですから」

白もそんな恥ずかしいことで対抗心剥き出しにしないで良いから。

「それなら私とタイガのメロリンラブリーアタックで木っ端微塵に出来るからあんたたちは下がってなさい」

先生…… やっぱあんたはガキか？

いや、俺をそんな風に思ってくれることはメツチャ嬉しいんだけどさ。

そう言う事は止そうぜ…… 俺が恥ずかしいから。

「そ、それなら私とサスケくんフラワーバニッシュ・サクラの花咲く乙女サスケver. で十分よ！」

「……うわぁ……」

デコちゃん、そんなくだらないことでこいつらに対抗しようとしたからこの場がまた白けたんだぞ？

言った後に顔真っ赤にして恥ずかしがるようなそんな無駄なことすんなよ。

サスケだって恥ずかしいんだろう、微妙に顔紅くなってるし。

ナルトはやっぱりさり気無くデコに振られたから落ち込んでるし。

カカシ先生は「またか……」みたいに苦笑しながら頭抱えてる。

そして先生・ハナビ・白の3人はやっぱりそんなおデコに憐れみを顯わにしている。

ツて言うかお前だけネーミングセンスが厨二なんだよ、デコちゃん。しかもサスケver. ってことは他の人のバージョンもあるんだな。

「な、なによ！みんなして！」

「ま、その話はそこら辺にしとけ。それでタイガ、お前はもうどうする気だ？」

サクラの必死の講義を真顔で一蹴にするんだな、カカシ先生でも。

「俺は放っておいても大丈夫だと思いますよ。橋の方には絶対に被害を出さないと思いますし、俺たちが里に帰った後に単身で乗り込んでくるほど馬鹿でもないでしょ。」

それにもし里に、俺の大切なものに手でも出した時……いや、出そうとした時は　俺が全力で消しますから　」

俺の大切なものに手を出すヤツはたとえ世界だろうが神だろうが容赦はしねえ。

それが俺の忍道だ。

「（くっ……なんて殺気！不思議とイヤな感じはしないが……目が笑ってねえぞ！うちはタイガ……兄とは大分違う成長をしたな……）」

「（こんなところ想いを顕わにする必要あるの？でもその大切なものの中に私も入ってるのよね。嬉しいこと言ってくれるじゃない）」

「（兄さまの想いがハナビの体を包みます！もっと……もっと抱擁感を味わいたいです……！）」

「（ふふふ……タイガくんの愛はやっぱり温かいですね。それに優しいですから、これを殺気だと思う方はまだまだタイガくんへの愛が足りませんね）」

「（修業の時とはまったく違う感じの殺気……！！イメージ的には『殺す』殺気じゃなく『守る』殺気ってところか……！？）」

「（シシシッ！やっぱさ！タイガってば優しいヤツだ！他人の為にここまで出来るんだから俺も見習わねえと！）」

「（こいつ……なんなの！？ホントわけわかんない！）」

あゝ、やべ。ついついカカシ先生の質問の返答にマジになっちゃまった……。

そのお陰でアニコ先生とハナビと白は悦楽を憶えてるみたいだし、カカシ先生とサスケは肌で何か感じてるみたいだ。

ナルトは……はは、俺に笑い掛けてくれてなんでか知らないけど褒めてくれてる様な気がする。ありがとな。

最期にデコは……やっぱわけがわからないっぽかった。焦ってるし。

「俺としてはこのまま滞留っていうのは避けてさっさと里に帰りたんですがどうですか？」

「うゝん、そうだな……」

いまここで最も権力のある人はカカシ先生だからカカシ先生に訊いてみたけど唸って考えあぐねてるみたいだし、2番目に訊くか。

「アニコ先生はどうします？」

それにアニコ先生なら俺と同意見の気がするし、この人が決めたなら色々な意味でカカシ先生も納得すると思う。

「私はタイガの意見に賛成ね。でも流石に今日帰るのは不味いから



……あと1日様子見して帰るって言うのはどうかしら？」

それなら俺も賛成だな。

そもそも先生が決めた事なら反発する気はないし、任務中の隊長の命令は絶対だしな。

「珍しいです……！！ハナビと先生の意見が合うなんて……ハナビは末期の病気ですか！？兄さま！」

そんな泣きそうな表情で取り乱すなって、ハナビ。

お前は別に病気なんかじゃないから。

それに他人と意見が合う事は自分の意見を持つてると同じくらい良いことだから気にするな。

それと先生とハナビは結構共通してるところ多いから。

「大丈夫ですよ、ハナビちゃん。今回はボクも先生の意見に賛成ですから。それにこの意見を挙げたのはタイガくんですから」

「あつ、そう言えばそうです！先生は兄さまの意見に便乗しただけです。なのでハナビと兄さまの意見が一致しただけ考えれば良い話です。」

ああ、やっぱりハナビと兄さまの心は繋がってるです……！！そのうち体も……キャンっ！！兄さまったら……えへへ……」

ハナビが恍惚としてトリップしたのは置いていて、白もフォローが上手いな。

たぶん子供とかいたら面倒見の良い優しい綺麗な母親で子供の自慢になるんだろうな。

そうなったら父親は……やっぱり俺……でいいのかな？

考えたら恥ずかしくなってきた……！！

でもハナビとかいの、アンコ先生とかいっぱいいるから1人を選ぶなんてことはしないだろ。

するならみんな平等に、同じくらい愛すよ。現在トリップしてなにやらへんなことも考えてるハナビも含めてな。

「それでカカシ先生はどうした方が良いと思いますか？」

「ハナビは無視か……。そうだな、俺もそれに賛成だ。今夜襲ってくる可能性もあるから今夜は交代で見張りをする。もちろん俺抜きでな。俺は明日くらいに回復するから」

ニツコリ笑ってそんなこと言われても……。カカシ先生じゃ殺意しか湧かねえよ？

そんな余裕あるならもう動けるんじゃないかって思うのは俺だけじゃない筈。

「それじゃあ見張りの順番を決めるぞ……。1人じゃ危険だから2人ずつだ」

サスケに決めさせるのは不安だが、まあ話の輪に入って来たんだから訊くくらいはしてやってもいいか。  
結構まともな意見を出しそうだし。

「先ずはナルトとサクラだ。夜でも早いうちなら襲ってくる可能性も低いし、それに同じ班で連携も取れる」

「うちはサスケもなかなかいい案出すです！」

ハナビの言う通り、確かにサスケにしてはまともな意見だよな。  
戦力としての偏りがあるけど大丈夫だろ、ナルトなら。

「むっふふ！サスケナイスッ！」

それにナルトもめっちゃ嬉しそうだし。

「ちよつと待つてよ！ナルトと2人なんて……絶対ダメよ！もし再不斬が私たちの時に襲ってきたらどうするの！？そこで確実に死ぬわよ！？それじゃあ見張りの意味がないじゃない！」

そりゃあデコちんの言うことも一理あるが、俺は親友が哀しむ顔なんてのはあまり見たくないんだ。  
だから今回はスルーで。

「それはそれでいいだろ。それで次は？」

「その次はそいつとそいつだ」

そいつとそいつ……指されたのはアンコ先生とハナビだな。  
サスケ、アンコ先生は先生なんだから敬語使って『そいつ』とか言うな。

それとお前の考えが大体読めて来たぞ？

「うちはサスケは馬鹿ですか！？か弱い乙女のハナビは強い兄さまと一緒にないとダメです！」

「それなら私だって担当上忍としてタイガを守る必要があるわ！」

いやさ、2人とも真剣に俺のことを想ってサスケに講義してるのは嬉しいんだけど節度つてものがあるだろ？

それに他人の家なんだからもうちょい静かに、な？

「あゝ、ちょいストップ。バカ兄貴、お前は白と一緒に見張りする気だろ？」

めんどくせえけど話の話題でも変えて静かにさせるか……。

「そ、そうなのサスケくん!？」

いや、この話題になったら騒ぎだすヤツが1人居たんだっただな。そのことすっかり忘れてた。

「そ、そんなんじゃねえよ……!!」

そんなに顔紅くしてお前がツンデレしても悶えるのはデコちんだだけだぞ？

まあそのデコちゃんも恋敵相手に対しての行為だから悶えてる場合じゃないだろうな。

「それじゃあ俺が決める。全員文句はないよな？」

「タイガくんが決める事にボクは意見しませんよ。タイガくんは絶対ですから」

ここまで想われてるとある意味宗教みたいなもんだよな。

まあそんなくたらないものを開くつもりはないし興味もないからいいけど。

「そうです！兄さまが決めた事ならハナビも何も言いません！」

ハナビはそう言うけどサスケがデコちゃんと一緒にしたら絶対に反発

するな。

「タイガが決めるなら仕方ないわね……」

ははは、すいません、先生。

ホントは先生が決めるべきなんですけど、それじゃあどんな班になるから目に見えてますから。

「俺はあのままでよかったけどタイガが決めるなら文句はないってばよ」

ナルトもありがとな、俺の勝手な行動に賛成してくれて。やっぱ持つべき者は友だよな。

「うん！さっきの班より頼りになる人と一緒なら文句はないわ！」

「そんなに俺とがイヤなの！？」

「イヤって言うわけじゃないけど私とナルトじゃ再不斬が来た時にどうしようもないでしょ？だから一番弱い私とあんたは違う方が良いの」

「そんなもんか……」

デコちゃんもナルトのことをナルトとして見始めたみたいだな。それだけでもデコちゃんからすれば十二分な成長か。

ナルトも案外すんなりと引き下がったところをみるとデコちゃんが自分に向ける目が少し変わったって肌で感じたんだろうな。

それでもナルトはわかってないだろうけど。

まあ納得したんだからナルトには悪いけどデコちゃんはナルトと違う

ヤツと一緒になってもらっわ。

「ふんッ、勝手にしろ……」

ありやりや……サスケのヤツ俺に考えが読まれて、しかもそれを白に訊かれたから相当落ち込んでるな……。

サスケもかわいところがあるんだから、まったくもー

これからずっとそんな純情でオカマに手を出さなかったら1日くらいなら白と2人きりにしてやってもいいのに。

まあそこは本人の意思を尊重して白が拒めば2人きりにはなれないけど。

「よし、それじゃあ最初はバカ兄貴とデコちんだ。2組目はアンコ先生とナルト、3組目は白とハナビ。それで最後は俺。時間割振り最初は10時まで、次が12時、その次が2時、それからあとは俺だけでやるから」

「よっし！タイガナイス！」

別に俺はデコちんのためにこうしたわけじゃないから。

俺はお前が喜ぶ顔なんて見ても何の感情も湧いて来ないからな。

「ふんッ！」

そんな不満そうに鼻鳴らしても変わることはないからな、サスケ。

「まあタイガが決めたならいいわ……。よろしくね、ナルト」

「サクラちゃんと離れ離れ……うっ……あっ、よろしくな……」

ナルトのヤツ相当ショック受けてるな。

たぶんあいつのことだから『タイガなら組み直しても俺とサクラちゃんを同じにしてくれる!』とか思ってたんだろ。

「兄さまが決めたなら仕方ないです。それに白さんとなら文句はありません」

「そうですね。ですが……タイガくんは1人でこなす気ですか?もし1人でやるつもりならボクと一緒にやっても構いませんか?」

「それならハナビも一緒にやるです!」

白とハナビの気持ちは嬉しいけどさ、それは出来ないって。

アニコ先生はそれをわかってるから何も言って来ないんだろ。

「ダメだって。それじゃ交代で見張りをする意味がないだろ?休める時にしっかり休んでどんな時でも万全な状態で挑めるように体調を管理する。それも忍の基本だ」

「それなら……仕方ないです」

「そうですね……。タイガくんの言う通りです……」

2人ともごめんな? ホントは俺だって1人より3人でやる方が楽しいと思うし、そうしておけばお前らの哀しい表情を見ることもなかったと思う。

でもアニコ先生も含めて、俺は誰か1人を選ぶなんてことはしたくないんだ。

やっぱりみんな平等に愛して、みんながずっと笑顔で居られる大奥を創りたいから。

「よし、それじゃあデコちゃんとバカ兄貴は見張りに行って、残りは休みを取るぞ」



## 第十六話（前書き）

お久しぶりです！

今回はその日のテンションとノリで変な方向へ向かっていつていますが、申し訳ありません。

出来るだけ早く投稿しようと思った結果がこれで、合わない人にはとことん合わない回です。

楽しめる人は脳内でナレーションのCVを新井里美さんにすれば一層楽しめるんじゃないかな、と思います。

## 第十六話

「サスケくん……」

あつらー、サクラさん。

今日はいつにもなく御淑やかにアプローチをなさるようで、いつもとは違って蛞蝓が這いずるようにサスケさんに擦り寄るじゃありませんか。

蛞蝓と言つ単語がここまで似合うほどにサクラさんは又メツとしてトロインですかね。

「（なんで俺がこいつと……！！チツ……まあいい。いつもよりはウザくない）」

それにサスケさんへの効果も覷面みたいで良かったじゃないですか。

と、申し遅れました。私はタイガさんのいないとき、違う誰かの視点ではない時に語り役になるために作られたモノですわ。

まあぶっちゃけた話某嘔吐きのツンデレオオカミさんが主人公のナレーションのパクリだったりしますけど。

さてさて、話を戻しますけど、この2人はアカデミーの頃よりも距離が近くなつた様ですよ。

これも暗くて危険になるかもしれないという状況に2人きりであるための吊り橋効果みたいなもんなんですかね！。

「暑い……離れろ」

「ああん！サスケくん！私は……さ・む・い・なあ……」

サクラさんったら、よくまあこの状況で色仕掛けをしようと思えますわね。

女の子座りで唇に指を当てても色っぽくない色仕掛けなんて……まー、可哀相なことつ。

「だつたら家に入つてろ。そんな恰好じゃ風邪引くぞ

（邪魔だ。こんな五月蠅いヤツが一緒だと見張りに集中できん。それどころかいざとなった時にただの足手纏いにしかないこいつが一緒だと俺が本気で殺れねえ）」

「サスケくん……そんなに私のこと……！！

（しゃゝんなろゝ！！それでもうサスケくんの心はゲット！私のもの！あいつには……白には絶対に負けないという思いが実ったのね！神様も捨てたもんじゃないわ！）」

あれまゝ……見事に心意が食い違っちゃってますねー。

サスケさんは心の中で冷め切つていと言つのに、サクラさんは内なるサクラが表にまで出てくる勢いで熱くなって……これが夫婦間の温度差つてヤツなんでしょうね。

取り敢えずサクラさんにご愁傷さまとだけ。

「でも大丈夫よ、私なら。サスケくんと一緒にいるだけで体が熱くなつちやう……。でもそれじゃあ足りない。もっと……近くで……（いけるわ！このままキス　いや、もっと大人なことも夢じゃないわ！）」

あつらー、やっぱり無知つていいですわね。

きっとサクラさんは現実を見ない主義の方ですわ。

私ですらお姉様とは間接的なベ－ゼに漕ぎ付けるまでに多大な時間と体力を浪費しなければならいと言つのに。

おっと、いけませんわ。私の1つの人格、学園　市でジャッジン  
トをしている方が出てきてしまいました。

「ふんッ！」

（あのくそつたれでうすらトンカチな弟……いつかあいつも倒して  
やる……！）」

タイガさんも罪な人ですねー。

こんな面倒でしか無い様なフラグすらも立ててしまうなんて……あ  
はっ！その序でに私とお姉様のフラグも　　ぶはっ！黒子は……  
お……ね……。

さてさて、あの2人はこともなく見張りを終えた様で、今見張りを  
しているのはアンコさんとナルトさん。

なんとも珍しい組み合わせですが……果たしてどうなることでしょ  
うか？

「ねえ、ナルト。あんたから見てタイガってどう思う？」

おっ？これはこれは、アンコさん。珍しくしおらしいですね。

夜中で月明かりに照らされているのも相まって、より一層美しさを  
際立たせてますよ。

これが大人の魅力っていうモノですかねー。

「急にそんなこと言われてもなー……アンコ先生はどう思ってるん  
だ？」

ま、切り返すとすればそうなりますよね。

ナルトさんもアニコ先生の気持ちに気付いてないわけですし。

「私？私は……そうね。白やハナビとかと同じ……かな？」

（って私は何を言ってるのよ！生徒と教師よ！？そんな禁断の恋みたいなの……ふふっ、それもいいわね……じゅるり）」

あれまー、アニコさん。

ナルトさんには訊こえてませんが心の声が駄々漏れですことよ？

気持ちわるく舌舐めずりなんてされて……これをタイガさんが見たらどう思うことでしょう？

「てことはさ！それってさ！タイガのことが好き　ぐむむ……

！！」

「大声でそんなこと言うな！もう少し声を抑えなさいよ！恥ずかしいでしょうが！」

あらあら、そんなに取り乱してしまえば鈍感なナルトさんでも気付いてしまいますよ？

それとナルトさん。アニコさんだって一応女性なんですから、そういったことは弁えるべきですことよ。

「はっはーん！やっぱさ！やっぱさ！先生ってそうだったんだ！」

「だから五月蠅い！張っ倒すわよ！？」

「むふふ！俺ってば良いこと聞いちゃった！」

顔を紅くして怒鳴るアンコさんに、それを無視して騒ぎたてるナルトさん。

この方は……本当に女性の扱い方がわかっていませんことね。タイガさんに教養を受けることをお勧めしますわ。

「いまからタイガに          「やめなさい！」          あいでッ！」

アンコさんもついに強行手段に出て殴って気絶させましたか。私もそれが妥当だと思いますわ。

何事にも節度がある。度が過ぎた事をするとお仕置きが待っていると言う事を教えるにはいい機会でしたからね。

それにしても大丈夫でしょうか、ナルトさんは。頭にたんこぶ作って煙を出してますけど。

「……やり過ぎたわね。でも悪いのは絶対にナルトよ。これは正当防衛みたいなものだからね!？」

アンコさんの脳はとうとう逝かれてしまったようです。

誰もいない場所に向かって言い訳をするなんて……なんて可哀相なお方！

「ふわあ〜……むにやむにや……。兄さま……ハナビは……むにやむにや……」

「ふふふ、かわいいですね。たまにはこういうのも良いかもしれません。それに将来タイガくんの子供が出来た時の為にもなりますし」

流石に未だ10歳の子供に深夜まで起きていると言うのが無理があったんでしょね。

ハナビさんは白さんのお膝の上で気持ち良さそうに寝てますし、これでは見張りは実質白さんの1人だけですな。

ハナビさんも外に出て来てからまた直ぐに寝付いてしまったので、白さんもタイガさんを呼ぼうと思えば呼べるでしょう。

彼なら白さんが1人で見張りをしなければならぬと知れば宇宙の果てから一瞬で来なされる勢いですから。

いやー、羨ましいですこと。

それにタイガさんと白さんの子供なんて……うっは！興奮してきましたわ！

「やっぱり産まれてくるならハナビちゃんのような素直な子が良いですね。それでタイガくんのように優しくてカッコ良くて強くて、それで恥ずかしがり屋さんな所まで似て欲しいですね。ボクに似て欲しいところは……好きな人への揺るがない愛を持続けられる心でしょうか？」

ふふっ、自分で言うておきながら恥ずかしいですね。でもボクのタイガくんへの愛は未来永劫一片たりとも変わらないので」

本人のいないところでべた褒めですねー。

白さんにとってはタイガさんの恥ずかしがり屋という点もチャームポイントみたいなものなのでしょうし。

それにこんな完璧美人な方に想い続けられるタイガさん。羨ましいことこの上ないですね。

まあ完璧と称しましたが胸の方は残念ですけどね。

胸に無駄な贅肉がある人……アンコさんやこれから出てくる強敵にどのように対抗するかも見物ですね。

……タイガさんは小さな方も大きな方も同じくらい愛せると言う事

を知っている白さんの場合何もしない可能性もありますが。

「さて、そろそろ交代の時間ですね。タイガくんを呼んで来ませんか」と

白さんは細身な見た目とは裏腹にハナビさん1人を顔色一つ変えずに、踏ん張る様子もなくお姫様だっこに出来るほど力持ちでしたとさ。

「ふわ〜あ。眠っ……」

白に起こされて見張りに出たものの……やっぱり眠いな。

今はどっちかって言うのと2時って言う時間的に眠いのより、その時間帯であることに対して恐怖の方が大きいよな。

だって外は真っ暗。何も見えないんだぜ？

何も見えなくてもチャクラや気配で誰かが近付いてきたりするのはわかるけどさ、流石にこの時間帯は怖いって。

幽霊とか出てきそうだし……。

信じてないけどな！信じてないよ！？もう一度言っ！信じてないよ！？

はあ、もういつそのこと再不斬とか襲ってこねエかな……。そっちの方が精神的にだいぶ楽だ。

「……だ〜るまささんが　　じゃない！修業でもしよつと……」

危な！なんで俺は幽霊が出てくるような単語を口に出した？



まあ風呂じゃないから大丈夫だろうけどさ……やっぱ何処でも恐い  
だろ。

幽霊が恐くないヤツはたぶん人間として何処かが欠けている筈だ。  
それか無理矢理その心を抑え込んで、強がってるかのどっちか。  
そんなに強がるなよ。お前はありのままのお前で良いんだ……と、  
俺はそんな人に逢ったら伝えたい。

「いや、だからそうじゃねエって……さっさと修業しろや……」

明け方4時。

春は曙。ようよう白くなりける山際、少し明かりて、紫だちたる雲  
の細きたなびきたる。

なぐんで、平安中期の才女はよく詠ったものだ。

さつきまで暗かった俺の心までもほのぼのと明るみが差し始める。  
詰まるところ、俺から太陽様が恐怖心を拭ってくれたのだ。

未だ小鳥の囀りも訊こえないくらい早い朝だが、それが良いもん  
だ。

つと……詩人になったつもりで俺に、誰かストップを掛けてくれる  
人がいないと俺はいつまでも黄昏てしまう気がする。

「うん……！でもやっぱ朝ってのは良いですよ、ツナミさん」

「あら、見つかったの……。ふふふ、そうね。私も朝が一番好き  
よ。1日の始まりだからね」

うん。優しいツナミさんとは気が合いそうだ。

いや、優しくないツナミさんだったら気が合わないとか、俺が優しいとか自負してるわけでも無いぞ？

優しい人と気が合わない方が俺からしたら少し異常だと感じる様なものだ。

因みにツナミさんはさっき背後から迫って来て、今は隣に座っている。

俺にばれてないと思っていたのか、見つかった時に舌を出して片目を瞑ったのは幼くてかわいいと思った……子持ちなのに。

「そうですね。それよりツナミさんはこんな朝早くからなにを？もしかしていつもこんなに早いんですか？」

「ううん。いつもはもっと遅いわ。今日はあなたとゆっくりお話をしたいと思ってね。」

この人って20代？いや、30代の可能性もあるよな……。

それなのにこのかわいさはなんだ？それとも俺の感覚がおかしいのか？

楽しそうに微笑むだけでこんなに若返るんだもん。人間って不思議だ……。まあこの人はもともと実年齢よりかなり若く見えるが。

「それだけのために早起きするなんて……へへっ、嬉しいな。こんなに美人な人が俺のためについて思うと男冥利に尽きるな」

「あら、お世辞が上手いのね。でも私も嬉しいわ。君みたいな子から美人って言われてもらえて」

「いえいえ、そんな　　って俺今喋ってました!？」

「無意識の内だったの？ふふ……」

笑ってる！すっげー楽しそうに笑ってるよ！

それってマジで俺はあんな恥ずかしいことを口に出したってことだよな！？

心の中で悦に浸ろうとしただけなのに……最悪だ……。

「そんなに気にすることないじゃない。若い子から美人だって言われるのはお世辞でも嬉しいんだから、おばさんからしたら」

ああ、この人が綺麗だっと思う理由がやっとわかった。

無駄に着飾らない。今まで過ごしてきた歳月を隠す様な化粧をしない。ただ、重ねた年月の分だけ美しく見える様な化粧をしているからこそ、綺麗なんだ。

それじゃあかわいいと思うのは説明がつかないんだけど……そこに關してはあんま気にしないでおう。

「全然おばさんじゃないですよ。未だ若いじゃないですか」

「そう？」

子供が1人居るくらいが逆によかったりする人もいるだろうし。

「俺なんて全然ストライクゾーンだし」

ってまたか！？今のは自分でもわかったぞ！？

やべエ……顔とか体が火照って来た……。

「ふふふ、ありがとう。確かうちはタイガくんだったわよね？それってうちはサスケくんとか兄弟って言うこと？」

そんなのお構いなしみたいな顔で話を進めてくれるのは俺の熱を下げるための優しさなんだろうけど、今はそれが滅茶苦茶痛い……。  
っていうかそんなことされても熱が下がらない俺がいるからもつと痛いんだよな。

「ええ、まあ。似てませんけど双子の。俺はどっちかって言ってもう1人の兄に似てるので」

イタチの情報とか一族虐殺だとかは隠れ里の無い国にまで来てないだろうから言っても大丈夫だろ。

「その綺麗な髪と目も？」

綺麗な髪と目？

ああ、銀髪に銀目のことか。

この所為で黒が伝統的なうちは一族の上層部には忌み嫌われたりもしたな。

その時はやっぱりイタチが擁護してくれたっけ。

あとは一族虐殺の後は日向家が良くしてくれたりもしたな。

「いえ、これは違います。うちには基本黒なんで」

イヤな事はいっぱいあったけど、それでもこの色を嫌いになることはなかったな。

なんでかって？そんなの決まってるだろ？白もいのも、ナルトも含め、みんなが好きでいてくれたから。

そうじゃなかったら今頃カラコンして、髪だって染めてるっての。

「そうなんだ。そのもう1人のお兄さんとは仲良くしてるの？サスケくんの方とは少し怪訝な感じだったけど……」

表情曇らせて……やっぱ心配掛けてたよな。

俺たちのことをあまり知らない人の前ではもっと普通にすべきか。せめて誰にも迷惑が掛からない程度に。

「……はい！」

「そう、良かった サスケくんの方とも仲良くしてあげてね？彼も悪気があるんじゃないと思うから」

俺もツナミさんが嬉しそうに笑ってくれてよかった。  
じゃないとかなり気まずかったからな。

「それとサクラちゃん。彼女とも喧嘩しないで仲良くするのよ？」

「いや、あいつは……」

「めっ、だよ？」

人差し指立てて片目瞑るとか……俺、ここの養子になっても良いかな？

この人は絶対に俺の理想の母親像だ。間違いない。

イナリのヤツ……羨まし過ぎる！

「わかりましたよ……」

母親（勝手にそう呼ばせてもらっ）には勝てないのが世の常か。

それにこの人の前にもう一回デコちんと来るなんてことは有り得ないだろうからな。

約束してもなんら問題ないだろ。

「タイガくんはいい子ね、訊きわけが良くて。イナリも見習ってほしいわ……」

ダメだな、イナリは。

こんな優しい母親に迷惑掛けてるようじゃお前は一生半人前だ。

「大丈夫だと思いますよ、イナリくんも。ナルトに対抗心燃やしてるから」

それでもあいつの手本はナルトになるだろうから、大丈夫だ。

見習うべきはナルトの『心の強さ』や『信念の固さ』とかだな。

悪戯が好きなのとか、他人にあまり頼ろうとしないところは見習わなくてもいい。

「そうね。ナルトくんはイナリの良いお手本になってくれると思うわ。あんなに真っ直ぐな子は初めて見たもの」

……微笑みながらナルトを褒めるツナミさん。そしてナルトに対して嫉妬する俺がいるこの現状。

何故だ？

「でもタイガくんのことも見習ってほしいわ。ほら、優しいところとか」

そんな取ってつけた様な褒め言葉で心が躍る俺もいる。

なんて単純でわかり易い性格してんだよ、俺は……。

## 第十六話（後書き）

これからも頑張りますのでよろしくお願いします！

## 第十七話

「結局再不斬は来なかったな……」

カカシ先生の言う通り、あの後も結局あいつは来なかった。

「でもそのお陰でピリピリしたままであまり寝れなかったもんな……」

そう言うなって、ナルト。

見張りは徒労に終わることが一番良いんだ。

そりゃあ眠いのはわかるけどさ、帰る途中にだって気は抜くもんじやねエぞ。

「ホント無駄だったわ……」。

（ふふっ！でもサスケくんとのおまあまのスイートタイムを味わえたんだもの！それはそれでいいわ！！しゃくんなるく！！）

愚痴こぼしながらニヤけられてもな、そんなこと考えてるって想像つくから。

っていうかデコちんの場合は内なるおデコが黒光りしてるから。

「（俺にビビって来なかったか……。フッ……。来たところで振り返り討ちにしていたがな）」

こっちにも馬鹿がいるしよ。

何をどや顔でこいつはほくそ笑んでやがるんだ？しかも極悪人の面



で。

お前にビビってたなら力カシが寝たきりになるくらいまでやらせないで助けてやればよかっただろうが。  
そこら辺、弁えとけよ？

「ふにゃ〜……ふにゅ。兄さま〜……」

そんでハナビはやっぱ未だ子供だ。

見張りの所為で朝からずっとこの状態だし、起きる予兆も見せないしな。

仕方なく俺が背負って帰ってるわけだ。

「ふふっ、よっぽど疲れたんでしょうね。昨日の見張りの時も寝てましたし」

ふ〜ん。そうなのか〜……ってそれホントか？

それじゃあ白は昨日実質1人で見張りをやってたってことだよな。

なんて言うか……それなら俺でも呼んでくれれば良かったのに。起こされても迷惑なんて思わないからさ。

それでも俺のことを想って起こさないのが白なんだよな……。

「なんだかんだで昨日は私も大変だったわ」

そんな昨に疲れた様な表情しているとホントに皺が出来ますよ？もつと笑顔じゃないと。

まあ気持ちはわからないでもないけど。

一緒に見張りをしたのがあのナルトだからな。疲れもするだろう。

「あー！！そう言えば！タイガ！タイガ！アンコ先生ってばタイガのことが　　！！」

「ちよつとナルトお！！それ以上は……ね？」

「わ、わかつたつてばよ……」

うつわ……すっげー威圧感。

アンコ先生はあの黒い笑みの向こうでどんな表情を浮かべてんだ？  
それにナルト、お前の言いたい事はわかってるから、今更言わなく  
ても大丈夫だと思うぞ。

たぶんあれだろ？あの……アンコ先生の色恋沙汰だろ。

先生がキれるなんてそのくらいしかないだろうからな。

それで俺の名前が出て来たつてことは……先生にそういう趣味があ  
つたつてことか。

「へえ、その話、興味あるな。ナルト、詳しく聞かせてくれ」

あれ？カカシはあれか？アンコ先生のことが好きな人ですか？

俺と白とかハナビの関係には興味なかったのに、アンコ先生になる  
とこれだもんな。そう言う捉え方しても強ち間違いじゃないと思う。

「い、いや……ダメだつてばよ……」

……おい、ナルトのヤツ大丈夫か？

顔なんか青褪めてるし、アンコ先生はそんなに恐ろしかったのか？

「カカシも変なこと聞くな。あんたには絶対教えないから」

「あ、そう……」

落ち込むなつて、カカシ。

言葉一つで振られることなんてよくあることさ。  
その相手が容赦ない言葉という槍を投げてくるアンコ先生だから同情はするけど。

「……ッ!!」「……」

あゝ……来たか、このタイミングで。

気付いたのは俺とカカシとアンコ先生に白の4人。んで、第七班の3人はやっぱり気付いてないみたいで、ハナビも感じ取って入るのが少し唸ってる。

「タイガくん……」

そんなに心配そうな声を出すな、白。

お前も、ここにいるみんなは誰一人傷付けさせない。  
デコちゃんも、一応同じ里の仲間だからな。

「ああ。カカシ先生、アンコ先生……」

「ナルト、サクラ、サスケ、今から俺の言う言葉にリアクションを起こすなよ?」

俺が何もわかってない状況でそんなこと言われたら疑問に思っ  
て訊き返すけどな。

それでも第七班の3人はこういう緊迫したカカシの表情を一回見た  
ことがあるんだろう。

冷や汗を流しながら黙って息を飲むだけだ。

「俺たちはつけられてる。人数は1人。恐らく再不斬だけだ」

「ッ！？なんで今更！？」

空気読めって、デコちん。リアクション起こすなって言われてただらうが。

そんなこと追って来てる本人にしかわからねえんだか、カカシに訊き返すことじゃないだろ。

黙ってさっさと歩けよ。

「サクラさん。そんなに騒がないでください。カカシ先生も『リアクションを起こすな』と忠告した筈ですよ？迷惑ですから」

そんなにズバツと言ってやるな、白。

ホントのことだから、余計にあいつの心に深く突き刺さるぞ。しかも白の言葉は重いしな。

「（な、なによ！サスケくんが私に振り向き掛けてるからって焼き餅でも焼いてるの！？へっへ〜んだ！あんたなんかには負けないだから！）」

白に向けて舌を出した後にそっぽを向くデコちんを見て本気で殺意が湧いたのは俺だけではない筈。

隣の白も

「（殺してさしあげましょうか？）」

とか小声で呟きながら懷から千本を出しかけてるし。

っていうかあのデコはこんなにもウザかったっけ？俺の想像を簡単に凌駕してくれるな。それなんだよ。お前の心の声は何故か聞き取れてしまう気持ち悪さ。この所為でイライラがやまねエ。

だってこんだけ白のこと馬鹿にしてんだぞ？許せるわけねエだろ。

こいつ再不斬とポジションチェンジしてくれねエかな？

それだったら何の躊躇いもなく無限に幻術掛け続けてやるのに。

「せんせー、でもどうするんだ？この人数相手に襲ってくるほど馬鹿じゃないでしょ、向こうも」

「あんたあいつの実力わかってないからそんなこと言えるのよ！カカシ先生が寝たきりになるくらい強いのよ！？下忍の私たちが束になっても勝てるわけないじゃない！」

いやいや、それじゃあ何のために修業したんだってことになるから。お前はそうやって自分だけ安全なところに行って、誰かに守ってもらおうとする。そのくせ、直した方が良いぞ。

それに言っとくけどアンコ先生は戦闘に関してはエキスパートだ。俺らと　少なくともこの中で一番弱いお前と一緒にするな。

「ま、俺もまだ本調子じゃないから……お前らに頼むよ、アンコ」

「……カカシ、俺はやれる。いや、俺１人で十分だ。あいつから教えてもらった術があれば、あいつも　　！！」

まったく、そんな我が儘言うなよ。

お前のその自己満足にならデコが付き合ってくれる。だから今はやめろ。

それに未だお前に千鳥は早いんじゃないのか？教えたの俺だけだよ……。

「そうよ！先生！私だってやれるわ！」

デメエどっちだよ。

さつき下忍が束になつても敵うわけないって言つてたろが。あれか？サスケがやるなら私もやりますってあれか？

あのな……お前も忍なんだろ？確固とした自分の意志ぐらい持つてろ。

「へっ！俺もやれるつてばよ！先生たちは下がつて俺たちの修業の成果を見てくれ！」

ナルトまで乗つかるなよ……まあこいつの場合はデコとは違って自分の意志だし、サスケとも違ってチームワークを重視してやろうとしてるからいいけど。

「ん、それもそうだな」

「カカシ！そんなことさせていいわけないでしょ！」

アニコ先生が怒るのも無理ないよ。カカシは自分の生徒に死ねって言つてるようなものだし。

それだけこいつらの信用は厚いんだろうけど、それだけで何とかなるほど世の中上手く回らないもんだ。

実際こいつ等が束になつてもカカシに敵わない様に、再不斬にも敵わないわけだし。

「いいつすよ、俺もやります。アニコ先生はカカシ先生を、白はハナビを頼む」

しゃあないよな、こうなると。

俺の目の前で親友が甚振られるのを黙つてみていられるほど鬼じゃないし。

「よっしゃあ！タイガがいれば百人力だ！」

「なんであんたまで……！！」

「フンツ、足を引つ張るなよ……？」

ナルトとサスケへの受けは悪くないけど、やっぱりデコへの受けは悪いな。

受け入れられたくもないけど。

まあこいつがどんだけ俺を過小評価してようと足手纏いにはならんさ。

「アンコ先生もそれならいいですよね？」

「タイガがそう言うならいいわ。でも……無理はしないで」

「ははは、心配してくれるんすか？」

「当たり前じゃない！あんたがどれだけ強いかは知ってるけど心配なものには変わらないんだから……！！」

……あれ？俺の予定じゃこんなにシリアスになる筈じゃなかったんだがな……。

「大丈夫。先生は安心して見ていてください。白も心配しなくていいからな」

「ふふつ、ボクは平気ですよ。それよりもあまり大きな音を立ててハナビちゃんを起こさない様にしてくださいね？信じてますから」

笑いながら凄いこと言うな、白も。

喧嘩で音も立てないなんて俺には出来ないぞ？

相手は無音殺人術の天才だけど、それでもこっちにはアホばっかりから自然と騒がしくなる気がする。

「おう、ハナビのこと頼んだ。

よし、それじゃあサスケとナルトが前衛、俺が後方からの援護・感知、デコは中盤で感知だ」

「その呼び方がいい加減やめてよ！それに大きな口叩く癖に一番後ろに下がるのね」

……落ちつけ。落ちつけ、俺。これは訊こえていないと思いこめ。

「（やはりサクラさんは）」

「（白も落ちつけ）」

「（　　）　　わかりました」

うん、白も聞きわけがだいぶよくなったな。

TPOをよく理解している。

ハナビはデコの俺を侮辱する言葉に反応したのか、寝言でデコを挑発する様な事を言っているが、詳しくは言えない。

って言うか健全な10代のヤツが聞いていい様な台詞じゃなかった。

「……そういうことか」

……なにが？もしかして俺の作戦の意図を説明しなくてもわかってくれるようになったか？サスケは。



「何がだ？」

ナルト、そんなに困った顔しなくても大丈夫だ。  
今日のこいつがイヤに冴えてるだけだろうから。

「いいか？わかってない1人と1光に説明するからよく訊け。  
先ず俺が後ろな理由は何2つある。1つ目は後方で感知に集中するため。霧の中で確実に相手の位置を把握できるのは、言っちゃ悪いが俺だけだ。2つ目はお前らの連携をなるべく尊重するため。  
それでサスケとナルトが前衛の理由は単純に俺が動かし易いからだ。  
ある程度動けるヤツじゃないと前衛は出来ないしな。  
それでデコが真ん中の理由な。これは一番周りが見えるんじゃないかね？  
ツて感じた」

「ちょっと何よ！！そんな適当な理由で私が中盤！？それにデコって言うのはやめなさい！それとなに！？『1光』って何の単位よ！  
私は人間じゃないってわけ！？」

良くわかってるじゃないか。まったくもってその通りだが。  
でもお前を中盤にしたのはな、そんな理由じゃないんだ、ホントはただそこだったらどれだけヘマしてもカバーできるから。そこは実際要らないポジションだからだ。良かったね！

「あー、そんな意味だったのか。へへっ、任せとけ！俺とサスケのコンビネーションで直ぐに終わらせてやる！なっ！サスケ！」

「ふんっ、ウストラトンカチが……。やってやる、足を引っ張るなよ」

あれ？こいつら案外仲良くなってるじゃんか。

と、そんなこと話してるうちに霧が濃くなってきたな。  
これは本格的に来るか……。

「っしやー!! やってやる!! おい再不斬!! コソコソ隠れてねえ  
で出てこおい!!」

いや、それじゃあ霧を深くして俺らの視界を奪った意味がまるでないだろ。

俺が風遁系の術で霧を晴らしてもいいけど…… まあ大丈夫だろ、ナルトとサスケは。

「ククツ……子供<sup>ガキ</sup>をわざわざ殺させるか、カカシ」

「違うな。死ぬのはお前だ、再不斬。うちはサスケはうちは一族の血を引く生き残り且つ今年のナンバーワンルーキー。春野サクラはルーキー一番の切れ者。うずまきナルトは……意外性ナンバーワン忍者だ。俺の班員に、お前は勝てない。

それともう1人。うちはタイガは 兎に角強いらしい」

は？俺の紹介だけ手抜き過ぎだろ!?

っていうか『らしい』? アンコ先生に訊いてんじゃねえよ、確信持てよ。

それに戦う前に情報漏らしやがって……こいつは馬鹿か?

あと1つ突っ込ませてくれ。これだけは突っ込まないと気が済まない。

デコがルーキー一番の切れ者ってどういうことですかい? それは……受け狙いと解釈してOK?

「ククツ……楽しませてもらおう」

うっはー！すっげー殺気！でもそれって自分の場所を教えてるようなもんだぜ？

「あ、足が……」

その殺気のお陰で約1名デコがてかてかの人が使い物にならなくなっただけ。

これはこれである意味ラッキー。

「1人目」

やっぱ場数踏んでるヤツは違うよな。

戦場じゃ弱いものから狩るって言うセオリーは守るみたいだ。つまりこの状況で考えれば

ガキンッ！

「ッ！？　　ほっ、この霧で見えるのか……」

「違うね。言つとくが全然見えてない。でもお前の性格を考えればこいつを最初に狙うことくらいわかるさ」

この俺の後ろで怯えてるデコが狙われるなんてな。

それにしても……こいつを守りながら戦うのは不憫だ。

あまり動きまわれないから今みたいにクナイでの応戦が限度じゃね？

「そうか。だが」

「甘いつて」

後ろから水分身で襲わせる作戦なんかわかってるから、俺の影分身が消してくれたよ。

俺は人のチャクラを感じれるんだ。後残り2体居ることもわかってる。

「デメエ……何者だ？」

流石に水分身が簡単に消されれば疑問にも思うか。

いくら本体の10分の1だからといって簡単に下忍に消される強さじゃないからな。

「言つたろ？カカシ先生が。うちはタイガは兎に角強いってよ。

ナルト！サスケ！やっぱ作戦変更だ！俺が霧を晴らす！お前らは1人で水分身一体を相手にしろ！俺が本体をやる！」

だって再不斬の相手をしながらあの2人に指示出すなんてめんどくさいこと出来ないって今更気付いた。

ってというか水分身のことすっかり忘れてた。

「そう簡単にやらせると思うか？」

「やらせてもらうんじゃない。やるのさ」

そこで一旦再不斬を弾き、素早く印を結ぶ。

「チッ！！」

「風遁・大突破」

そして豪風で一帯の霧を晴らし、再不斬の姿が顕わになる。

これで普通に戦えるな。

あいつらの心配なんかなくても大丈夫だろうし、いい経験にもなるだろ。

「ククツ……だがこれで形勢が変わったと思うなよ？」

「思わねエよ、そんなこと。もともと俺の方が優勢だったのが、より優勢になったただけだからな」

確かにナルトとサスケの方は明らかに劣勢だったけど、俺の方はそうでもなかったし。

ただ後ろにデコちゃんがいるってことくらいか、マイナスなのは。

「抜かせ」

再不斬は額に青筋を浮かべ、瞬身の術で一気に迫って来る。

傍から見れば消えた様に見えるんだろうが、俺から言わせればそれでもまだまだ余裕で捉えられる。

狙うのは……俺の後ろのデコか。

「ッらあ！ー！」

「甘えよ」

あーあ、折角タイミング合わせて本気で殴ろうとしたのにしゃがんで避けやがって。

俺は喧嘩は苦手だから合わせるのには上手くないのにな。

「死ねッ！」

再不斬はそのまま俺の横をすり抜け、後ろのデコを斬ろうと背中  
の首切り包丁に手を掛ける。

そしてそこからそのまま手に取ったそれを横薙ぎに振るう。

「キヤアア！！」

そして未だに恐怖に震えるデコは動くことも出来ずに、ただ悲鳴を  
上げて目を瞑るばかり。

キンツ！！

でもそれがデコに当たることはない。

なんでかって？そんなの決まってるだろ？

俺は喧嘩してるんじゃないやねエ。やってるのは命を掛けた戦闘なんだ  
よ。

「デメエには誰一人俺の仲間が傷つけさせねエ……」

クナイで受け止めた再不斬の首切り包丁を上弾き、ガラ空きにな  
った腹に蹴りを入れて、もう一度距離を取る。

「ぐふっ！デメエ……」

ジンの量産型の様な呻き声を上げた再不斬は無視して、やっぱり  
後ろで小さくなっているデコに目を向ける。

「……な、なによ……！！」

なんで俺がお前に睨まれないといけないんだよ。  
そんなに冷ややかな目で見た憶えはないぞ。

「さつさとカカシのところに戻ってろ。死ぬぞ」

「……あんたが私の心配？」

さつき俺は『仲間は傷付けさせねえ』って言わなかったか？

「悪いかな？」

「あ、あんたなんか心配されなくても平気よ……！！」

（な、なによ！急に！いつもならもつと冷たいのに……もう！意味わかんない！）

意味わかんなくて結構だつて。

それと少しは他人の気持ちを考えろ。

テメエにはテメエに傷付いて欲しくないヤツがいるだろうが。

俺はそういう人を哀しませないために、いくら嫌いなヤツでも守る  
って決めてんだ。

知人・里内の人間に限るが。

「さあて、始めようか」

デコも心の中で愚痴りながらカカシ達のところに行つたし、もう自由  
にやれるな。

そう思いながら再不斬の方に向き返る。

「来いよ、ド三流。格の違いってヤツを見せてやる」

## 第十八話（前書き）

今回は第7班回です。

サスケの事をホモと思いながら読んでみると、最後の台詞がより一層気持ち悪くなじます。



## 第十八話

「へへっ……前の俺と一緒にするなよ!!」

ナルトは目の前にいる再不斬の水分身に向かって咆える。

前の俺とは以前再不斬と交戦した時のナルトだろう。

口振りからして以前は水分身1人にも勝てなかったということだが、  
どうやら今回は違うらしい。

「ふんっ、やってみる」

しかし再不斬も原作通りの強さではない。

原作ではやらなかった水分身との共闘が出来るくらいには強くなっている。

「それじゃあ行くつてばよ!!」

### 影分身の術

ナルトが印を結ぶとボンツという音と煙と共に、影分身が5体出てくる。

そしてその1体1体が一斉にホルダーからクナイを取り出し、水分身目掛けて投擲する。

「ぬんっ!!」

しかし六つのクナイは水分身の持つ首切り包丁の一振りですべて叩き

落とされ、ナルトの攻撃は無と化す。

「まだまだあ！」

それでもナルトはめげない。

今度は本体を含めて6体が水分身を六方から囲み、手裏剣を投げてみた。

「……………」

しかしやっぱり水分身によって5つは叩き落とされて、1つは外れて地面へ突き刺さってしまう。それもまた一雑ぎで、でも遠距離攻撃は正解だ。

水分身の体は言わずもがな再不斬のチャクラで形成されている。

一旦切り離されたからには、チャクラの供給は不可。

仙人モードで自然エネルギーを取り入れない限り、水分身は分けられたチャクラで戦う事しか出来なため、術の多用が出来ないのだ。

「くっそーっ！なんで全部弾くんだよ！こうなったらー！」

ナルトはそれに気付いての戦法だったのかと思いきや、それはただの深読みに過ぎなかった。

自分の攻撃が通らない事への苛立ちを顕わに水分身へ突進するナルトと影分身。

「血迷ったか……！！！」

水分身からしたらラッキーで、ニヤリと悪い笑みを浮かべるのも仕方ない。

何せインファイトを好むため普段は自分から距離を詰めないといけ

ないのに、今回は相手が勝手に距離を詰めてくれるんだ。それを好機と言わず何と呼ぼうか。

「っらあ！！」

水分身の後ろから跳躍し、拳をグーにして殴ろうとするナルト。でも水分身は位置も確認せずに左の裏拳でナルトを叩く。

ボンッ！

でもそのナルトはただの囷の影分身だ。

その隙を狙って再び死角になったアングルから水分身を殴ろうとするナルト。

今度は声を張り上げずに、無言のまま歯を食いしばって、アッパーカットで。

「ぬう！！！」

ボンッ！

水分身は裏拳の回転の勢いを利用して左足でナルトに向かって回し蹴りを放つも、それもハズレ。

それを狙われることくらい水分身も承知の上だったが、ナルトもそれくらい承知していた。

わざと隙を見せ、そこを狙わせ、逆に叩く。それがセクシーコマンドの極意だ。

「隙ありい！」

今消された影分身の後ろからナルトが飛び出し、無防備な水分身へ

と突っ込む。

そして右手でグーを作り、水分身の横腹を目掛けて右ストレートを放つ。

ニヤっ

その瞬間に水分身の顔が不敵に歪む。

ボンッ！

その直後にナルトの脳天から首切り包丁が叩き落とされ、またもや影分身は消える。

「くッ！こうなったら！」

このまま相手の隙を狙っても全て躲されると感じたナルトは、残り2体の影分身と共に再不斬との距離を一気に詰める。

1人は前方から下に潜ってアッパーカットに、1人は跳躍して頭上からの踵落とし、もう1人は背後から背中に向けてブロー、三者三様に攻め立てる。

「甘いつー!!」

それでもやはり水分身の方が力量的に上。

3人のナルトは運が悪いのか、一列に重なるように水分身へと向かったため、半円を描く首切り包丁で一薙ぎにされた。

その内の頭上にいたナルトは斬られる寸前に何かを引く様な動作を起こすが、水分身はそれに気付くこともなく切り裂いた。

ポポボンッ!!

「ッ!？」

違和感、なんて話ではない。

ナルトは本体を含めて6人しかいなかった。

それなのに水分身には『殺った』という感覚を味わわせるモノが一体もいなかったのだから、訝しんで当然だ。

「掛かったな!これぞうずまき流奥義!手裏剣変化の術だ!」

ボンと言う音と煙と共に水分身へと勢いよく向かう手裏剣がナルトの姿へと変わる。

頭上から踵落としを狙った影分身が引いたのは変化したナルトの一部の見えない糸。

手裏剣のもとの重さが軽いのが相まって、ナルトは普段では考えられないスピード、そう、言うなれば九尾化した時くらいのスピードで水分身へ飛ぶ。

「っらあ!」

そして渾身の右ストレートが水分身の右頬へと突き刺さり、水分身は力なく水になって崩れ落ちた。

「つと!うわっ!ぐへっ!」

今のナルトでは流石にあのスピードは制御できなかったか、水分身を消した後も勢いよく飛んで地面に顔面を擦りつけた。

「いってて……。へっ……。へへっ……。っしゃああああ!」

顔を泥まみれにしたまま、笑顔のナルトは天に拳を突き上げた。  
今回は前回とは違い、ナルトの戦略的な勝利といったところか。

「 来い」

「その眼……カカシと同じ……写輪眼か」

「あいつと一緒にするな。俺の眼はあいつとは違う、本当の写輪眼だ」

「ククッ……せいぜい楽しませてもらおうか」

色々と突っ込みたいところがあつたりするが、取り敢えず状況確認。サスケが一つ巴の写輪眼を発動させて右手でクイクイと水分身を挑発し、水分身はそれに応えずに不敵に笑った。

本当の写輪眼と言うのは……恐らくうちは一族で、自分で開眼させたものだという解釈で間違いない筈。

「笑っていられるのもここまでだ！」

水分身が笑ったのは今の一瞬だけだったということは気にせず、サスケは小手調べと言わんばかりにホルダーから取り出したクナイを投げる。

水分身はそれを弾く必要もないと言わんばかりに頭だけをずらして避け、グッと足に力を入れてサスケへと駆ける。

「この程度か」

「ケツ！上等だ！」

水分身の軽い挑発程度に乗るのは、それだけ自信があるということか、それとも無知ゆえか。

ともかくサスケは向かってくる水分身を睨み、自身の眼に大量にチヤクラを送り込む。

「（……見える！）」

「なにイ！？」

水分身の右手から放たれるパンチをしゃがんで避けるサスケ。

そしてそのままの状態から右足を水分身の足を刈る様に薙ぐ。

それを避けるために水分身は軽く飛ぶが、それは明らかな選択ミス。空中では移動が不可能なため、水分身はサスケの格好の的となった。

「これで終わりだ！」

さっきの蹴りの勢いを利用して左足で水分身の左わき腹に回し蹴りを叩きこまんとするサスケ。

「ぐっ……チイ！」

しかしそれを易々と喰らうほど水分身も甘くない。

左の脇をしっかりとしめ、その蹴りを防ぐが、蹴りの勢いで多少の距離が出来る。

「まだまだあ！」

それでもサスケは相手に休む暇を一切与えない。

一瞬で水分身のところまで移動して、渾身の右ストレートを顔面に叩きこむ。

シュツ……！！

「なっ！？」

「ぐほあ！！」

しかしサスケの攻撃は水分身が首を捻る事によっていなされ、更には反撃として腹部に郷愁の蹴りを味わう破目になった。

そのまま後方へと吹っ飛ばされ、腹部を抑えながら唸るサスケ。

「今のは……くそっ！そういう避け方もあるのか……。だがもう効かない。この眼で見られた術・攻撃・防御は全て見切られる。貴様が何をしようと俺には無意味だ」

常に新しい動きを取り入れていけばその眼も無意味だが、その眼を過信しているサスケが気付く筈もない。

それにサスケの場合は未だ完璧ではない為、粗が目立つ。それに身体能力が低ければ動きに追いつけないし。

「抜かせ。お前じゃ俺には勝てねえよ」

「フンッ！やれるものならやってみろ」

ダメージが回復しきっていないのにうすら笑いを浮かべて挑発するのはサスケのプライドのせいだろう。

「生意気な口を叩く餓鬼だ」



そして挑発されたからには乗らないわけにはいかないのも血氣盛んな水分身の性格の故だろう。

そんな水分身は二言は発せず、怒氣迫った表情で未だに腹を押さえているサスケのもとへ移動。

「くッ!!」

そこから溜めた右で有無を言わず左頬にストレートを放つ。  
でもそれは間違い。

一瞬ニヤけたサスケは先程の水分身と同様に首を捻ってそれをいなし。

「（チッ！コピーか！厄介な眼だ……）」

「フンッ！」

水分身は表情を変えずに内心でボヤキながらサスケの右足による回し蹴りを後ろに下がって躲す。

流石の再不斬でも実力の十分の一で写輪眼相手はきついのか。  
もつとも、写輪眼相手なら苦戦することは始める前からわかってはいたが、多少の危機感が欠けていたみたいだ。

「考え事か。舐め腐りやがって!!」

## 火遁・豪火球の術

ここで一気に決着をつけることを決めたサスケは、今使える千鳥以外の最強の術で挑む。

チャクラコントロールを学んだおかげもあってか、術の威力も格段

に上がり、チャクラ消費も少なくなっていることがわかる。  
これが今の俺の実力か、と。

「これは不味いな……!!」

### 水遁・水龍弾の術

一方の水分身もそれを喰らえばただでは済まない　　と言つよりは喰らえばお仕舞いなことは一目瞭然。

これで自分がダメージを喰らうことが皆目見当もつかないなんて、ただの馬鹿だ。

水分身も馬鹿ではない為の、少ないチャクラでの術の発動。

ジュワツ……

大火球と水龍のぶつかり合い。

火と水だ。相性的には圧倒的に水分身の方が上。

それに加えて術の威力も水分身の方が格段に上だ。

チャクラ量の差を差し引いても、水分身の方が圧倒的に勝っている。そのため豪火球は水龍弾の威力を少々弱めただけで、あっさりと打ち消されてしまった。

「（不味い!!このままじゃ

!!）」

嘘……あのドベだったナルトがあれを倒すなんて……!!  
やっぱり成長してないのは私だけ?

再不斬の殺気に耐えられなくて、拳句にはタイガに守ってもらって……私、こんなのでいいのかな……。

「ほう……ナルトのヤツ……成長したな」

痛いよ、カカシ先生。

その言葉が、今の何も出来ない私にはとっても。

「そうね……。まさかあそこまで出来るとは思わなかったわ」

そんな……。あんたは嫌いだけど、それでもやっぱりナルトが誰に褒められても痛いよ……。

ただの足手纏いで五月蠅いヤツだったナルトが、あんなに……。

うっん、ナルトは最初から足手纏いなんかじゃなかった。

ただお父さんやお母さんがナルトを白い目で見てたから、その影響でナルトのことを嫌ってただけ。

それなのにナルトはいつも私に優しくしてくれて……。

最近はサスケくんとも仲が良かったナルトに嫉妬して……馬鹿だ、私。

自分の意志も持たずに、ただ人と同じに過ごして、流されるように生きて来て……。

こんなのじゃいつまでも変わらない。いつまでも今のままだ。

そんなのは絶対イヤよ！

「あっ！サスケくんは！？」

ナルトの方はに集中してて忘れてたってわけじゃないけど、卑屈になっ  
て見てなかった。  
だってナルトが……。

「サスケさんは押されてますね」

「そんなこと……ほら！今だってサスケくんが術を！」

そう、あれは確かサスケくんが一番得意とする火遁の術。

それを出せばサスケくんが絶対に勝つ筈なのに、白はそんなにサスケくんを否定したいの？

「でも向こうは水遁系の術を使うみたいですよ？」

「うそっ！？」

ホントだ！あれはカカシ先生と戦った時にも使ってたヤツだ！

そんな、相性が悪過ぎ……。

このままじゃサスケくんが……。

負けなと思うてるけど、もしかしたらってことがあるし。

でも私じゃ何も出来ない。

『テメエには誰一人俺の仲間が傷つけさせねエ』

なんで、なんでこんなときにあいつの言葉なんか思い出すのよ！！

でも……ありがと。お陰でなんかふっきれたわ。

私も……私も！好きな人が！同じ班の仲間が傷付くのを黙って見ることなんかできない！

「サスケくん！！」

あら……サクラさん、走ってサスケさんのところに行ってしまった。

止めた方が良かったでしょうか？

いくらサクラさんでもタイガくんは彼女が傷付くところなんて見たくないでしょうし、ボクもタイガくんがそう思うのならサクラさんは傷付けさせません。

ですが、今回の場合は別です。

彼女は傷付くためにサスケさんの元に向かったのではなく、守るために向かったんですから。

ボクに漸く彼女の踏みだした一步を止める権利はありませんから。これまで長かったですが……どんな一步になるのか期待していますよ？

表面的なものと言えどサスケさんを一途に想う気持ちはボクがタイガくんを想う気持ちと変わりはないんですから。

愛する人に対して一途なところだけは嫌いじゃありませんし。ですから……応援はさせて頂きますよ。

「サスケくん!!」

「おい、お前!!」

こいつ……馬鹿か!?

相手の術が俺に当たる前に間に割り込んで来るなんて馬鹿としか言いようがねエ!

死ぬつもりか!?

「死にてエのか！？そこをどけ！！」

「イヤよ！！いくらサスケくんの頼みでもそれだけは訊けない！」

なんでこいつはこんなに必死なんだよ。

「仲間が傷付くところなんて黙って見ていられない！私は……サスケくんのことが……」

ドンッ！

「おいっ！」

くっそ！女のくせになんて馬鹿力してやがる！

見えていたとはいえチャクラ不足で動きが鈍ってあいつに術の軌道から押されて逃がされるなんて……くそっ！

勝手な事ばっかしやがって！これだから女は嫌いだ！

「好きだから！！」

## 第十九話（前書き）

あれ？ナルト書くの忘れてる？と思って1時間程度で書きあげたものなので誤字があるかもしれません

## 第十九話

「来いよ、ド三流。格の違いってヤツを見せてやる」

「テメエ……上等だ。望み通り切り刻んでやるよ！」

そう言つて再不斬は首切り包丁を持つ右手に力を入れて、俺に向かつて一直線に走つて来る。

よく考えてみればあの大刀を片手で振りまわす筋力って言うのも相当なものだよな。

戦闘中はアドレナリンが出てたりするから普段使うのとはまた違ふんだろうけど……今はそんなことどうでもいいか。

「ぬんツー!!」

今はそれよりも再不斬が俺の腰辺りを狙つて右方向から横薙ぎにしてくる首切り包丁をしゃがんで躲して、右手に逆手に持っていたクナイで再不斬の右足を狙う。

首切り包丁を振り回す再不斬も再不斬だけど、クナイで挑もうつて言う俺も俺だよな。

あーあ、挑発しちまつたのは俺なんだけどさ、争わないでよかった方法って無かつたのかな。

その為にガトーのアジト燃やした　あの時は気分だったけど、結果的にはそれが一番良かったと思つてる　のにさ、これじゃ意味無いじゃん。

「チィ!!」



こんな近くであんたみたいな強面に舌打ちされたらそれだけで恐いからやめてくれて。

とか思っていると再不斬は左手も首切り包丁に添えて、鋸で削って来るかのように俺の左の横腹を目掛けて引いてきた。

ほぼ死角で動作でどんな動きをしているか読んではいたが、大体そんな感じだろう。

それなら、と、俺はクナイで再不斬の足を斬るのをやめて、首切り包丁が届かない距離まで右に飛び退いた。

それなりに出来るみたいだな、やっぱり。それじゃあ

「死ね！」

「んなもんだたるかよ」

こっちが攻撃する前に瞬身の術で距離を詰めて首切り包丁で上から叩き斬ろうとするのはいいけどさ、少し動きが単調じゃないか？

いや、再不斬くらいなら写輪眼で簡単に見切れるけど、それでも動きが単調過ぎて先読みする必要もないんだよ。

なんて言うか……キレてるのか？

アドレナリンが出てテンションが上がってるとしても、俺に向けてくる殺気が尋常じゃねえよ。

「なあ」

「ああん？」

再不斬の攻撃を避けた後結構な距離を取って、敵意もなく再不斬に話し掛けてみたら、案外素直に話は訊いてくれるらしい。

「なんで怒ってんだ？金鶴が殺されればそうなるかもしれないけど、そのキレ方はもっと違う何か……大事な何かが傷付けられた様な……」

カカシ達は……うん、ナルト達の方に集中してるから普通に話しても大丈夫だろ。

白はこっちを見てるけど、あいつなら察してくれるだろうから後から説明すれば大丈夫か。

「デメエに話す義理はねエな」

まあそう切り返してくるのが妥当だよな。

しかしなんだ。

俺たちを襲ってくるってことは俺たちに非がある可能性も無きにしても非ず、か。

でも手を抜く気はない。無論殺す気も。

やっぱり単調な動きで首切り包丁を横薙ぎにするが、そんな単調な攻撃をもらうはずもなく、首切り包丁の上に立って少し休憩。

「くっ」

「遅エよ」

「ぬぐっ！」

首切り包丁を引こうとする再不斬に顔面に渾身の蹴りを入れる。

小さな悲鳴を上げた後、再不斬はボーリングのレーンを転がる様にゴロゴロと転がって行く。

手は抜かない、そう言った。

有言実行のため、俺は転がる再不斬の後ろに回り込み、印を結ぶ。

「火遁・火龍炎弾」

ボウツつと火が龍の如く再不斬へ襲い掛かる。  
これで勝てるだろう。

「水遁・水龍弾」

あら、転がりながら印を結ぶなんて器用なことをする。  
相性的には俺の方が劣勢だが、それだけで押し切れるほど甘くない  
ことはお前もわかってるだろ？  
転がりながらと準備万端で戦闘不能状態へ追いこむために練ったチ  
ヤクラの量、考えてみる。

ジュワ……ボウツ！

水の龍を火の龍が蒸散させ、否応なく再不斬へと襲い掛かる。

「ぐわあああああ！」

「……こんなところか」

焦げて動けなくなった再不斬の襟首を掴み、持ち上げる。

「話せ」

「テメエが放せ……」

あれか、どっちも話してもらっ（放してもらっ）ことを望んでるっ

てか？

そういうのつまんねーから。

「話してくれ、お前をそこまで駆り立てる理由を」

流石に締め上げたままでは話しにくいと思ったのでやっぱり放して、まだギラギラと光る眼を持つ再不斬を睨んだ。

何の理由もないのに人を傷つけようとしてるのなら、それこそ俺は容赦しない。

「……アジト。あそこには俺の仲間がいた。ガトーの部下じゃない、俺の仲間だ」

道具ではない、そう言うかのように、仲間ということを強調された。そしてそれはつまり、俺がその仲間を焼き殺してしまったということである。

任務遂行のためとはいえ、それは不変の事実。

「……そうか」

関係ない命を巻き込んだとは思わない。

事実、再不斬もその仲間というのもガトーに雇われていたのだから。

「悪いな。俺はそれだけではなにも感じない。これは任務だ。遂行するために必要な犠牲も出てくる。まして今回の場合は任務に関係のある人物。遂行するために消した、それだけだ。腹を立てるなら守り切れなかった自分を恨め。俺たちが恨まれるのは筋違いだ」

いや、恨まれるのは俺だけでいいんだ。

忍者なんて恨まれることはあれど、感謝されることは無い。

誰も人氣が欲しくてやっているわけではないのだから、そんなことは百も承知だ。

「……殺せ」

「イヤだね。そんなに死にたければ自分で死ぬ。独りで死ぬことも出来ない弱者が。鬼人の名折れだ」

悪役でいいんだよ、俺は。

英雄<sup>ヒーロー</sup>気取りも悪役<sup>ビル</sup>気取りでも無い、守りたいものだけを守る本当の悪役で。

「……ふつ、そうだな。俺が弱かった。だから仲間1人も守れなかった、それだけだ。うちはタイガとか言ったな。お前はどつする？」

「なにをだよ」

「守りたいものをなくしたときだ」

「……愚問だな。無くさない為に守るんだろうが」

「ああ、そうだな。そんな幻想を抱き続けている……」

そこまで言うとな再斬は自分でクナイで腹を刺した。

無論それだけでは簡単には死ねない。

俺は首切り包丁を拾い上げ、その無様な生き様を切り捨て、優美な死に様へと切り落とした。

「幻想……か」

そうかもしれない。

だからどうしたというわけでもないが、そんな幻想でも抱くのは悪くないだろう。

溺死はしない。

重たい幻想でも、俺の体を浮かせてくれる想いがある。

「会えると良いな、天国で。地獄に行っても見ているよ」

「好きだから！！！」

くそっ！なんで女はこんな身勝手なんだ！

こいつは自分が犠牲になろうとするし、白はあの糞野郎のことが好きとか有り得ねエ！

俺はこんな女好きでもなんでも無いんだよ。

でも……ああ、うぜえ！

あいつに守れて俺に守れないわけがない！

「……なんだ」

なにが起こった。

急に相手の術が解けやがった。

それにあいつもいない。

これはどういうことだ。

「おい、サクラ」

「好きだから！」

……こいつは死ぬまでここでこれを言い続ける気か？

「おい」

「好き……え？なんで私死んでないの？あれ？サスケくん？」

「急に術が解けた。つまり本体がやられたってことだ」

こんなことするのはあいつだけだ。

また余計な真似を。

「あつ、そ、そう、なんだ……」。

（わ、私あんなこと言って……キヤー！恥ずかしい！……キヤー）

……ウザい。

こいつは無視してカカシのところに戻るか。

「おーいサスケエ！そっちも勝ったってばよ？」

も、だと？

「急に消えた、とかじゃないのか？」

「ニッシシ！俺がちゃんとこの手で倒したってばよ！」

俺が負けた？こいつに？

このウストラトンカチ程度に……か？

こいつ……確実に強くなってやがる。それも俺より。」

「……ふんっ」

それがどうした。

俺は復讐のために強くならなければならない。それだけだ。

誰がどのくらい強くなるうが、俺はそれよりも強くなるだけだ。

「サスケはまだ力が強さって勘違いしてるみたいだな……」

強さの捉え方なんて人それぞれ、そういうのもあるんだろう。

まあ今はそんなことどうでもいいや。

土遁で無理矢理即席の墓を近くに立て、墓代わりに首切り包丁を刺してやる。

—まずはこんなものでいいだろう。

「タイガくん！」

「おお、白。ハナビは……まだ寝てるか」

「はい。でも良かったんですか？これで」

「さあな、俺にもわからねえよ。ただ、俺にはこうしてやることしか出来なかっただけだ。英雄ならみんなが幸せな最高のハッピーエンドが迎えられるんだろうけどさ」

「ふふっ、タイガくんはボクにとって最高の悪役ですよ」



照れるぜバカ野郎。

それでもお前がそう思ってくれるなら、俺はそうあり続けるさ。  
例え世界を敵に回しても、な。

「ん……兄さま？服に血が……ええ！？だ、大丈夫です！？」

「騒ぐな騒ぐな。俺の血じゃないから。ほら、ハナビ。こっちに  
来い」

「兄さま！すー……はー……やっぱり兄さまの匂いは大好きです！」

「あんまり嗅ぐなよ？たぶん汗のにおいと混じって臭くなってるか  
ら」

「いえ！そこがまたいいです！」

そうだった、こいつは変態なんだった。

こんなに小さいのに変態って、どういう教育してんだよ。  
……俺のせい？勝手に人のせいにするな。俺は悪くない。

「タイガ！」

「あつ、アンコ先生」

「大丈夫だった？」

「先生が俺のことを一番よくわかってるじゃないですか。大丈夫で  
すよ」

「今の台詞は聞き捨てなりませんね」

「はい。ハナビの方が兄さまのことはよくわかっていきますから」

「……そうかしら？それじゃあこのさい誰が一番か決めてみる？」

「そうですね。ではボクから……世話好き！」

「優しい！」「強い！」「カッコイイ！」「厨二病！」「華麗！」「素敵！」

……なんだそのやつすい褒め言葉は。何の勝負だよ。  
しかも誰だおい、厨二病なんて言ったヤツは。

「もう3人ともやめろ。ほら、俺はさつさと里に帰りたいんだ」

さつさと里に帰る……これはなかなか秀逸だな。  
使えるぞ、どこかで。

とつとこ取っておこう（ハム太郎のコラ）くらいには使える。

「タイガくん、それはないと思います」

「兄さま、ハナビもそれは少ないと思います」

「ごめんタイガ、それは無理だわ」

ええ！？そんなにダメだったか！？

……くそつ。もっと面白い何かを考えなければ。

まあ取り敢えず俺の寒いギャグのお陰で頭が冷えたみたいだし、これでもいいんだよ。

もちろんこれを計算しての寒いギャグだからな？間違えるなよ？

## 第二十話

「タイガくっ！」

「うおっ！いの……こんなところで抱きつくな！」

「だ、抱きついてないわよ！」

いや、どう考えても今走って来て抱きついただろ。

それに今任務から帰って来たばかりなのに、どうしてここにいるんだよ。

「……あれ？もしかして寂しかった？」

「べ、別に！？少し会えないくらいなんともないわよ……！」

「そうか。それなら俺は家に帰ってゆつくり」

「ほら、お腹すいてるでしょ？一楽行くわよ」

寂しかったんならそう言えばいいのに。

素直じゃないなあ、まったく。

「……で、なんであんたたちまでついて来るのよ」

「ボクはついて来ている気はありませんよ。タイガと一緒にいるのがボクの役目なので」

「ハナビも！兄さまのそばにいます！」

言っておくとアンコ先生は来ていない。

まあ任務の報告があるとかで、俺たちはそれをすっぱかしているわけだが、仕方ないだろう。

女の子の要望にこたえるのも男子の務めだからな。

「おっちゃん、ラーメン4つ」

「……ラーメンだけだぞ？」

なんだその意味深な言葉は。

「うちのアヤメはやらん！」ってことなのか？  
いや、そんなつもりはないんだがなあ……。

「ラーメンだけで」

「そこはお世辞でも他にもくださいと言え！」

どっちだよ！今日のおっちゃん　いつもこんな感じだけど　お  
かしいぞ。

「じゃああやめさんもください」

「やらん！」

はあ、このやり取りは一体いつまで続ければいいのだろうか。  
だいたい俺の意志やおっちゃんの意志で決めていい事でも無いだろ。  
あやめさんにはあやめさんの気持ちがあるんだから。

「へいお待ち！」

そんなことは無視してもうラーメンの完成。  
同時に4つカウンターに並べられた。

「いただきます」

「ほ、ほら、食べなさいよ。口開けて。はいぁーん」

「タイガくん、ボクが食べさせてあげますよ」

「兄さま！食べさせてくださいです！」

これ普通に無理だと思うじゃん？

2人にあーんされて1人にあーんするなんて普通無理じゃん？  
でもね、忍者つてすごい。

「影分身の術」

ポボンツと3人の影分身が出てくる。

それをいの、白、ハナビに分散させ、それぞれやらせたいことをやらせている間に俺はラーメンを堪能する。

経験は元に戻ったら俺に還元されるから不公平でも気休めでも無いしな。

「タイガ、ほら。もっと大きく口開けて。ってどこ触ってんのよ、こんなところで……。や、やめなさいよ……。あとで、ね……」

おいこら、人の体で遊ぶなよ？

俺は変態だが紳士だ。

こんなところで女子の体を触るなんて有り得ないからな？

「タイガくん、やっぱり口移しがいいんですか？仕方ありませんね。もぐもぐ……」

誰もそんな事は言っていないぞ、白。

「ふうふうしてくださいです。あ……あちちつ。火傷しました……舐めてくださいです」

意図的に口の周りにラーメンつけさせてるなよ。もうお前らしい加減にしてくれ。

これじゃあおちおちラーメンも食べられないじゃないか。

「なあタイガ。ここはいつからお前の愛の巣になったんだ？」

「知りませんよ、そんなこと。俺の方が訊きたいです。俺はラーメンを食べに来てるだけなんですけどね」

「それならなんで影分身を出す必要があるんだ？」

「それはかくかくしかじかで、ミニバンだからですね」

かくじかってミニバンだったっけ？

よく憶えてないな、もう。ミニバンがダイハツかどうかもわからないよ。

「食べたらさっさと出て行け！」

ぴゃー。

俺と残りの3人も一楽の外に放り出された。

まあ腹ごしらえも出来たし、次はなにをしようか。

影分身の経験で俺がいのの何に触ったか教えてくれ？

白の唇の感触を教えてくれ？

ハナビの味を教えてくれ？

そんなことはなかった。なかったことにしたから聞いても無駄だ。

「とりあえずブラブラするか」

街中歩いてれば知り合いにも会えるだろうし、我ながらナイスな提案だな。

「それもそうね」

「そうですね」

「はい！」

ガシッガシッガシッ

なんだその変形ロボットがくつついたような効果音は。

「なんでくつつくんだよ」

いのは右手、白は左手、ハナビは左足。

これで変態戦士・ウルトラタイガーの完成ってか？

ネーミングセンスないし、右の脚部装甲がついてないぞ。

「そ、そっちが言ったんでしょ？」

「そうですよ、タイガくん。自分で言ったんじゃないですか」



「兄さまが言つたです」

いや、俺はそんなことは一言たりとも言っていないのだけれど。くつつかれると歩きにくいし、少し暑いんだよな。まあいいけどさ。

「なんて？」

「「ラブラブしようって」「」

絶句だよ、こいつらの都合のいい耳について。たぶん俺が「黙れ！」と言つても「喋らずご奉仕すればいいんですね？」とか言つてくるに違いない。

「あつ……」

「どうした？」

歩いていると急にハナビが声を出し、指を差す。その先には電柱があつて、隠れてるのはヒナタか。あいつはなにやってるんだ？こつちに来ればいいのに。

「おい、ヒナタ！お前も来いよ」

そして俺の右脚部装甲になつてくれてもいいんだぜ？

「た、タイガくん……お、おかえりなさい……」

「おう、ただいま。元気だったか？いや、元気そうだな」

「（た、タイガくんに出えなかったから元気じゃなかったかも……なんて……ううん！そんなこと言えない！なな、なんて答えればいいのかな……？）」

「どうした？なにかあったか？久し振りなんだからもっと話そうぜ。それとも俺のこと忘れたか？それは困ったな……」

「わ、忘れて、ないよ！」

「お、おう、そうか」

冗談で言っただけで、そんなに大声で否定されるとは思わなかったわ。

「（ああ！もう！あたしのばかばか！タイガくんビックリしてるよね、大きな声出して。変な子って思われてないかな？うう……）」

「まあ元気出せよ。なにがあったか知らないけどさ、俺はヒナタに逢いたかったぞ？」

「（タイガくんがわ、わたしにあいたかった？そ、それって……）」  
ボンッ！

「お、おい、ヒナタ！？」

例の如く、ヒナタは頭から湯気を噴きだした。

毎度毎度のことだが大丈夫なのか、これ？

しばらくしたらいつも立ち直るが、俺が支えなきゃ道に転げてるぞ。

「タイガがそういうこというからそうなるのよ。それにそんな台詞私には言わなかったじゃない。私だって……その……」

「ボクにも言つて欲しいですね」

「ハナビはいつでも会えるようにずっと兄さまのそばにいますっ！」

白はそれこそいつも一緒だから言う機会はないし、ハナビもこう言ってるしな。

「いの」

「な、なによ」

「お前にも逢いたかったぞ。だから任務を早く切り上げて来たんだ」

「あ、あたりまえよっ！」

そうかそうか、当り前か。

それもそれでいいかもな。そんな日常が当り前でも。

「おーいヒナタ。そろそろ起きろよ？」

「あれ……わたし……タイガ、くん？あいたかった……！！」

「うおっ！？ひ、ヒナタ！？どうしたんだよ、急に！」

珍しくヒナタが積極的になり、俺を押し倒してきた。

ん？状況は把握できているがなんでこうなったかがわからんな。

「ひな、た？」

「タイガくん……え？タイガくん？わ、わわ、わたし……！ご、ごめんなさい！」

寝惚けてたのか、ヒナタは我に帰ると俺の上から飛びのいて地面に正座した。

いやあ、積極的なヒナタもかなりいいな。

普段のヒナタも好きだが、ああいうヒナタも悪くない、うん。

「いや、いいけどさ。大丈夫か？」

「う、うん……」

「あいたかったって、本音か？」

「うん……」

「そうか、ありがとな。心配してくれてたんだな。ごめんな、心配掛けて。まあでもほら、俺は帰って来てるし、安心しろよ」

俺はヒナタの手をとり、ニカツと笑い掛けてやる。

こいつの本音なんて滅多に聞ける機会はないし、貴重な機会だったな。

思い出にそっとしまっておこう。

「て……」

「手？もう少し強く握った方がいいのか？」

「あ、あ、あ……」

ボンッ

また湯気を出しやがった。

なんかもつ、頭の中をいじくるしか解決方法が無い様な気がするぞ。

「タイガじゃねエか。なにやってんだ？」

「あつ、帰ってたんだ。おかえりー、タイガ」

見ての通りだよ、シカマル。

それと歩きながらポテチを食べるのは行儀が悪いと何度言えばわかるんだチヨウジ。

「久し振りだな。いや、ヒナタが急に頭から煙出してよ。大変なんだ、いろいろと」

「あー、そりゃめんどうだ。じゃあ俺は」

「まあ待てよ。そう急ぐな。急ぐのはめんどうだろ？」

「そ、そんなことねエよ。ゆっくりすることとめんどくさがることとは違うんだぜ？」

「じゃあゆっくりめんどくさがって行けよ。久し振りにあったんだ

し。なあ、チヨウジ。

（あとでポテチ奢るぞ）

「（ホントだね！？キュピーンッ！）

うん、そうだよシカマル。ゆっくり話でもしていこうよ」

「チツ……仕方ねエな」

ふつつつ、IQ200の天才でも友人の頼みは断れないか。  
でも俺から逃げようとしたしな……あとで詰問してやろう。

チヨウジにポテチを奢るはめになったのだが、この状況を打破出来るならばその程度痛くもかゆくもないさ。

この状況って言うのは女子4人相手に男が俺1人という状況なの。  
いのをシカマルに捌かせればかなり楽になる。

「そう言えばシノさんとキバさんの顔が見えませんか」

「キバはどこか適当に歩いてるとしてもシノは何処かから見てたりするんじゃない？」

「そ、そう言われると見られてる気がするです……」

お前らそれはシノに失礼だぞ？

シノだってどこか違うところで

ぞぞぞっ

「そこか！」

「よくわかったな、タイガ」

「わかるわ！視線が背中刺さってたからな！」

ホントにいるのかよ、シノ。

お前のイメージがどんどん崩れて行くぞ。面白いくらい右肩下がりに。

「どうしてでてこなかったか？何故なら少し出て行きにくかったからだ」

訊いてない！

訊いてないからそんなこと言うな！

声に憂いを含んでる感じがまた悲壮感を拡大させてるから！  
もう自分で自分の首を絞めるのはやめてくれ。

「シノ、あんた……」

「すいません、気付いてあげられなくて」

「ごめんなさいです」

「悪かった、シノ」

「ごめんね、シノ」

「本当にすまなかった、シノ」

「……もうやめてくれ。なぜならそれ以上謝られると泣きたくなくなるからだ」

ホントにすまん。

そこまで追い詰めるとは思わなかったから。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6350o/>

---

双子の弟は麒麟児

2011年8月10日00時41分発行